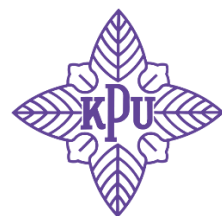


2023年度

専任教員の教育・研究業績

2023. 8



神戸薬科大学
Kobe Pharmaceutical University

目次 (専任教員の教育・研究業績)

	ページ		ページ		ページ
1. 北川 裕之	1	31. 濱名 則子	101	61. 増田 有紀	208
2. 向 高弘	7	32. 赤井 朋子	103	62. 堀部 紗世	210
3. 江本 憲昭	12	33. 竹仲 由希子	109	63. 森田 いずみ	213
4. 内田 吉昭	16	34. 佐々木 直人	112	64. 富田 淑美	216
5. 沼田 千賀子	18	35. 八巻 耕也	115	65. 河野 裕允	219
6. 加藤 郁夫	23	36. 児玉 典子	118	66. 山田 泰之	222
7. 小西 守周	26	37. 灘中 里美	121	67. 山崎 俊栄	225
8. 力武 良行	29	38. 安岡 由美	125	68. 高木 晃	227
9. 長谷川 潤	32	39. 中山 喜明	128	69. 田中 晶子	230
10. 坂根 稔康	35	40. 中島 園美	131	70. 中山 啓	233
11. 奥田 健介	38	41. 古林 呂之	136	71. 福田 正和	236
12. 土反 伸和	42	42. 佐野 紘平	139	72. 寶田 徹	238
13. 小山 豊	47	43. 原 哲也	143	73. 平田 翼	241
14. 國正 淳一	50	44. 河内 正二	146	74. 吉川 祥子	244
15. 玉巻 欣子	52	45. 大山 浩之	149	75. 市野 琢爾	246
16. 上田 昌史	57	46. 都出 千里	152	76. 田中 亨	249
17. 大河原 賢一	61	47. 武田 紀彦	155	77. 安宅 弘司	251
18. 波多野 学	64	48. 山田 健	159	78. 清水 涼平	253
19. 田中 将史	68	49. 多河 典子	162		
20. 白木 孝	71	50. 上田 久美子	165		
21. 山野 由美子	74	51. 三上 雅久	170		
22. 神谷 由紀子	78	52. 猪野 彩	174		
23. 中山 尋量	81	53. 西山 由美	177		
24. 小林 典裕	84	54. 藤波 綾	181		
25. 安岡 久志	87	55. 土生 康司	185		
26. 河本 由紀子	89	56. 前田 秀子	188		
27. 福井 英二	91	57. 竹下 治範	191		
28. 山本 克己	93	58. 鎌尾 まや	196		
29. 國東 ゆかり	96	59. 泉 安彦	202		
30. 小椋 千絵	98	60. 細川 美香	205		

専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 学長・教授	氏名 北川 裕之
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
<p>1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）</p> <p>(1) 本学薬学部学生への教育</p>	1997年4月-現在に至る	<p>学部学生に生化学と分子生物学(2023年-は生命科学)の講義を行っている。</p> <p>1) 担当している分野の進歩は著しいので、下記の編集担当した教科書を用いながら、講義に関連する内容における最近の発見や注目されている事項（新しい遺伝子医薬品の開発例や病因の解明など）について資料を作成し、適宜配付している。</p> <p>2) できるかぎり疾患、診断薬、治療薬に関連する事項を重点的に解説している。</p> <p>3) 薬剤師国家試験の難易度を学生に意識させるために、過去に出題された国家試験の問題を10問程度選び、Webclassを用いて、6回確認テストとして実施している。また、更に知識を定着させるために、この問題の一部を定期試験に出題している。</p> <p>4) 講義終了後にレポート課題を与え、1週間後に解答を提示し、自ら添削を行ったものを提出させている（3回程度）。</p> <p>5) 学生による授業評価は、本学では2004年度より2年に一度行われているが（2021年度からは毎年）、生化学、分子生物学ともに平均以上の評価を得ている。特に、最近行われた6回の授業評価では、いずれもベストティーチャー賞を受賞した（下記の4を参照）。</p> <p>学部学生に生物学系の実習指導を行っている。</p> <p>1) 組換え医薬品に関する理解を深めさせるために、最新の遺伝子工学に関する動向を反映するような実習内容に随時変更を行い、実習テキストも改訂している。</p> <p>2) 実習時間の最後に学生個々と教員が実習内容について質疑応答を行い、その日に行った実習を理解できるようにしている。</p>

		3) 学生による実習評価も毎年行われているが、平均以上の評価を得ておりおおむね好評である。
(2) 本学薬学研究科大学院生の教育研究指導	1994年4月-現在に至る	<p>学部学生に卒業研究の指導を行っている。</p> <p>1) 学生個々に実験に対する目的意識を持たせるよう、随時質疑応答を行っている。</p> <p>2) 論理的な考え方や表現力が身に付くように、定期的に研究内容を学生にまとめさせ、発表する機会を与えている。</p> <p>3) できるかぎり英文で書かれた論文を読むように奨励し、少なくとも年に一度はその内容をまとめて発表する機会を与えている。</p> <p>大学院薬学研究科院生への生化学（生命科学）特論講義と演習及び研究指導を行っている。</p> <p>1) 講義は、最新のデータを取り分かりやすく解説するために、動画を用いたパワーポイントを使用している。</p> <p>2) 演習時には、研究分野の最近の動向を学生に把握させるため、学生が主体的に国際的な雑誌に発表された論文を論理的に説明でき、活発に討論に参加できるように演習日の少なくとも2日前までにはレジュメを全員に配付することを義務づけている。</p> <p>3) 学生に論理的な思考力と表現力が身に付くように、定期的に自分の研究内容を発表させ、研究室での討論を行い、そのことを通じて現在の自分の研究内容の進展状況や問題点も把握出来るように指導している。</p> <p>4) 学生には、少なくとも毎年一回は学会発表できるように指導している。</p>
(3) 医学部学生への教育	2008年4月-2023年3月	神戸大学医学部2年生に生化学（糖質の構造と機能）の講義を行った。
(4) 医学研究科大学院生への教育	2007年4月-現在に至る	神戸大学大学院医学研究科院生に薬物治療学の講義を行っている。
(5) 他の研究科の大学院生への教育	2006年11月 2007年6月 2008年5月 2010年2月	<p>北海道大学大学院先端生命科学の院生に糖鎖生物学の講義を行った。</p> <p>北陸大学大学院薬学研究科院生に糖鎖生物学の講義を行った。</p> <p>京都大学大学院生命科学研究所院生に糖鎖生物学の講義を行った。</p> <p>九州大学大学院システム生命科学研究科院生に糖鎖生物学の集中講義(10時間)を行った。</p>

	2016年6月	名古屋大学大学院工学研究科院生に糖鎖生物学の集中講義（10時間）を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書 NEW生化学第2版（廣川書店、編集：堅田利明、菅原一幸、富田基郎）	2006年3月31日	「IV.4 組換えDNA技術と薬学への応用」を記述した（pp. 481-517）。
スタンダード薬学シリーズII 4 生物系薬学 I. 生命現象の基礎（東京化学同人、日本薬学会編）	2015年3月30日	「第5章 糖質」を記述した（pp. 28-34）。
ニューダイレクション薬学生生化学（京都廣川書店、編著：北川裕之、山田修平）	2020年9月4日	本教科書全体の編集に携わった。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 ベストティーチャー賞（2年ごとに表彰、ただし2014年度は表彰なし、また2018-2020年度は既受賞者の表彰なし、2021年度からは毎年表彰へ変更） 入試部長 大学院主幹 教務部長 入試部長 学生就職部長 キャリア支援部長 副学長	2006年度、2008年度、2010年度、2012年度、2016年度、2021年度 2007年4月1日-2008年3月31日 2008年4月1日-2010年3月31日 2010年4月1日-2012年3月31日 2012年4月1日-2014年3月31日 2014年4月1日-2018年3月31日 2018年4月1日-2019年3月31日 2018年4月1日-2022年3月31日	生化学III(2006年度)、分子生物学I(2008年度)、分子生物学I(2010年度)、分子生物学I(2012年度)、分子生物学Iおよび生化学III(2016年度)、分子生物学I(2021年度) 高大連携プログラムの構築に携わった。 大学院薬学研究科薬科学専攻設置申請に携わった。 薬学6年制におけるカリキュラムの改正に携わった。 高大連携プログラムの拡充、ネット出願の設置、入試制度の改革に携わった。 本学奨学生制度の拡充、4年時生の「キャリアデザイン講座」の発足に携わった。 キャリア支援プログラムの改革に携わった。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
Nadanaka, S., Kinouchi, H., and Kitagawa, H.	論文	J. Biol. Chem. 2018, 293, 444-465. "Chondroitin sulfate-mediated N-cadherin/ β -catenin signaling is associated with basal-like breast cancer cell invasion."
Sakamoto, K., Ozaki, T., Ko, Y.-C., Tsai, C.-F., Gong, Y., Morozumi, M., Ishikawa, Y., Uchimura, K., Nadanaka, S., Kitagawa, H., Zulueta, M. M. L., Bandaru, A., Tamura, J., Hung, S.-C., and Kadomatsu, K.	論文	Nature Chem. Biol. 2019, 15, 699-709. "Glycan sulfating patterns define autophagy flux at axon tip via PTPR σ -cortactin axis."
Nadanaka, S., Hashiguchi, T., and Kitagawa, H.	論文	FASEB J. 2020, 34, 8385-8401. "Aberrant glycosaminoglycan biosynthesis by tumor suppressor EXTL2 deficiency promotes liver inflammation and tumorigenesis through Toll-like 4 receptor signaling."
Kitazawa, K., Nadanaka, S., Kadomatsu, K., and Kitagawa, H.	論文	Commun. Biol. 2021, 4, 114. "Chondroitin 6-sulfate represses keratinocyte proliferation in mouse skin, which is associated with psoriasis."
Koike, T., Mikami, T., Tamura, J., and Kitagawa, H.	論文	Nature Commun. 2022, 13, 7952. "Altered sulfation status of FAM20C-dependent chondroitin sulfate is associated with osteosclerotic bone dysplasia."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
コンドロイチン硫酸鎖による新たな細胞増殖の制御機構	2018年11月	第16回糖鎖科学コンソーシアムシンポジウム
Deciphering the structural and functional diversity of chondroitin sulfate chains in the brain.	2018年12月	Controlling neuronal plasticity; developmental disorders and repair
Chondroitin sulfate-sensing systems that regulate neurite outgrowth	2019年5月	Glyco-Neuroscience Workshop
Deciphering roles of chondroitin sulfate by sugar-remodeling	2020年1月	107th Indian Science Congress
硫酸化グリコサミノグリカンの合成異常による炎症性疾患発症機構の解析	2021年11月	第94回日本生化学会大会

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2006年4月～現在に至る	日本生化学会近畿支部 幹事
2006年4月～現在に至る	プロテオグリカンフォーラム 世話人
2007年4月～2013年12月	FCCA:Forum Carbohydrate Coming of Age 幹事
2007年4月～2013年12月	Trends in Glycoscience and Glycotechnology 編集委員
2007年8月～現在に至る	日本糖質学会 評議員
2008年1月～2011年12月	Journal of Biochemistry, Advisory Board
2008年7月～2013年3月	神戸大学グローバル COEプログラム「次世代シグナル伝達医学の教育研究国際拠点」事業推進担当者
2009年1月～2017年12月	Glycoconjugate Journal 編集委員
2009年4月～現在に至る	神戸がん研究会 世話人
2009年4月～現在に至る	日本結合組織学会 評議員
2009年10月～2011年9月	日本生化学会 代議員
2010年9月～2010年11月	日本薬学会学会賞第1次選考委員
2012年4月～2017年3月	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「疾患糖鎖生物学に基づく革新的治療薬の開発」研究代表者
2012年6月～2013年11月	科学研究費委員会専門委員
2012年11月～現在に至る	日本糖鎖コンソーシアム(JCGG) 幹事
2013年9月～2013年11月	日本薬学会学会賞第1次選考委員
2014年1月～2019年12月	日本生化学会 「生化学」誌企画委員
2015年4月～現在に至る	Scientific Reports 編集委員
2015年11月～2019年10月	日本生化学会 代議員
2015年11月～現在に至る	日本生化学会 評議員
2016年1月～2017年12月	Journal of Biochemistry, Associate Editor
2015年6月～2016年5月	第63回日本生化学会近畿支部例会長
2016年8月～2017年7月	特別研究員等審査会専門委員、国際事業委員会書面審査員・書面評価員、及び卓越研究員候補者選考委員会書面審査員
2017年12月～2019年11月	科学研究費委員会専門委員
2018年1月～2021年12月	Journal of Biochemistry, Editor
2018年4月～現在に至る	「ひょうご産学連携コーディネーター協議会」運営委員および「TLOひょうご協議会」運営委員
2019年6月～2019年11月	国際科学研究費委員会専門委員
2019年4月～2021年3月	日本薬学会 理事
2020年7月～現在に至る	公益財団法人水谷糖質科学振興財団 選考委員
2021年9月～現在に至る	日本生化学会近畿支部長
2021年11月～現在に至る	日本生化学会 代議員
2021年11月～現在に至る	日本生化学会 理事
2021年9月～2021年11月	日本薬学会学会賞第2次選考委員

北川

2022年3月～現在に至る	Frontiers in Cell and Developmental Biology, Associate Editor
2022年6月～現在に至る	Molecular Biology Reports, Associate Editor
2022年7月～現在に至る	Proteoglycan Research 編集委員
2022年5月～現在に至る	公益財団法人日本高等教育評価機構 大学機関別認証評価員
2022年6月～現在に至る	一般社団法人日本私立薬科大学協会 理事
2022年6月～現在に至る	全国薬科大学長・薬学部長会議 常任理事
2022年7月～現在に至る	一般社団法人薬学教育協議会 業務執行理事
2023年6月～現在に至る	日本薬学会 代議員
2023年6月～現在に至る	一般社団法人薬学教育評価機構 理事

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品物理化学研究室	職名	副学長・教授	氏名	向 高弘
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 本学薬学部学生への教育（講義、実習） 物理化学II 放射化学 物理化学系実習		2011年4月～現在	COVID19以前は、授業についてデジタル教材化し、DVDラーニング、e-ラーニングを実施した。また添削アルバイトを活用し、問題演習の添削を実施した。 COVID19対策として授業のオンライン動画とともに各講義毎にGoogleフォームによる確認テストを行った。 現在は、対面授業を中心に講義をzoom配信するとともに、各講義毎にwebclassでの確認テストを行っている。 物理化学系実習では視聴覚教材を使用している。		
(2) 本学薬学部学生への教育（卒業研究指導）		2011年4月～現在	生命・自然現象の解明と疾患の新たな診断法・治療法の開発を目指した研究を指導している。 指導学部学生が以下の学会賞を受賞した(2018-2022年分)。		
		2018年9月8日	・第2回日本核医学会分科会放射性薬品科学研究会 CKJSRS2018トラベルグラント受賞		
		2018年10月13日	・第68回日本薬学会近畿支部大会 優秀ポスター賞		
		2018年11月4日	・The 10th China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences Best Postar Award		
		2021年10月9日	・第71回日本薬学会関西支部大会 優秀ポスター発表賞		
		2022年3月26日	・日本薬学会第142年会 学生優秀発表賞(ポスター発表)		
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育 物理系基礎創薬学特論、物理系創薬学特論		2011年4月～現在	大学院生への講義と研究指導を行っている。 指導大学院生が以下の学会賞を受賞した(2018-2022年分)。		
		2021年10月2日	・第80回日本癌学会学術総会 JCA若手研究者ポスター賞		
		2022年5月26日	・第16回日本分子イメージング学会学術集会 優秀発表賞		
		2022年7月7日	・第59回アイソトープ・放射線研究発表会 若手優秀講演賞		
		2022年9月17日	・第21回放射性医薬品・画像診断薬研究会 優秀発表賞		

(4) 他大学での講義	2016年6月	京都大学大学院薬学研究科の大学院生に基盤物理化学特論の講義を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書 放射化学・放射薬品学（第2版）	2011年12月30日	廣川書店(佐治英郎編集)の第2版の「第5章 原子核反応と放射性同位元素の製造」を執筆した。
新 放射化学・放射医薬品学（改訂第4版）	2016年8月15日	南江堂(佐治英郎ら編集)の改訂第4版の「第1章 原子核と放射能」を執筆した。
新 放射化学・放射医薬品学（改訂第5版）	2021年8月15日	南江堂の改訂第5版の編集を担当するとともに「第1章 原子核と放射能」を執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項 国家試験対策委員会委員	2013年4月～2016年3月	物理系担当として、国家試験対策を実施した。
CBT実施委員会委員	2013年4月～2018年3月	CBT体験受験、本試験、追再試験を実施した。
大学院主幹	2017年4月～2019年3月	大学院教授会、学位論文審査会の運営を担当した。
神戸市消防局員への放射線実習	2018年8月2日	神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
CBT実施委員会委員長	2018年4月～2022年3月	CBT体験受験、本試験、追再試験を実施した。
キャリア支援部長	2019年4月～2022年3月	キャリア支援プログラムの改善を実施した。
神戸市消防局員への放射線実習	2019年9月3日	神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
神戸市消防局員への放射線実習	2021年7月29日	神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
教務部長	2022年4月～現在	教務に関する運営の円滑化を図った。
CBT実施委員会委員	2022年4月～現在	CBT体験受験、本試験、追再試験を実施した。
神戸市消防局員への放射線実習	2022年9月14日	神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Kannaka K., Sano K., Nakahara H., Munekane M., Hagimori M., Yamasaki T., Mukai T.	論文	<i>Langmuir</i> 2020 , 36, 10750-10755 "Inverse electron demand Diels-Alder reactions in the liposomal membrane accelerates release of the encapsulated drugs"
Azuma R., Yamasaki T., Sano K., Munekane M., Matsuoka Y., Yamada K., Mukai T.	論文	<i>Free Radic. Biol. Med.</i> 2021 , 163, 297-305 "A radioiodinated nitroxide probe with improved stability against bioreduction for in vivo detection of lipid radicals"
Haratake Y., Sano K., Tsuchiya M., Minaki K., Munekane M., Yamasaki T., Hagimori M., Mukai T.	論文	<i>Bioorg. Med. Chem.</i> 2022 , 56(15), 116591 "Development of a radioiodinated thioflavin-T-Congo-red hybrid probe for diagnosis of systemic amyloidosis"
Tanaka T., Sano K., Munemura M., Hagimori M., Moriyama R., Yamamoto A., Ozaki K., Munekane M., Yamasaki T., Mukai T.	論文	<i>J. Drug Deliv. Sci. Technol.</i> 2022 , 73, 103473 "A radiolabeled nanoparticle probe coated with hyaluronic acid via electrostatic interaction to diagnose CD44-positive tumors"
Munekane M., Kosugi A., Yamasaki M., Watanabe Y., Kannaka K., Sano K., Yamasaki T., Ogawara K., Mukai T.	論文	<i>J. Drug Deliv. Sci. Technol.</i> 2022 , 75, 103648 "Biodistribution study of indium-111-labeled PEGylated niosomes as novel drug carriers for tumor-targeting."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
がんの光熱治療を目的としたコンドロイチン硫酸被覆金ナノロッドの開発 (優秀ポスター賞受賞)	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部大会
Thioflavin-TとCongo-redの融合化合物を母体とする全身性アミロイドーシス診断用放射性薬剤の開発	2020年11月	第60回日本核医学会学術総会
生体直交型反応による薬物放出を可能とする抗がん剤内封リポソーム製剤の開発 (JCA若手研究者ポスター賞受賞)	2021年10月	第80回日本癌学会学術総会
関節リウマチの診断、治療を指向するマクロファージ標的蛍光標識酸化鉄ナノ粒子の開発 (学生優秀発表賞(ポスター発表)受賞)	2022年3月	日本薬学会第142年会
酸化ストレスに寄与する炭素ラジカルを標的とした放射性プローブの開発及び病態モデルでの評価 (若手優秀講演賞受賞)	2022年7月	第59回アイソトープ・放射線研究発表会

III 学会等および社会における主な活動	
1992年～現在	日本薬学会会員
1997年～現在	日本薬物動態学会会員
1997年～現在	日本核医学会会員
2000年～現在	Society of Nuclear Medicine会員
2005年4月～2010年3月	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 薬剤師国家試験における放射薬学関連問題に対する検討WG 九州・中国・四国支部担当委員
2006年～現在	日本分子イメージング学会会員
2007年～現在	日本癌学会会員
2008年10月～2009年9月	日本核医学会 専門医・教育審査委員会 専門医試験小委員会委員
2009年～現在	Society of Radiopharmaceutical Sciences会員
2009年10月～2013年9月	日本核医学会 専門医・教育審査委員会委員
2011年～現在	日本アイソトープ協会会員
2011年5月～現在	日本薬学会近畿（関西）支部委員
2012年～現在	日本DDS学会会員
2013年1月～2015年3月	日本薬学会物理系薬学部会世話人
2013年2月～現在	日本薬学会代議員
2013年4月～現在	日本薬剤学会会員
2014年9月～現在	日本がん分子標的治療学会会員
2015年5月～現在	金属の関与する生体関連反応シンポジウム（SRM）評議員
2016年4月～現在	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 薬剤師国家試験問題WG委員
2016年11月～現在	日本核医学会分科会 放射性薬品科学研究会 運営委員
2017年10月～2019年9月	日本核医学会評議員

向

2019年4月～現在	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 会長
2019年4月～2022年3月	日本薬学会関西支部幹事
2020年4月～現在	日本アイソトープ協会 企画専門委員会委員
2021年12月～現在	阪和第二泉北病院 放射性薬剤委員会・委員

専任教員の教育・研究業績

所属	臨床薬学研究室	職名	教授	氏名	江本 憲昭
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概	要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2008年4月1日 2009年4月1日 2009年4月1日 2011年4月1日 2013年4月1日 2018年4月1日 2019年4月1日 2022年4月1日 2022年4月1日	「生理学」6年制課程3年次 「薬物治療学Ⅲ」6年制課程4年次 「実務実習事前教育」6年制課程4年次 「処方解析」6年制課程6年次 「機能形態生理学」6年制課程2年次 「薬物治療学Ⅳ」6年制課程3年次 「薬物治療学Ⅴ」6年制課程4年次 「機能形態学Ⅱ」6年制課程1年次 「ロジカル思考演習Ⅰ」6年制課程1年次	講義では視覚的な理解を促すために図表や写真を含めたパワーポイントファイルを提示しながら進めている。講義前にパワーポイントファイルの内容をプリントし、一部穴埋め形式にして配布している。講義内容については、臨床医としての経験に基づき、具体的な疾患や症例を提示しながら最近の臨床エビデンスなどを交えるなど、学生の学習意欲を高める工夫を行っている。また、知識を定着させる目的で、国家試験の問題を改変したものを講義終了前に提示し、その内容を解説している。	
2 作成した教科書、教材、参考書		2008年4月1日 2009年4月1日 2010年4月1日 2011年4月1日 2012年4月1日 2013年4月1日 2014年4月1日 2015年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製 最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製 最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製 最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製 最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製 最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製 最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製 最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製		

	2016年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製
	2017年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製
	2018年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製
	2019年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリントとスライドを作製
	2020年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリント、スライドとeラーニング用の動画を作成
	2021年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリント、スライドとeラーニング用の動画を作成
	2022年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリント、スライドとeラーニング用の動画を作成
	2023年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリント、スライドとeラーニング用の動画を作成
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2015年4月～2017年3月	大学院主幹
	2017年4月～2019年3月	入試部長
	2019年4月～2022年3月	学生部長
	2022年4月～現在	学生支援センター長
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Ramadhiani R, Ikeda K, Miyagawa K, Ryanto GRT, Tamada N, Suzuki Y, Kirita Y, Matoba S, Hirata KI, Emoto N.	論文	Endothelial cell senescence exacerbates pulmonary hypertension by inducing juxtacrine Notch signaling in smooth muscle cells. iScience. 2023 Apr 11;26(5):106662. doi: 10.1016/j.isci.2023.106662.
Haryono A, Ikeda K, Nugroho DB, Ogata T, Tsuji Y, Matoba S, Moriwaki K, Kitagawa H, Igarashi M, Hirata KI, Emoto N.	論文	ChGn-2 Plays a Cardioprotective Role in Heart Failure Caused by Acute Pressure Overload. J Am Heart Assoc. 2022 Apr 5;11(7):e023401. doi: 10.1161/JAHA.121.023401.
Ryanto GRT, Ikeda K, Miyagawa K, Tu L, Guignabert C, Humbert M, Fujiyama T, Yanagisawa M, Hirata KI, Emoto N.	論文	An endothelial activin A-bone morphogenetic protein receptor type 2 link is overdriven in pulmonary hypertension. Nat Commun. (2021) 12:1720. doi: 10.1038/s41467-021-21961-3.
Adhikara IM, Yagi K, Mayasari DS, Suzuki Y, Ikeda K, Ryanto GRT, Sasaki N, Rikitake Y, Nadanaka S, Kitagawa H, Miyata O, Igarashi M, Hirata KI, Emoto N.	論文	Chondroitin Sulfate N-acetylgalactosaminyltransferase-2 Impacts Foam Cell Formation and Atherosclerosis by Altering Macrophage Glycosaminoglycan Chain. oscler Thromb Vasc Biol. (2021) 41:1076-1091. doi: 10.1161/ATVBAHA.120.315789.

Barinda AJ, Ikeda K, Nugroho DB, Wardhana DA, Sasaki N, Honda S, Urata R, Matoba S, Hirata KI, Emoto N.	論文	Endothelial progeria induces adipose tissue senescence and impairs insulin sensitivity through senescence associated secretory phenotype. Nat Commun. (2020) 11: 481. doi: 10.1038/s41467-020-14387-w.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
肺高血圧症の薬物治療	2023年・6月	第8回 日本心血管協会 (JCVA) 学術集会
高血圧症・肺高血圧症マネジメントにおける喫煙問題 ー神戸薬科大学における禁煙支援の取り組みー	2022年・10月	第16回 日本禁煙学会学術集会
肺高血圧症に対する創薬ターゲットの探索と臨床応用	2022年・6月	第22回日本抗加齢医学会総会
Sotatercept: a new therapeutic approach for patients with pulmonary arterial hypertension by rebalancing BMP/activin signaling	2022年・3月	第86回日本循環器学会学術集会
エンドセリンのトランスレーショナルリサーチ	2021年・10月	第53回日本臨床分子形態学会
III 学会等および社会における主な活動		
1987年6月～現在	日本内科学会	(2002年9月～現在：日本内科学会認定内科医、2014年12月～現在：日本内科学会総合内科専門医)
1987年4月～現在	日本循環器学会	(2004年3月～現在：日本循環器学会認定循環器専門医、2015年4月～2020年3月：日本循環器学会評議員)
2000年10月～現在	日本高血圧学会	(2009年10月～現在：日本高血圧学会評議員、2010年10月～現在：日本高血圧学会専門医)
2004年4月～現在	日本医学教育学会	
2012年11月～現在	国際心臓研究学会日本部会	(2012年11月～現在：国際心臓研究学会 日本部会 評議員)

江本

2013年9月～現在	International Conference on Endothelin International Advisory Board
2016年4月～現在	日本肺高血圧・肺循環学会 (2016年4月～現在：日本肺高血圧・肺循環学会理事)

専任教員の教育・研究業績

所属 数学研究室	職名 教授	氏名 内田 吉昭
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
数学 I と数学IIにおいて，習熟度別クラスの導入	2008年4月～現在に至る	入学してきた学生の数学における学力(高等学校での数学IIIの履修の有無など)に差があるので，習熟度別の授業を行っている。
統計学 I とIIにおいて，サブノートの作成	2009年4月～2022年3月	統計学をなるべく視覚を使って理解してもらうために，グラフ等を多く使用したサブノートを作成して，授業の補助として使っている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
教えて描いて塗って学ぶ グラフ理論ワークブック 内田吉昭著/日本評論社	2018年7月	
わかりやすい微分積分 内田吉昭/ 熊澤美裕紀共著 ムイスリ出版	2020年2月	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tetsuo Shibuya, Tatsuya Tsukamoto, Tsuneo Ishikawa and Yoshiaki Uchida	論文	Characterizations of pretzel knots which are simple-ribbon (J. Math. Soc. Japan to appear)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Delta unknotting number one knots without ribbon singularity are prime	2018・1	第13回東アジア結び目スクール

内田

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
1988年4月～現在に至る	日本数学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 沼田 千賀子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年～現在	大学院修士課程医療薬科学研修特論においては、緩和医療を中心に薬物療法と患者心理についての講義、ワークを行っている。ワークでは「死生観」について2～3人でのディスカッションを行い、「死」から見えてくる患者心理を感じられるように工夫している。
	2010年～現在	実務実習事前教育においては、5年次に行われる長期実務実習（病院・薬局）にスムーズに取り組めるよう、臨床現場で求められる知識・技能・態度の指導を行っている。また自己の到達度合いが分かるように「ルーブリック評価」を導入している。
	2011年～現在	薬害に関する講義および薬害被害者の体験談を聞く授業を実施し、学生が薬害について深く考え討議する機会となっている。
	2013年～現在	大学院がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン「地域・職種間連携を担うがん専門医療者養成」において、がん医療に従事する薬剤師の養成を行っている。「がん医療薬学特論」の講義・演習で模擬患者を使った服薬指導や海外から多職種連携の研究を行っている専門の先生を招聘し、ワークショップ形式での症例検討を行うなど、実践的な教育に取り組んでいる。
	2016年～現在	1～2年次生対象の「アクティブラボ」の科目では、本学の地域連携サテライトセンターにて隔月で開催している「メディカル・カフェ」に学生が参加し、がん患者やそのご家族、医療従事者と直接話をする機会を設けている。この経験が、医療者としての意識や資質の向上につながっている。
	2019年9月～現在	多職種連携の授業・演習として甲南女子大学看護リハビリテーション学部と共同で行うIPE科目「在宅医療演習」を2015年から打ち合わせを重ね、2019年9月から実施となった。演習で使用する症例は、実際に在宅で活躍している薬剤師5名にインタビューを行い、それを元に作成した。現場に近い内容や問題点を含んだ、実践的な内容になっている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2012年3月15日	薬学生のための基礎シリーズ1 ヒューマニズム薬学入門（共著）
	2011年3月～現在	実務実習事前教育用テキストの作成

	2020年3月～現在	処方解析Ⅰ,Ⅱテキストの作成
	2021年3月～現在	社会薬学Ⅱ,補完代替医療テキストの作成
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2016年2月14日	第10回がんプロシンポジウム「がん患者の立場から、薬剤師教育を考える」(大阪)講演
	2016年10月23日	がんプロ連携7大学合同研修会「神戸薬科大学における「がん哲学学校 メディカル・カフェ」の取り組みと参加者および学生の意識変化について」(大阪)講演
	2016年11月1日	レギュラトリーサイエンスエキスパート研修会「薬学部における薬害教育の取り組み」(東京)講演
	2019年2月24日	文部科学省：多様なニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)養成プラン」事業「青少年へのがん教育～中学生に対するがん教育の実施および生徒の意識変化～」(大阪)講演
	2020年4月18日	がん治療における患者支援のためのSP参加型ワークショップ(広島)講演、タスクフォース
	2021年12月4日	がん治療における患者支援のためのSP参加型ワークショップ、タスクフォース(WEB)
	2022年3月6日	学校におけるがん教育の必修化と社会的効果(姫路)
	2022年11月12日	がん哲学外来カフェ 教育への取り組み(神奈川)
4 その他教育活動上特記すべき事項	2010年4月～現在	OSCE実施委員会 委員長
	2010年1月～2016年	薬学教育者・薬剤師へのFD活動として、タスクフォースとして、薬剤師のためのワークショップin近畿に協力
	2012年4月～2017年3月	がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン「地域・職種間連携を担うがん専門医療者養成」担当
	2014年4月～2016年3月	学生就職委員会 委員

	2015年4月～現在	がん哲学学校 in 神戸 メディカルカフェを開催し、地域のがん教育を推進
	2015年6月～現在	甲南女子大学との連携教育プログラムワーキンググループ委員
	2015年6月～2017年3月	地域連携教育推進ワーキンググループ委員
	2015年4月～現在	神戸薬科大学における人を対象とする研究倫理審査委員会委員
	2017年4月～現在	地域連携サテライトセンター運営委員
	2018年4月～2020年3月	学生委員会 委員
	2021年4月～現在	国家試験対策委員会 委員
	2021年4月～2023年3月	キャリア支援委員会 委員
	2023年4月～現在	学生委員会 委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
沼田千賀子	著書	薬学生のための基礎シリーズ1 ヒューマニズム薬学入門（共著） (2015. 3. 12)
寺岡麗子, 三宅真衣, 伊藤真依, 塩野朋香, 沼田千賀子, 中山みずえ, 岡本禎晃, 平井みどり, 湯谷玲子, 北河修治, 坂根稔康	論文	フィルムドレッシング材による1日1回型フェンタニルクエン酸塩経皮吸収型製剤の半量投与, 日本医療薬学会, 43 (12), 671-679 (2017)

横山郁子, 浅田聖士, 藤本佳昭, 河内正二, 沼田千賀子	論文	中学生に対するがん教育の実施および生徒の意識変化, 日本緩和医療薬学雑誌, 11 (3) : 73-79 (2018)
後藤恵子, 富澤崇, 有田悦子, 沼田千賀子, 野呂瀬崇彦, 井手口直子, 半谷眞七子, 平井みどり	論文	かかりつけ薬剤師に求められるコミュニケーションスタンダード (Pharmaceutical Communication Standard) の構築, 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会誌, 17(2), 17-29(2018)
Hashimoto M., Aogaki K., Numata C., Moriwaki K., Matsuda Y., Ishii R., Tanaka I., Okamoto Y.	論文	Journal of opioid management, 2020,16(4), 247-252. "Factors influencing the prescribed dose of opioid analgesics in cancer patients
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
オピオイド系鎮痛剤の投与量に影響を与える因子の調査研究	2018年2月	第12回緩和医療薬学会 (東京)
スボレキサントの不眠改善効果およびその因子に関する調査	2019年10月	第28回日本医療薬学会年会 (福岡)
新人薬剤師に求められる基本的な社会的スキルに関する研究 —インタビューから得られた 6 年次生の心理—	2020年9月	第5回日本薬学教育学会大会(東京 帝京大学 WEB)
中学生に対する学年縦断的がん教育の実施およびその教育効果	2021年6月	日本医療薬学会 第 4 回 フレッシュヤーズ・カンファランス
新人薬剤師に求められる基本的な社会的スキルに関する研究 —作成したルーブリック形式の自己評価シートの再検討—	2022年8月	第7回日本薬学教育学会大会(WEB)

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2002年5月～現在	日本医療薬学会会員
2005年8月～現在	(社)兵庫県薬剤師会認定 禁煙指導認定薬剤師
2006年4月～2020年5月	兵庫県病院薬剤師会 理事
2006年4月～現在	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会員
2007年3月～現在	日本緩和医療薬学会会員
2007年4月～現在	日本ホリスティック医学協会会員
2007年11月～現在	日本メンタルヘルス協会公認 心理カウンセラー
2009年4月～2017年3月	6年制認定実務実習指導薬剤師
2009年8月～2019年3月	日病薬認定指導薬剤師
2009年10月～2014年10月	がん薬物療法認定薬剤師
2011年4月～現在	ブザン教育協会マインドマップ®アドバイザー
2015年1月～2020年3月	(財)レギュラトリーサイエンスエキスパート認定
2015年4月～2017年3月	日本緩和医療薬学会 広報副委員長
2015年7月～現在	(社)がん哲学外来 監事
2016年1月～現在	(社)がん哲学外来市民学会 がん哲学外来コーディネーター
2016年6月～現在	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会 理事
2018年4月～現在	一般社団法人 日本ファンクショナルダイエット協会 ケトジェニックダイエットアドバイザー
2019年3月～2021年3月	一般社団法人日本医療薬学会代議員
2019年8月～現在	(社)臨床分子栄養医学研究会 認定カウンセラー
2020年7月～現在	一般社団法人日本医療薬学 企画・シンポジウム委員会委員

専任教員の教育・研究業績

所属	病態生化学研究室	職名	教授	氏名	加藤 郁夫
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1)薬学部学生に対する教育		2013年4月～現在		神戸薬科大学3年次生の「内分泌学」、「薬物治療学 I」、「薬物治療学 II」および「臨床生化学実習」を担当している。	
		2022年9月～現在		神戸薬科大学1年次生および2年次生の「ロジカル思考演習IおよびIII」を担当している。	
(2)大学院修士、博士課程学生に対する教育		2013年4月～現在		神戸薬科大学大学院薬学研究科修士課程学生（社会人、聴講生を含む）に対して、「病態解析治療学特論」を、また博士課程学生（社会人、聴講生を含む）においては、「病態薬理生化学特論」を担当している。修士課程においては、講義終了後にレポートの提出を求め、一方、博士課程においては、最終時間に共通のテーマを与えて各学生に考察・発表を行わせ討論を行っている。	
2 作成した教科書、教材、参考書					
(1)講義資料の作成				学部3年次生の「内分泌学」、「薬物治療学 I」および「薬物治療学 II」では、独自のプリントを作成、学生に配布して、基礎から臨床に至る内容を講義している。 大学院生の講義においても学部生と同様に、独自のプリントを作成して、講義している。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
(1) CBT対策委員会委員		2013年4月～2014年3月		CBT対策の実施。	
(2) 実務実習運営委員会委員		2013年4月～2016年3月		実務実習の円滑なる実施。	

(3) 学生就職委員会委員	2014年4月～2016年3月	学生生活や就職活動の支援。
(4) 国家試験対策委員会委員	2014年4月～2016年3月	国家試験対策の実施。
(5) 共同研究委員会委員	2015年4月～2021年3月	共同研究の円滑なる実施。
(6) 教務委員会委員	2016年4月～2018年3月	教務関係の円滑なる運営。
(7) 研究設備等充実委員会委員	2017年4月～2019年3月	研究設備等の整備・充実（2018年3月～2019年4月：委員長）。
(8) 入試委員会委員	2018年4月～2020年3月	入学試験等の円滑なる実施。
(9) 中央分析委員会委員	2019年4月～2021年3月	中央分析機器の運営管理
(10) 教務委員会委員	2020年4月～2022年3月	教務関係の円滑なる運営。
(11) 図書選定委員会委員	2020年4月～2022年3月	図書選定の実施。
(12) 学生委員会委員	2022年4月～現在	学生生活の支援。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kuwahara A, Kuwahara Y, Kato I, Kawaguchi K, Harata D, Asano S, Inui T, Marunaka Y.	論文	Am J Physiol Gastrointest Liver Physiol, 2019, 316(6), G785-G796. : Xenin-25 induces anion secretion by activating noncholinergic secretomotor neurons in the rat ileum.
Maruta K, Takajo T, Akiba Y, Said H, Irie E, Kato I, Kuwahara A, Kaunitz JD.	論文	Dig Dis Sci, 2020, 65(9), 2605-2618. : GLP-2 acutely prevents endotoxin-related increased intestinal paracellular permeability in rats.
Kuwahara Y, Kato I, Inui T, Marunaka Y, Kuwahara A.	論文	Physiol Rep, 2021, 9(4), e14752. : The effect of Xenin25 on spontaneous circular muscle contractions of rat distal colon in vitro.
Kuwahara Y. Takahashi K. Akai M. Kato I. Kozakai T. Asano S. Inui T. Marunaka Y. Kuwahara A.	論文	Peptides, 2022, 147, 170680. : Minimum biological domain of xenin-25 required to induce anion secretion in the rat ileum.

Hosogi S, Kuwahara A, Kuwahara Y, Tanaka S, Shimamoto C, Tagawa N, Kato I, Yoshimoto K, Aoi W, Takata K, Miyazaki H, Niisato N, Tsubo Y, Yagi K, Nakahari T, Marunaka Y.	論文	Biomed Res, 2023, 44(1), 17-29. : Mumefural prevents insulin resistance and amyloid-beta accumulation in the brain by improving lowered interstitial fluid pH in type 2 diabetes mellitus.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
急性拘束ストレス負荷マウスにおけるRubiscolin-6の抗うつ効果	2018年11月	日本薬学会北陸支部第130回例会
Potent Antibacterial Activity of Peptides Designed from Salusin- β and HIV-1 Tat (49-57)	2018年12月	10th International Peptide Symposium / The 55th Japanese Peptide Symposium
Neurogenic relaxation of Xenin on spontaneous circular muscle contractions in rat distal colon	2019年3月	The 9th Congress of Federation of Asian and Oceanian Physiological Societies
Secretory reflex pathway of Xenin-25 in the rat ileum	2019年3月	The 9th Congress of Federation of Asian and Oceanian Physiological Societies
Secretory reflex pathway of short chain fatty acids in the rat distal colon	2020年3月	The 97th Annual Meeting of the Physiological Society of Japan
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1984年1月～現在	日本薬学会会員	
1986年8月～現在	日本ペプチド学会会員	
2006年5月～現在	日本内分泌学会会員	
2014年5月～現在	日本肥満学会会員	
2016年7月～現在	日本神経内分泌学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	微生物化学研究室	職名	教授	氏名	小西 守周
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	微生物学ⅠⅡ 2009年～ 免疫学ⅠⅡ 2012年と2013年度 免疫学 2014年～2021年 生物学系Ⅲ実習 2009年～2013年度 生物学系Ⅱ実習 2014年～2016年度 微生物学実習 2016年～ アクティブラボ 2015年～ 卒業研究指導 2009年～ 大学院講義 2010年～	微生物学Ⅰ、Ⅱについては、アンケート結果に基づき、板書と教科書の併用で講義を進めてきた。いずれの講義に関しても、できるだけ平易な表現を用いることで、理解しやすい授業を心がけている。さらに微生物学Ⅰを含む生物系その他講義との関わりがある内容に関しては、復習を兼ねて質問を行い学生の集中力を維持できるようにしている。講義内容に関しては、薬剤師国家試験の出題範囲なども加味して、限られた講義時間の中に多くの内容を含むように無駄の無い授業を心がけている。また、いずれの講義も対象とする学生の知識レベルに合わせた講義を行うように努めている。微生物学Ⅱでは、例題などの配布を行い、また成績状況に応じ補講プリントの配布も行なうこともしている。免疫学は、2021年度まで講義を行ってきたが2022年度から担当を外れた。担当する実習は、内2016年に生物系Ⅱ実習から微生物学実習に名称が変更された。名称は変更されたものの、微生物の取り扱いに関する実習内容は大きく変更していない。実習では、できるだけ学生に考えることを推奨しており、知識や技術の習得だけではなく実験結果をもとに行う考察に関する指導に比較的多く時間をかけている。アクティブラボも微生物化学研究室として積極的に実施している。毎年、募集人数よりも多くの学生が希望しているため、教員数などを考慮し可能な限り多くの学生に研究を体験してもらっている。卒業研究指導では、学生それぞれにテーマを与え、実験手技のみならず、研究背景の理解、実験原理の理解、結果の解釈、問題点の指摘などを指導することで、研究に必要な思考力の獲得を心がけている。また先行論文の報告、研究の進捗のプレゼンテーションなど、報告会を複数回設けプレゼンテーション力を育んでいる。		
2	作成した教科書、教材、参考書	2015年	下記の教科書の執筆に関わった。 『薬学領域の微生物学・免疫学第2版』（廣川書店）		

3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等	該当無し	
4	その他教育活動上特記すべき事項	2022年	学生部長就任
II 研究活動			
1. 著書・論文等			
	氏名	種別	内容
	Masuda Y, Nakayama Y, Shimizu R, Naito K, Miyamoto E, Tanaka A, Konishi M.	論文	Life Sci. 2023,317:121453. doi:10.1016/j.lfs.2023.121453. "Maitake α -glucan promotes differentiation of monocytic myeloid-derived suppressor cells into M1 macrophages"
	Hasegawa H, Kondo M, Nakayama K, Okuno T, Itoh N, Konishi M.	論文	Biol Pharm Bull. 2022,45(12):1791-1797. doi:10.1248/bpb.b22-00476. "Testicular Hypoplasia with Normal Fertility in Neudesin-Knockout Mice"
	Nakayama K, Yoshida T, Nakayama Y, Iguchi N, Namba Y, Konishi M, Hasegawa H.	論文	Life Sci.2022, 310:121068. doi:10.1016/j.lfs.2022.121068. "Activation of macrophages mediates dietary restriction-induced splenic involution"
	Nakagawa Y, Wang Y, Han SI, Okuda K, Oishi A, Yagishita Y, Kumagai K, Ohno H, Osaki Y, Mizunoe Y, Araki M, Murayama Y, Iwasaki H, Konishi M, Itoh N, Matsuzaka T, Sone H, Yamada N, Shimano H.	論文	Cell Mol Gastroenterol Hepatol. 2021,11(4) 949-971.doi:10.1016/j.jcmgh.2020.11.004. "Enterohepatic Transcription Factor CREB3L3 Protects Atherosclerosis via SREBP Competitive Inhibition."

Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M.	論文	Int immunopharmacol. 2019, 67:408-416. doi: 10.1016/j.intimp.2018.12.039. "Maturation of dendritic cells by maitake α -glucan enhances anti-cancer effect of dendritic cell vaccination."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
分泌タンパク質neudesinは炎症性マクロファージに作用し Jak/Stat/iNOS経路を抑制する	2022年3月	日本薬学会 第142年会
Fgf21は胸腺髄質上皮細胞の分化成熟を促進し、樹状細胞への 組織特異的自己抗原の移行を誘導することで、中枢性免疫寛 容に貢献する。	2022年3月	日本薬学会 第142年会
分泌因子neudesinの脳梗塞における生理的役割の検討	2022年3月	日本薬学会 第142年会
食餌性肥満とニコチンによって誘発される筋萎縮と代謝変化 におけるFgf21の生理的意義	2022年3月	日本薬学会 第142年会
分泌因子Neudesin は樹状細胞の活性を抑制することで、がん の成長を抑制する	2021年3月	日本薬学会 第141年会
III 学会等および社会における主な活動		
2018年4月～2020年3月	BPB編集委員	
1999年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2006年4月～現在に至る	日本肥満学会会員	
2006年4月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 医療薬学研究室	職名 教授	氏名 力武 良行
教育実践上の主な業績		
	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
総合薬学講座	2015年11月～	国家試験対策のポイントを示しながら、分かりやすく講義した。
実務実習事前教育	2015年9月～	医師としての視点からの内容も含めた実習とした。
合同初期体験実習	2016年9月～	チューターとして実習に参画した。
IPW演習	2016年12月～	本学実習担当者及びチューターとして、企画～演習の実施に参画した。
処方解析 I	2018年4月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。
処方解析 II	2018年9月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。
薬物治療学 I	2017年4月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。
薬物治療学 III	2017年9月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。
薬物治療学 IV	2018年9月～	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。
がん薬物療法論	2020年4月～	大腸がんの薬物治療治療及びがんゲノム医療における最新情報を講義した。
機能形態学 I	2022年4月～	末梢神経系及び遺伝子について講義した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
図解 腫瘍薬学（川西正祐/賀川義之/大井一弥編集、南山堂）	2020年8月出版	消化器がんについて執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
臨床・基礎薬学連携シンポジウム	2018年10月21日	薬学教育に関する講演を行った。
『神戸薬科大学研究論集Libra』第18号	2018年12月21日	本学におけるTBLトライアルに関して報告した。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）養成プラン	2017年4月～2022年3月 2019年4月～2022年3月 2019年4月～	実習コーディネーターとして、事業遂行に参画した。 大学院主幹 神戸薬科大学における人を対象とする研究倫理審査委員会委員長

	2019年4月～ 2022年4月～ 2023年4月～	地域連携サテライトセンター運営委員会委員長 キャリア支援部長・キャリア支援委員会委員長 地域連携サテライトセンター長
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Sato J, Horibe S, Kawauchi S, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	<i>J Neurochem</i> 2018, 147(4), 495-513. "Involvement of aquaporin-4 in laminin-enhanced process formation of mouse astrocytes in 2D culture: Roles of dystroglycan and α -syntrophin in aquaporin-4 expression."
Tagashira T, Fukuda T, Miyata M, Nakamura K, Fujita H, Takai Y, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	<i>Arterioscler Thromb Vasc Biol</i> 2018, 38(5), 1159-1169. "Afadin Facilitates Vascular Endothelial Growth Factor-Induced Network Formation and Migration of Vascular Endothelial Cells by Inactivating Rho-Associated Kinase Through ArhGAP29."
Horibe S, Tanahashi T, Kawauchi S, Murakami Y, Rikitake Y.	論文	<i>BMC Cancer</i> 2018, 18(1), 47. "Mechanism of recipient cell-dependent differences in exosome uptake."
Kawauchi S, Horibe S, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	<i>Exp Cell Res</i> 2019, 374(2), 333-341. "A novel in vitro co-culture model to examine contact formation between astrocytic processes and cerebral vessels."
Kawauchi S, Mizoguchi T, Horibe S, Tanaka T, Sasaki N, Ikeda K, Emoto N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	<i>Glia</i> 2023, 71, 467-479. "Gliovascular interface abnormality in mice with endothelial cell senescence."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

Development of a novel anti-inflammatory phototherapy against atherosclerosis	2021年10月	The 19th International Symposium on Atherosclerosis (ISA2021) (Kyoto)
Cytotoxic T-Lymphocyte-Associated Antigen-4 Downregulates Inflammatory Responses and Improves Angiotensin II-Induced Kidney Injury and Abdominal Aortic Aneurysm Formation	2021年10月	The 19th International Symposium on Atherosclerosis (ISA2021) (Kyoto)
Overexpression of cytotoxic T-lymphocyte-associated antigen-4 (CTLA-4) protects against abdominal aortic aneurysm (AAA) formation in mice.	2019年9月	European Society of Cardiology Congress (Paris, France)
Pharmacological blockade of C-C chemokine receptor 4 exacerbates atherosclerosis in apolipoprotein E-deficient mice.	2019年11月	The 91st AHA Scientific Sessions (Philadelphia, USA)
Nectin-Like Molecules as Novel Regulators in Angiogenesis and Atherosclerosis.	2019年3月	9th FAOPS2019 (Kobe)

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1992年5月～	日本内科学会（総合内科専門医、認定内科医）
1992年5月～	日本循環器学会（循環器専門医）
2010年9月～	日本血管生物医学会（評議員）
2011年6月～	日本分子生物学会
2011年7月～	日本動脈硬化学会
2011年9月～	日本生化学会
2016年2月～	日本薬学会

専任教員の教育・研究業績

所属 衛生化学研究室	職名 教授	氏名 長谷川 潤
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
衛生薬学Ⅰ，Ⅱ	2016年4月～	衛生関連4教科については、主教材として独自のプリントを作成し、配布した。穴埋め形式にすることで重要なポイントが明確になるように工夫した。また授業の中で国家試験の過去問（抜粋）にも触れることで、早いうちから国家試験を意識できるようにした。 研究リテラシーは、現在はコロナ禍対応のためオンデマンド講義であるが、レポート課題を工夫することで、授業のコンセプトを再想起・理解できるようにした。 授業評価は、衛生薬学Ⅰ／環境衛生学に関しては2020年度、衛生薬学Ⅱに関して2021年度に行われ、おおむね良好な評価を得ている。 実習に関しては、講義との関連を意識させるような実習講義を行うとともに、薬学モデルコアカリキュラムで「態度」と記載されている項目について、討論とプレゼンテーションのコマを設け、思考力の育成と統合的／実質的な知識の醸成を試みている。（コロナ禍対応のため、現在はレポートに切り替えている。）
衛生薬学Ⅲ	2020年9月～	
環境衛生学	2017年4月～	
研究リテラシー	2020年4月～	
衛生薬学実習	2016年4月～	
2 作成した教科書、教材、参考書		
メディカルサイエンス臨床化学検査学	2014年1月	近代出版
MY衛生薬学	2017年11月	株式会社テコム（2021年3月 改訂第2版）
授業用プリント	2016年4月～2022年10月	上記授業の全てで用いる授業の補助プリントを自作した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Hohjoh H, Horikawa I, Nakagawa K, Segi-Nishida E, Hasegawa H.	論文	Neurosci Lett. 2020, 739, 135406. "Induced mRNA expression of matrix metalloproteinases Mmp-3, Mmp-12, and Mmp-13 in the infarct cerebral cortex of photothrombosis model mice."
Razali N, Hohjoh H, Inazumi T, Maharjan BD, Nakagawa K, Konishi M, Sugimoto Y, Hasegawa H.	論文	Biol Pharm Bull. 2020, 43, 649-662 "Induced prostanoid synthesis regulates the balance between Th1- and Th2-producing inflammatory cytokines in the thymus of diet-restricted mice."
Nakayama K, Yoshida T, Nakayama Y, Iguchi N, Namba Y, Konishi M, Hasegawa H.	論文	Life Sci. 2022, 310, 121068. "Activation of macrophages mediates dietary restriction-induced splenic involution."
Kondo M, Okazaki H, Nakayama K, Hohjoh H, Nakagawa K, Segi-Nishida E, Hasegawa H.	論文	Neurochem Res. 2022, 47, 2839-2855. "Characterization of astrocytes in the minocycline-administered mouse photothrombotic ischemic stroke model."
Hasegawa H, Tanaka T, Kondo M, Teramoto K, Nakayama K, Hwang G-W.	論文	Toxicol Res. 2022, 39, 169-177 "Blood vessel remodeling in the cerebral cortex induced by binge alcohol intake in mice."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
脳梗塞の病態進行における細胞種間相互作用	2021年11月	第94回 日本生化学大会
Cellular communications involved in the fetal alcohol spectrum syndrome	2021年12月	第44回 日本分子生物学会年会

脳梗塞発症後のアストロサイト活性制御に対するミクログリアの役割	2022年3月	日本薬学会 第142年会
胎児性アルコールスペクトラム障害における大脳皮質アストロサイトの反応性制御メカニズム	2022年7月	第49回 日本毒性学会学術年会
エタノールの神経毒性に関わる血管構造の制御	2023年3月	日本薬学会 第143年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1995年10月～現在	日本薬学会会員 (環境・衛生部会：2017年～2018年 財務委員, 2017年～現在 研究戦略委員, 2022年～現在 総務委員会委員長, 2018年～2021年 総務委員, 2019年～2021年 学術誌編集委員, 2022年～現在 試験法出版委員)	
1995年12月～現在	日本生化学会会員 (2013年 関東支部例会 実行委員)	
2002年2月～現在	日本神経科学学会会員	
2008年2月～2023年3月	日本細胞生物学会会員	
2008年3月～現在	日本脂質生化学会会員	
2017年1月～現在	老化促進モデルマウス (SAM) 学会会員	
2017年5月～現在	日本毒性学会会員 (2021年～ 評議員)	
2019年8月～現在	日本神経化学学会会員	
2021年4月～現在	BPB Reports誌編集委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	製剤学研究室	職名	教授	氏名	坂根 稔康
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 学部学生に対する教育		2017年～ 2020年～ 2017年～ 2017年～ 2023年～	教科書のポイントをまとめ、重要単語を記入できるように工夫したプリント、国家試験過去問題をまとめたプリントを作製して、学生に配布している。また、授業で説明する製剤の中で、入手可能なものに関しては購入し、製剤の実物を学生に見せている。 創薬物理薬剤学（3年生前期、兼担） 臨床薬剤学Ⅱ（6年生前期、兼担） 薬学総合講座（4年生後期、兼担） 香粧品学（4年生前期、兼担） ロジカル思考演習Ⅱ（2年生前期）		
(2) 大学院生への教育		2016年～2022年 2016年～	様々な研究テーマや成果に触れることで、知識・見識を深めてもらうために、可能な範囲で、外部の研究者を招聘し、講演を聴いてもらっている。 薬剤学特論（大学院修士課程） 臨床薬剤学特論（大学院博士課程）		
(3) 他大学での講義		2017年～	薬物治療学特論（神戸大学大学院医学研究科） 修士課程の学生約20名を対象に、自分が得た研究結果を中心に解説している。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
(1) ベーシック薬学教科書シリーズ18 「薬物動態学」（化学同人）		2010年4月1日	第3章 薬物の分布 (pp.55 - pp.80)を執筆した。		
(2) 「物理薬剤学・製剤学 -計算の解法-」（廣川書店）		2012年1月10日	共同編集するとともに、第6章 粉体の性質 (pp.29 - pp.53) , 第9章 製剤試験法 (pp.79 - pp.87) を執筆した。		
(3) 「製剤学（改訂第7版）」（南江堂）		2017年4月10日	第6章 薬物の生体内動態 6-2 薬物の分布 (pp.290 - pp.308) を執筆した。		

(4) 「製剤学・物理薬剤学」 (廣川書店)	2017年5月10日	共同編集するとともに、第4章「粉体」(pp.53-pp.74)、第5章「界面現象と分散系」(pp.75 - pp.97)、第6章「レオロジーと高分子」(pp.99-pp.113)を執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2017年4月～2019年3月 2019年4月～2022年3月 2022年4月～	教務委員会委員 教務部長 総合教育研究センター センター長
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Satoru Matsuura, Hidemasa Katsumi, Hiroe Suzukia, Natsuko Hirai, Hidetaka Hayashi, Kazuhiro Koshino, Takahiro Higuchi, Yusuke Yagi, Hiroyuki Kimura, Toshiyasu Sakane, and Akira Yamamoto	論文	<i>Proc. Natl. Acad. Sci. USA</i> , 2018, 115, 10511-10516. "L-Serine-modified polyamidoamine dendrimer as a highly potent renal targeting drug carrier"
Tomohiro Umeda, Akiko Tanaka, Ayumi Sakai, Akira Yamamoto, Toshiyasu Sakane, Takami Tomiyama	論文	<i>Alzheimer's & Dementia</i> , 2018, 4, 304-313. "Intranasal rifampicin for Alzheimer's disease prevention"
Akiko Tanaka, Kentaro Takayama, Tomoyuki Furubayashi, Kenji Mori, Yuki Takemura, Mayumi Amano, Chiaki Maeda, Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Hidemasa Katsumi, Mikiya Miyazato, Kenji Kangawa, Toshiyasu Sakane, Yoshio Hayashi and Akira Yamamoto	論文	<i>Mol. Pharm.</i> , 2020, 17, 32-39. "Transnasal Delivery of the Peptide Agonist Specific to Neuromedin-U Receptor 2 to the Brain for the Treatment of Obesity"
Toshiyasu Sakane, Sachi Okabayashi, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Akiko Tanaka and Tomoyuki Furubayashi	論文	<i>Pharmaceutics</i> , 2020, 12, 1227-1234. "Brain and Nasal Cavity Anatomy of the Cynomolgus Monkey: Species Differences from the Viewpoint of Direct Delivery from the Nose to the"
Mariko Kimoto, Toshiyasu Sakane, Hidemasa Katsumi, Akira Yamamoto	論文	<i>AAPS PharmSciTech</i> , 2021, 22, 262. "Quick and Simultaneous Analysis of Dissolved Active Pharmaceutical Ingredients and Formulation Excipients from the Dissolution Test Utilizing UHPLC and Charged Aerosol Detector"
2. 学会発表		

演題名	発表年・月	学会名
徐放性製剤における水溶性高分子と有効成分の同時定量法の開発	2021年5月	日本薬剤学会第36年会
鼻腔内投与された Oxytocin の脳内移行特性	2021年6月	第37回日本DDS学会学術集会
脳内磁気粒子イメージングのための酸化鉄ナノ粒子の表面設計	2021年9月	第45回日本磁気学会学術講演会
中分子ペプチドを利用した新規肥満治療法の開発：鼻腔内投与後の脳移行性に対するペプチドの安定性の影響	2022年5月	日本薬剤学会第37年会
鼻腔内投与によるoxytocinの脳内送達－Glymphatic systemの影響－	2022年6月	第38回日本DDS学会学術集会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1985年2月～	日本薬学会会員（現在に至る）	
1989年4月～	日本DDS学会会員（現在に至る）	
1992年4月～	日本薬剤学会会員（現在に至る）	
2016年4月～	日本薬学会近畿支部委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬化学研究室	職名	教授	氏名	奥田 健介
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
有機化学I 有機化学III 生薬化学 有機化学IV 合成化学I 医薬品開発 有機化学実習 天然物化学・生薬学実習 ロジカル思考演習I 基礎薬学演習 総合薬学講座 卒業研究 総合医薬品化学特論 化学系創薬学特論		2016年4月－2019年9月 2016年4月－9月 2017年4月－ 2017年9月－2022年3月 2017年4月－2019年9月 2020年4月－ 2016年4月－2022年9月 2023年4月－ 2022年9月－ 2017年1月－ 2016年9月－ 2016年4月－ 2017年4月－ 2016年4月－		有機化学・合成化学の講義においては板書を中心として講義にめりはりをつけ、適宜学生の応答により理解度を確認している。有機化学Iにおいては教室後方からも見やすいように大型の分子模型も活用して立体化学の理解を促す工夫を行っている。 生薬化学においては、生合成も有機化学反応で説明できることを強調して講義を行っている。こちらはパワーポイントファイルを提示しながら進めている。また、補助プリントを作成して活用している。 医薬品開発においては、創薬に携わる企業や規制官庁、さらにアカデミア創薬に携わる実務家を招いて、最新の知見の教授をも行っている。 有機化学実習、天然物化学・生薬学実習においては、こまめに実習室を巡回して実技指導を行っている。また、ディスカッションを行って学生の理解を深めている。 ロジカル思考演習Iにおいては、科学記事や科学論文等に関する「検索・要約・発表」を受講生がトレーニングできるように演習を組み立てている。 総合薬学講座・基礎薬学演習（強化セミナー）においては、有機化学・生薬学系の内容を分担し、ポイントを踏まえた国家試験対策・CBT対策の講義を行っている。 卒業研究においては、学生個々の目的意識を涵養するべく、実験研究に対して責任を持って取り組めるように工夫している。また研究に関連する原著論文を選んで批判的に読解し、その内容を発表する機会を設けている。 総合医薬品化学特論・化学系創薬学特論においては最新の創薬化学・ケミカルバイオロジー研究を踏まえた内容を盛り込んで、必ずしも本分野を専門としない大学院学生にもこれら領域の最先端に触れられるように工夫している。	
2 作成した教科書、教材、参考書					
有機化学実習書 天然物化学・生薬学実習書		2017年4月－2022年9月 2023年4月－		2017年度より新しく生薬化学の内容を取り入れた「有機化学実習書」の作成を行い、2018年度以降毎年度改訂を行った。 カリキュラム改定に伴い、2023年度より有機化学を外したうえで生薬学の内容を取り入れた「天然物化学・生薬学実習書」を作成した。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
特になし					

<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p> <p>高等学校生徒への教育</p> <p>他大学学生への教育</p>	<p>2016年8月, 2018年8月, 2021年6月, 2022年7月, 2022年12月</p> <p>2019年7月, 2019年12 月, 2021年7月, 2022年 7月, 2023年1月, 2023 年7月</p>	<p>高等学校生徒に対して、くすりの開発に関する講義、薬学の紹介に関する講義、 ならびにキャリア教育講演を行った。</p> <p>中京大学にて薬学関連領域に関する「法学」および「日本国憲法」の講義を行っ た。</p>
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
K. Okuda, B. G. M. Youssif, R. Sakai, T. Ueno, T. Sakai, T. Kadonosono, Y. Okabe, O. I. A. R. Salem, A. M. Hayallah, M. A. Hussein, S. Kizaka-Kondoh, H. Nagasawa	論文	<i>Heterocycles</i> 101 (2), 559-579 (2020). “Development of Near-infrared Fluorescent Probes with large Stokes shift for Non-Invasive Imaging of Tumor Hypoxia”
I. Takashima, Y. Inoue, N. Matsumoto, A. Takagi, K. Okuda	論文	<i>Chem. Commun.</i> 56 (87), 13327-13330 (2020). “A fluorogenic probe using a catalytic reaction for the detection of trace intracellular zinc”
A. Takagi, K. Usuguchi, I. Takashima, K. Okuda	論文	<i>Org. Lett.</i> 23 (11), 4083-4087 (2021). “Total Synthesis of Antiausterity Agent (±)-Uvaridacol L by Regioselective Axial Diacylation of a <i>myo</i> -Inositol Orthoester”
T. Sakai, Y. Matsuo, K. Okuda, K. Hirota, M. Tsuji, T. Hirayama, H. Nagasawa	論文	<i>Sci. Rep.</i> 11 , 4852 (2021). “Development of antitumor biguanides targeting energy metabolism and stress responses in the tumor microenvironment”
K. Okuda, I. Takashima, A. Takagi	論文	<i>J. Clin. Biochem. Nutr.</i> 72 (1), 1-12 (2023). “Advances in reaction-based synthetic fluorescent probes for studying the role of zinc and copper ions in living systems”
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

Development of Drugs for Modulating Endoplasmic Reticulum Stress Response	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress
がんの低酸素イメージング	2020年10月	第79回日本癌学会学術総会
細胞内亜鉛イオンの高感度検出プローブの開発	2020年11月	生命金属に関する合同年会 (ConMetal 2020)
亜鉛触媒反応を応用した細胞内亜鉛イオンの高感度検出プローブの開発	2021年8月	第22回日本亜鉛栄養治療研究会学術集会
栄養飢餓耐性を解除する(±)-Uvaridacol L の全合成と合成類縁体の活性評価	2021年9月	第63回天然有機化合物討論会
3. その他		
演題名	発表年・月	行事名
ガス状シグナル分子のクロストーク解明を可能とするマルチカラー蛍光イメージングプローブの開発	2018年3月	東京生化学研究会平成29年度助成研究報告会
がんのストレス応答系に関するケミカルバイオロジー研究	2018年3月	平成29年度 神戸薬科大学・武庫川女子大学薬学部 研究合同発表会
がんのストレス応答系を標的とするケミカルバイオロジー研究	2019年2月	神戸大学×神戸薬科大学 合同シンポジウム
がん微小環境ならびにストレス応答系に関するケミカルバイオロジー研究	2019年7月	第17回関西バイオ創薬研究会
高感度亜鉛および銅蛍光プローブの開発	2022年1月	令和3年度産学官交流ミーティング

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
1995年12月～現在	日本薬学会会員
2009年2月～現在	日本がん分子標的治療学会会員
2011年10月～現在	日本分子イメージング学会会員
2012年1月～現在	国際癌治療増感研究協会会員
2016年5月～現在	日本薬学会近畿支部委員
2018年7月～現在	日本薬剤師会および兵庫県薬剤師会会員
2020年4月～現在	国際癌治療増感研究協会理事

専任教員の教育・研究業績

所属 医薬細胞生物学研究室	職名 教授	氏名 士反 伸和
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年～2016年	2年次生に対し「生薬化学実習」の授業を担当し、天然物の抽出や分析、生薬の確認試験や純度試験など、生薬に関する基礎的な事柄を実際に作業・習得させることを行った。実習での手技などについてパワーポイントで解説するとともに、実験作業について各学生に細やかに指導した。さらに、得られた結果から考察に至る部分については、教卓で各学生ごとに説明させ、適宜指導を行うことで考察力を高めるよう工夫を行った。
	2010年～2015年	1年次生に対し「薬用資源学」を担当し、それぞれの植物の器官から得られる医薬品原料についてなど、薬用となる資源の講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや前回の復習問題で適宜復習を促すなどの工夫を行った。
	2014年～2016年	2年次生に対し「生薬化学」を担当し、薬用植物から得られる化合物の構造、薬効、その生合成経路などの講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや前回の復習問題で適宜復習を促すなどの工夫を行った。
	2015年～2016年	4年次生に対し「漢方医学」を担当し、漢方の基礎となる概念などについて、講義を行った。パワーポイントでイラストを使用し視覚的にわかりやすくするとともに、概念のわかりにくい部分などについて教科書を中心として読み進めることで理解を促すなどの工夫を行った。

	2017年～2021	1年次生に対し「基礎生命科学」を担当し、細胞内小器官やアポトーシスなど細胞に関する基礎的な内容の理解と定着とを目指して講義を行った。パワーポイントでイラストを使用するとともに、Youtubeなどのムービーも紹介して視覚的にわかりやすくすることを心がけて取り組んだ。また、講義中の学生への質問で理解度を把握し、小テストや確認問題で適宜復習を促すなどの工夫を行った。2021年度の講義内容に対して、ベストティーチャー賞を受賞した。
	2017年～現在	3年次生に対し選択科目として「薬用資源学」を前半の6回、担当している。薬用成分の生合成について、反応機構や生合成に関係する細胞生物学など、また遺伝子組み換え植物と医薬品生産などを、パワーポイントでイラストを使用しつつ講義をしている。
	2017年～現在	2年次生に対し「細胞生物学実習」を担当し、細胞分裂や植物組織、動物組織の観察などの修得を目指して行っている。マウスの解剖などではムービーを見せるなどし、顕微鏡観察では重要な点を説明しつつスケッチを促すなどの工夫を行っている。
	2022年～現在	1年次生に対し「機能形態学I」「機能形態学II」を担当し、細胞分裂やヒトの組織、臓器などに関する講義を行なっている。webclassを用いた復習問題や質問の受付、人体模型を用いた細かな説明などの工夫を行っている。学生も講義への質問などからより深い理解をできたなどの好評を得ている。
	2022年～現在	1年次生に対し「ロジカル思考演習」を担当し、科学に対するさまざまな視点からの考え方や応用、事例などを話したり調べてもらった。提供する情報は最小限とし、できるだけ自分たちで調べ、また議論して深める形をとることで、積極的な参加を促すなどの工夫をした。最後には自分たちで科学クイズを作成し発表してもらい、より考えることができるようになったと考えている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2018年	教科書：基礎から学ぶ植物代謝生化学 1-328 (2018) 羊土社 水谷 正治、士反 伸和、杉山 暁史 (編集)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2019. 09. 17	インターネットを活用した講義改善の取り組み (神戸薬科大学 FD研修会)
	2020. 07. 20	オンライン講義に役立つ様々なツールやサイトの紹介 (神戸薬科大学 FD研修会)
	2021. 07. 19	WebClass使用事例の紹介 (神戸薬科大学 FD研修会)
	2023. 03. 16	アクティブラーニングについて (神戸薬科大学 FD研修会)

4 その他教育活動上特記すべき事項	2012年度	ベストティーチャー賞 (薬用資源学)
	2021年度	ベストティーチャー賞 (基礎生命科学)
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Shitan N., Nishitani S., Inagaki A., Nakahara Y. Yamada Y., Koeduka T.	論文	Plant Gene 2023. 33: 100391 "Gene expression analysis of the ATP-binding cassette transporter ABCD1 in petunia (<i>Petunia hybrida</i>) and tobacco (<i>Nicotiana spp.</i>)"
Yamada Y., Nakagawa A., Sato F., Minami H., Shitan N.	論文	Biosci., Biotechnol., Biochem., 2022, 86:865-869, "Transport engineering using tobacco transporter NtJAT1 enhances alkaloid production in <i>Escherichia coli</i> "
Urui M., Yamada Y., Ikeda Y., Nakagawa A., Sato F., Minami H., Shitan N.	論文	Microb. Cell Fact., 2021, 18:20(1):200 "Establishment of a co-culture system using <i>Escherichia coli</i> and <i>Pichia pastoris</i> (<i>Komagataella phaffii</i>) for valuable alkaloid production"
Yamada Y., Urui M., Oki H., Inoue K., Matsui H., Ikeda Y., Nakagawa A., Sato F., Minami H., Shitan N.	論文	Metab. Eng. Commun., 2021, 13:e00184, "Transport engineering for improving the production and secretion of valuable alkaloids in <i>Escherichia coli</i> "
Yamada Y., Nishida S., Shitan N., Sato F.	論文	Sci. Rep., 2020, 10(1), 18066. doi: 10.1038/s41598-020-75069-7. "Genome-wide identification of AP2/ERF transcription factor-encoding genes in California poppy (<i>Eschscholzia californica</i>) and their expression profiles in response to methyl jasmonate"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

Transport Engineering Improves the Production and Secretion of Valuable Alkaloids in Microorganisms	2023年3月	19th International Workshop on Plant Membrane Biology
有用アルカロイド高生産を目指した大腸菌-ピキア酵母共培養系の応用	2023年3月	日本薬学会第143年会
ナス科植物におけるABC輸送体DサブファミリーABCD1の遺伝子発現解析	2021年10月	第1回トランスポーター研究会関西部会
Transport Engineering Enabled High Production and Secretion of Valuable Plant Alkaloids in Escherichia coli	2021年6月	Metabolic Engineering 14 (国際学会)
タバコおよびペチュニアにおけるABC輸送体ABCD1の遺伝子発現解析	2021年9月	第38回日本植物バイオテクノロジー学会大会
III 学会等および社会における主な活動		
1999年4月～現在に至る	日本農芸化学会会員	
2000年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2000年4月～現在に至る	日本植物バイオテクノロジー学会会員	
2020年9月～現在に至る	日本植物バイオテクノロジー学会代議員	
2003年4月～現在に至る	日本植物生理学会会員	
2007年4月～現在に至る	トランスポーター研究会会員	
2011年4月～2016年7月	トランスポーター研究会世話人	
2016年7月～現在に至る	トランスポーター研究会顧問	
2009年4月～現在に至る	日本生薬学会会員	
2014年4月～現在に至る	日本生薬学会 代議員、関西支部委員	
2020年4月～2021年3月	日本生薬学会 関西支部支部長	

士反

2009年4月～現在に至る	日本薬学会会員
2017年4月～2023年3月	ファルマシア 編集委員
2019年4月～2021年3月	日本薬学会学術誌 編集委員

専任教員の教育・研究業績

所属 薬理学研究室	職名 教授	氏名 小山 豊
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年～ 2018年～ 2017年～	薬理学Ⅲ 薬理学Ⅳ 総合薬学講座
2 作成した教科書、教材、参考書	2018年 12月 2022年 5月 2022年 11月	『薬物治療総論/症候・臨床検査/個別化医療（臨床薬学テキストシリーズ）』 第1章 薄理の作用と体の変化 中山書店 乾 賢一 監修 赤池昭紀 編集 『Cellular, Molecular, Physiological, and Behavioral Aspects of Traumatic Brain Injury The Neuroscience of Traumatic Brain Injury』 Chapter 18, Angiotensin-1/Tie-2 signaling in traumatic brain injury, pp219-230. Academic Press, Elsevier Edited by R. Rajendram et al. 『新しい疾患薬理学』改訂第2版 第4章 循環器内科領域の疾患に用いる薬物 p 271-328 南江堂 岩崎克典、徳山尚吾 編集
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Koyama Y, Sumie S, Nakano Y, Nagao T, Tokumaru S, Michinaga S.	論文	Endothelin-1 stimulates expression of cyclin D1 and S-phase kinase-associated protein 2 by activating the transcription factor STAT3 in cultured rat astrocytes. J Biol Chem. 2019. 294:3920-3933.
Michinaga S, Inoue A, Yamamoto H, Ryu R, Inoue A, Mizuguchi H, Koyama Y.	論文	Endothelin receptor antagonists alleviate blood-brain barrier disruption and cerebral edema in a mouse model of traumatic brain injury: A comparison between bosentan and ambrisentan. Neuropharmacology. 2020 175:108182.
Michinaga S, Tanabe A, Nakaya R, Fukutome C, Inoue A, Iwane A, Minato Y, Tujiuchi Y, Miyake D, Mizuguchi H, Koyama Y.	論文	Angiopoietin-1/Tie-2 signal after focal traumatic brain injury is potentiated by BQ788, an ETB receptor antagonist, in the mouse cerebrum: Involvement in recovery of blood-brain barrier function. J Neurochem. 2020 154:330-348.
Koyama Y.	論文	Endothelin ETB receptor-mediated astrocytic activation: Pathological roles in brain disorders. Int J Mol Sci. 2021 22:4333
Michinaga S, Hishinuma S, Koyama Y.	論文	Roles of Astrocytic Endothelin ETB Receptor in Traumatic Brain Injury. Cells. 2023 12:719
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Blockade of endothelin ETB receptor ameliorates blood-brain barrier disruption through increase of angiopoietin-1 after traumatic brain injury in mice	2018年 7月3日	The 18th World Congress of Basical and Clinical Pharmacology
Recovery of blood-brain barrier disruption and reduction of brain edema by BQ788, an ETB receptor antagonist, after traumatic brain injury in mice	2018年 9月16日	第12回 次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム
アストログリアを標的とした脳機能改善薬の開発：BBB保護と脳浮腫の抑制	2019年 3月13日	(社) 予防薬理学研究所キックオフシンポジウム

Bosentan, an endothelin receptor antagonist ameliorates vasogenic edema after traumatic brain injury in mice	2019年 9月22日	The Sixteenth International Conference on Endothelin
BQ788, an endothelin ETB receptor antagonist alleviates blood-brain barrier disruption and brain edema after traumatic brain injury	2021年 10月4日	The Seventeenth International Conference on Endothelin
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010年12月～2014年12月	公益社団法人 日本薬学会代議員	
2011年 ～現在	Neurochemistry International誌 Editorial Advisory Board	
2011年4月～2017年3月	厚生労働省 薬剤師国家試験委員	
2012年 ～現在	The Journal of Pharmacological Sciences誌 Advisory Board	
2012年3月～2018年2月	厚生労働省 医道審議会薬剤師分科会 薬剤師国家試験K・V部会委員	
2012年4月～2014年3月	公益社団法人 日本薬理学会企画教育委員	
2016年1月～2017年12月	公益社団法人 薬学教育協議会 薬理学関連教科担当教員会議 副委員長	
2015年10月～現在	公益社団法人 日本薬理学会代議員	
2020年3月～2021年9月	International Journal of Molecular Sciences誌 Topic Editor	
2022年4月～現在	Biological and Pharmaceutical Bulletin誌 Section Editor	
2022年4月～現在	公益社団法人 日本薬学会関西支部 幹事	
2023年5月～現在	Frontiers in Cellular Neuroscience誌 Associate Editor	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 國正 淳一
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2018年4月～現在に至る	4年次生の地域医療・プライマリケア論の講義を担当している。毎回配布するプリント並びにパワーポイントを利用している。
	2017年7月～現在に至る	5年次の卒業研究Ⅰ並びに6年次の卒業研究Ⅱを担当している。現場の病院あるいは薬局において臨床研究を実施している。臨床研究施設での実際の課題を研究することにより、問題発見能力及びその解決能力の醸成を図っている。加えて、社会人としてのコミュニケーション能力の養成も併せて育成できる。
	2017年9月～現在に至る	4年次生の処方解析学、処方解析演習を担当している。処方解析学では配布するプリント並びにパワーポイントを利用している。処方解析演習では演習問題を配布し、その解説はパワーポイントを利用している。
2 作成した教科書、教材、参考書 薬学生のための病院・薬局実務実習テキスト2018年版（薬ゼミファーマブック）	2018年3月	新人薬剤師・薬学生のための教科書の作成に加わった。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2017年7月～現在に至る	神戸薬科大学 生涯研修企画・運営委員会委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tomohiro Omura, Luna Nomura, Ran Watanabe, Kazuhiro Yamamoto, Shunsaku Nakagawa, Takayuki Nakagawa, Junichi Kunimasa, Ikuko Yano, Kazuo Matsubara	論文	MicroRNA-101 Regulates 6-Hydroxydopamine-Induced Cell Death by Targeting Suppressor/Enhancer Lin-12-Like in SH-SY5Y Cells. <i>Frontiers in molecular neuroscience</i> , 2021, 14, 748026-748036

竹下 治範, 千原 優里, <u>國正淳一</u> , 濱口常男	論文	高齢者の使用性に配慮したPTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼすフィルム素材および厚みの影響, 医療薬学, 2022, 48, 331-339
<u>國正 淳一</u> , 小茂田 昌代	著書	新人薬剤師・薬学生のための医療安全学入門, 薬ゼミファーマブック, 2020年3月
辰見 明俊, 前川 裕希, 小森 由理子, 山本 克己, 濱口 常男, 高橋 一栄, <u>國正 淳一</u>	論文	ニボルマブによる重篤な免疫関連有害事象の発現予測因子としての好中球・リンパ球比および血小板・リンパ球比の有用性 医療薬学 2020, 46, 331-339
Urano K., Ishibashi M., Matsumoto T., Ohishi K., Muraki Y., Iwamoto T., <u>Kunimasa J.</u> , Okuda M.	論文	Impact of physician-pharmacist collaborative protocol-based pharmacotherapy management for HIV outpatients. J Pharm Health Care Sci. 2020, 6, 9-15
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ユビキチンリガーゼHRD1を誘導する化合物の探索と神経細胞死抑制効果の検討	2023年3月	日本薬学会第143年会
潜在的不適切処方の中止維持における退院時薬剤情報提供の有用性	2023年2月	第44日本病院薬剤師会近畿学術大会
カルボプラチンによる血液毒性の発現と投与量算出のための腎機能推算法の関連	2022年3月	日本薬学会第142年会
がん化学療法誘発性悪心・嘔吐の予防を目的としたオランザピンの低用量投与と傾眠発現との関連	2022年1月	第43回日本病院薬剤師会近畿学術大会
一包化錠剤仕分装置 (TABSORT) 使用に伴うテルミサルタン錠の変色とその要因	2021年10月	第31回日本医療薬学会年会
III 学会等および社会における主な活動		
2003年4月～現在に至る	日本医療薬学会認定指導薬剤師	
2005年4月～現在に至る	日本医療薬学会評議員	
2014年6月～現在に至る	日本中毒学会評議員	

専任教員の教育・研究業績

所属 英語第二研究室	職名 教授	氏名 玉巻 欣子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
早期体験学習（1年次必修科目）	2012年4月～現在	病院・薬局訪問のサポート、施設訪問の付添、発表会のサポート、また実習先病院・薬局への挨拶など、円滑な授業運営を目指して。2023年度は全体授業「プロトコル作成」の講義も担当した。「救命救急インストラクター」として学生の救急救命講習の指導も行っている（2023年度は救命救急講習は実施されなかった）
英語I・III（旧カリ1年次必修英語）	2014年4月～2022年3月	大学で学ぶ英語の基礎となる英文法を基礎から学習する授業を実施した。パワーポイントのスライド等も利用して、単調にならず分かりやすい文法授業を心がけた。
英語V・VI（旧カリ2年次必修英語）	2012年4月～2023年3月	薬学生が最低限知っておくべき医学英語語彙・表現の習得、医療系英文読解・速読力の向上を目指す授業を実施した。2013年度からは、英語eラーニングを取り入れた授業を開始し、教員による対面授業とeラーニングを融合したブレンディッド授業を展開した。
実用英語（旧カリ2年次選択英語）	2013年4月～2022年8月	英語eラーニング自己学習によるTOEIC対策に重点を置いた授業（単位認定科目）を担当した。
英語III(2年次必修英語)	2023年4月～現在	薬学生が最低限知っておくべき医学英語語彙・表現の習得、薬学系英文読解力向上を目指す授業を実施している。医学英語語彙学習には英語eラーニングを取り入れ、教員による対面授業とeラーニングを融合したブレンディッド授業を展開している。読解にはやや難易度の高いテキストを使用し、今後の英文論文読解に必要な読解力と考える力の養成に努めている。
英語IV(2年次必修英語)	2023年9月～	薬学生が最低限知っておくべき医学英語語彙・表現の習得、薬学系英文読解力向上を目指す授業を実施する。医学英語語彙学習には英語eラーニングを取り入れ、教員による対面授業とeラーニングを融合したブレンディッド授業を展開する。読解にはやや難易度の高いテキストを使用し、今後の英文論文読解に必要な読解力と考える力の養成に努める。
総合文化演習（旧カリ2年次必修科目）	2015年4月～2023年3月	「患者体験記・闘病記から医療を考える」というテーマでゼミを展開した。ナラティブ・メディスンの枠組みに基づいて闘病記を読み、テーマを設定し、SGD、プレゼンテーション、レポートを通して様々な角度から医療についての考察を深めさせた。

<p>ロジカル思考演習</p> <p>実用薬学英語（4年次選択英語）</p> <p>海外薬学研修</p>	<p>2023年9月～</p> <p>2012年4月～現在</p> <p>2013年4月～現在</p>	<p>「患者体験記・闘病記から医療を考える」というテーマで展開する。ナラティブ・メディシンの枠組みに基づいて闘病記を読み、テーマを設定し、SGD、プレゼンテーション、レポートを通して様々な角度から医療についての考察を深めさせている。グループ毎に研究テーマを決め、発表内容を論理的に組み立てる力を養う。プレゼンテーションでは学生全員に質問、発表の改善点などを毎回書かせ、質疑応答の練習も行う。最終的に発表テーマに基づいたレポートも書かせることにより思考力、文章力の養成も目指す。</p> <p>外国人患者に対する英語での服薬指導に必要な医学・薬学英語の語彙・表現を学ぶ授業を実施している。学生同士のロールプレイ、英文での家庭医学書読解、薬剤師会話のリスニングなど、多角的な方法で医療系英語力増強に努めている。2012年度および2017-2018年度学生評価によるベストティーチャー賞受賞。</p> <p>研修の国内における事前講義と米国ボストン現地での指導を担当している。コロナ禍以前は、マサチューセッツ薬科健康科学大学(MCPHS)での本学の学生による英語プレゼンテーションを企画・指導、またボストン市内の薬局でのフィールドワークを企画・指導していた。2021年度以降は新型コロナ感染症拡大のためボストン研修が中止となり、その代替案として、本学教員、ボストンのMCPHS大学教授と協同して、オンライン講義を実施している。十分な事前学習をすることにより、国内でも英語でレクチャーを聞き、英語で質問する楽しみを学生に体験させることに努めた。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p>	<p>2019年 共著</p> <p>2019年 共著</p> <p>2021年 共著</p> <p>2021年 共著</p>	<p>『薬学生のための英語2』II 研究活動欄参照</p> <p>『これからの薬学英語』II 研究活動欄参照</p> <p>『薬学生のための英語会話』II 研究活動欄参照</p> <p>『第4版 これだけは知っておきたい医学英語の基本用語と表現』II 研究活動欄参照</p>
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p>		<p>II 研究活動欄 2. 学会発表参照</p>
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p> <p>平成24年度私立大学教育研究活性化設備整備事業申請および英語e-ラーニングシステムの管理・運用</p>	<p>2012年～現在</p>	<p>「e-ラーニング教材利用による薬学生の総合的英語力向上」というプロジェクトにて文科省への申請を2012年度に行い採択された。以来、本学の英語e-ラーニングシステムの管理・運用を継続して担当し、学生の英語e-ラーニング推進を図っている。</p>

演習問題解説会担当	2014年3月～2020年2月	入学前教育の一環として英語課題を作成し、提出された課題内容の点検を行い、3月または2月の演習問題解説会で入学生が陥りやすい英語の弱点や、薬学部での学習に必要な英語学習方法についての講義を行った。
2017-2018年度ベストティーチャー賞受賞	2018年	2017-2018年度学生評価によるベストティーチャー賞受賞
入試委員会委員	2015年4月～2017年3月	
薬用植物園運営委員会委員	2016年4月～2018年3月	
学生就職委員会委員	2017年4月～2018年3月	
ハラスメント防止委員会	2015年9月～現在	
国際交流委員会委員	2017年4月～現在	本学が交流協定を締結している米国マサチューセッツ薬科健康科学大学(MCPHS)との連携強化をMCPHS側の教員と共に推進している。
図書館長	2019年4月～現在	本学図書館長として学生の図書館利用の促進、効果的な研究支援ができる図書館を目指している。新図書館構築にも注力している。
神戸大学医学部医学科での医学英語教育	1999年4月～2018年3月	神戸大学医学部医学科5年次「臨床英語」担当（非常勤講師）
日本薬学会平成27年度文部科学省委託事業「薬学教育の改善・充実に関する調査研究」改訂コアカリ英訳作業	2016年1月～2018年3月	「海外の薬学教育との比較調査委員会 改訂コアカリ英訳作業部会」メンバーとして改訂コアカリ英訳を行った。文部科学省 平成28年度 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業「薬学教育の改善・充実に関する調査研究」報告書（平成29年3月）p. 156

II 研究活動

1. 著書・論文等

氏名	種別	内容
金子利雄、堀内正子（責任者）、 <u>玉巻欣子</u> （編著者）、エリック・スカイヤー、板垣正、井原久美子、河野享子、齋藤弘明、高橋和子、竹内典子、田沢恭子、平井清子、吉澤小百合、日本薬学英語研究会編	著書（教科書）	『薬学生のための英語2』 pp. 85-91 (Unit 13). Pharmaceutical Terminology. Units 1～16. (2019) (成美堂)
野口ジュディー（監）、天ヶ瀬葉子、神前陽子、スミス朋子、 <u>玉巻欣子</u> 、堀朋子、村木美紀子	著書（教科書）	『これからの薬学英語』 pp. 26-33 (Lesson 5). (2019) (講談社サイエンティフィック)
金子利雄、エリック・スカイヤー、板垣正、井原久美子、岩澤真紀子、河野享子、齋藤弘明、高橋和子、 <u>玉巻欣子</u> 、平井清子、堀内正子、吉澤小百合、渡辺朋子	著書（教科書）	『薬学生のための英語会話』 Dictation Unit 1～15、Reading comprehension & Listening Comprehension Unit 14. (2021) (東京化学同人)
<u>玉巻欣子</u> 、藤枝宏壽、Randolph Mann	著書（教科書）	『第4版 これだけは知っておきたい医学英語の基本用語と表現』(2021) (メジカルビュー社)

Kinko Tamamaki and Yoshihiko Tauchi	研究ノート	“Japanese Pharmacy Students’ English Comprehension During the Pharmacy Study Abroad Program and Considerations for Effective Preparatory English Lectures” <i>Libra (Journal of Kobe Pharmaceutical University in Humanities and Mathematics)</i> . Vol. 22. pp.1-15. 2022.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
玉巻欣子, 田内義彦「神戸薬科大学における発信型海外薬学研修プログラムの構築と検証—米国薬学部でのプレゼンテーションと薬局フィールドワークの取り組み—」	2018年9月1-2日	第3回日本薬学教育学会（東京）講演要旨集p.123. ポスター発表
玉巻欣子, 田内義彦「米国薬学生から見た日本人薬学生の英語プレゼンテーション」	2019年9月16日	日本社会薬学会第38年会（松山）ポスター発表
Kinko Tamamaki, Yoshihiko Tauchi. Study abroad program as cultural competency education for pharmacy students.	2020年6月1日	第23回日本医学英語教育学会学術集会（高知）新型コロナウイルス感染拡大により学術集会は中止。抄録集での発表 J. of Medical English Education Vol.19 No.2
Kinko Tamamaki, Shoji Kawauchi, Yoshimi Tomita, Yoshihiko Tauchi. Remote Lecture by a Pharmaceutical Professional in the U.S. as an Alternative for “Study Abroad Pharmacy Program”	2021年7月18日	第24回日本医学英語教育学会学術集会（金沢）新型コロナウイルス感染拡大によりオンライン開催。オンラインでの口頭発表（英語） J. of Medical English Education Vol.20 No.2
玉巻欣子「米国薬学部における異文化対応力教育—大学公式ウェブサイトから見た実態報告」	2022年10月1日	日本社会薬学会第38年会（東京）ポスター発表 講演要旨集p.20
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
玉巻欣子「医療系学部における英語教育」（招待講演）	2018年10月7日	日本大学私立大学ブランディング事業「スポーツ日大によるアンチ・ドーピング教育研究拠点確立とポストオリンピックへの展開」体育の日イベント
III 学会等および社会における主な活動		
2008年4月～現在	大学英語教育学会会員	
1999年～現在	日本医学英語教育学会会員	
2009年7月～2014年6月 2018年7月～現在	日本医学英語教育学会理事、医学英語検定試験制度委員	
2014年7月～2018年6月	日本医学英語教育学会評議員、医学英語検定試験制度委員	

玉巻

2015年～現在	日本社会薬学会会員
2016年～現在	日本薬学会会員
2016年～現在	日本薬学教育学会会員
2022年～現在	American Association of Colleges of Pharmacy 会員
2022年～現在	American Association for Applied Linguistics 会員
2020年4月～現在	神戸薬科大学生活協同組合 理事長

専任教員の教育・研究業績

所属 薬品化学研究室	職名 教授	氏名 上田 昌史
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 薬学入門、有機化学系の実習、演習および講義を担当した	2001年度～現在 2009年度～2015年12月 2010年度～2012年度 2012年度～2014年度 2012年度～現在 2014年度～2016年11月 2017年4月～現在 2018年8月～現在	3年次配当(2013年度から2年次)の医薬品化学実習では、医薬品を実際に合成する実習を実施した。また、未知検体の構造決定を化学反応や確認試験を利用して行った。医薬品の性質を深く理解させるために、スモールグループディスカッションを通して使える有機化学について教育した。 2年次配当の有機化学演習では、復習を兼ねた小テストを毎回行い、学生の理解度の状況を把握した上で、問題解答解説を行った。 神戸大学医学部保健学科の学生に、基礎有機化学の講義を行った。高校で学んだ有機化学の内容を大学レベルの視点から解説し、有機化合物の性質に影響を及ぼす官能基について概説した。さらに、習熟度を考慮しながら、医薬品の開発過程や最新の医薬品事情について説明した。 1年次の薬学入門の講義を担当した。解熱鎮痛薬を化学系薬学の観点から講義し、有機化学が生命現象の理解に重要であることを概説した。また、スモールグループディスカッションを実施し、薬学関連科目の密なつながりについて説いた。 3年次配当の医薬品化学(旧有機化学VI)の講義では、医薬品構造と薬理作用の関連性について解説し、薬学における有機化学の重要性について説いた。また、高学年になっても忘れない覚える有機化学ではなく考える有機化学を徹底して説いた。 2年次配当の有機化学IVの講義では、カルボン酸誘導体の反応について講義した。医薬品に多く含まれるカルボニル基の反応を、生体内での反応や医薬品の反応を例に挙げて、学生が興味をもつように心掛けた。 2年次配当の有機化学IIIの講義では、アルケンおよびアルキンの性質や反応について講義した。有機化学の基礎であるので、反応機構を丁寧に何度も繰り返し説明し、学生全体の理解度の向上を目指した。2021年度に授業評価によりベストティーチャー賞に選出された。 4年次配当の夏期集中講義として、合成化学IIを担当した。これまで学修した有機化学関連分野の知識の定着と応用力の醸成のため、複雑な化合物の合成経路の立案をSGD形式で行った。また、学生同士の総合評価も組み入れた評価を行った。

	2022年4月～現在	1年次配当の基礎有機化学の講義を行った。内容は、高校で学んだ有機化学を大学レベルの視点から解説し、1年後期から始まる有機化学への橋渡し教育である。また、生化学への橋渡しとしてアミノ酸や糖についても概説した。
2 作成した教科書、教材、参考書	2001年（毎年改訂） 2015年 2015年 2017年	有機化学系II実習書 スタンダード薬学シリーズII 3 日本薬学会編 化学系薬学 I. 化学物質の性質と反応、東京化学同人、SB023 化学構造と薬理作用 医薬品を化学的に読む 廣川書店、中枢神経興奮薬、脳循環・代謝改善薬 パートナー医薬品化学 南江堂、第3章 複素環化合物、複素環関連医薬品
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		2021年度ベストティーチャー賞受賞
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Nishida Y., Takeda N., Matsuno K., Miyata O., Ueda M.	論文	Eur. J. Org. Chem. 2018, 3928-3935. "Acylation of Amine and Indole Using Chloroform as a Carbonyl Group"
Konishi K., Takeda N., Yasui M., Matsuzaki H., Miyata O., Ueda M.	論文	J. Org. Chem. 2019, 84(21), 14320-14329. "Copper-Catalyzed Cycloisomerization of Cyclopropenylimine for Synthesis of Pyrroles"
Konishi K., Yasui M., Okuhira H., Takeda N.,	論文	Org. Lett., 2020, 22(17), 6852-6857. "Copper-Catalyzed Sequential Cyclization/Migration of Alkynyl Hydrazides for Construction of Ring-Expanded N-N Fused Pyrazolones"
Matsuzaki H., Takeda N., Yasui, M., Okazaki M., Suzuki S., Ueda M.	論文	Chem. Commun., 2021, 57(91), 12187-12190. "Synthesis of multi-substituted 1,2,4-triazoles utilising the ambiphilic reactivity of hydrazones"

Yasui M., Fujioka H., Takeda N., Ueda M.	論文	Org. Lett., 2022, 24(1), 43-47. "Anhydrous Hydrogen Iodide-Mediated Reductive Indolization of In Situ-Generated Cyclopropyl Hydrazones"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
オキシムエーテルを有するシクロプロペン類を基質としたピロール類の新規合成法の開発	2018年・8月	第38回有機合成若手セミナー
Synthesis of pyrazoles from conjugated hydrazone through acid-promoted β -protonation/nucleophilic addition/cyclization/aromatization sequence	2019年・9月	7th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress
連続的閉環－開環反応によるイソキサゾロン合成法の開発	2020年・10月	第70回日本薬学会関西支部大会
環状N-アルコシキプロピオール酸アミドの閉環－官能基化によるイソキサゾロン合成法の開発	2021年・11月	第47回反応と合成の進歩シンポジウム
オキシムエーテルの α 位での極性転換を利用した縮環ピロール合成法の開発	2022年・10月	第48回反応と合成の進歩シンポジウム
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
窒素原子上にヘテロ原子をもつイミンおよびアミドの特性を活用したヘテロ環合成	2018年・1月	近畿化学協会ヘテロ原子部会第3回懇話会（依頼公演）
連続するヘテロ原子を活用した複素環合成	2019年・2月	第11回徳島文理大学薬学部学術講演会（依頼公演）
連続ヘテロ原子の特異な性質を利用した複素環合成	2021年・6月	工学院大学講演会（依頼公演）

窒素-窒素結合が繰り出す多様性を活用した複素環合成	2022年・12月	有機合成化学協会関東支部 学生シンポジウム（依頼公演）
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1999年～現在に至る	日本薬学会会員	
2000年～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2011年～現在に至る	近畿化学協会会員	
2011年2月～現在に至る	有機合成化学協会関西支部幹事	
2009年4月～2011年3月	日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員	
2011年5月～2016年5月	次世代を担う有機化学シンポジウム世話人	
2017年5月～2021年3月	日本薬学会広報委員	
2017年8月～現在に至る	アメリカ化学会会員	
2019年4月～2022年3月	日本薬学会 学術誌編集委員	
2020年4月～現在に至る	日本薬学会 化学系薬学部会役員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬剤学研究室	職名 教授	氏名 大河原 賢一
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1) 学部学生への教育	2018年～ 2018年～ 2018年～ 2018年～ 2020年～ 2018年～	毎回の講義内容に関連する演習問題を宿題として課し、翌週の講義の冒頭で解答・解説を行うことで、復習を促すと共に、遅刻の抑止力となることを期待している。 薬物動態学1（3年次前期） 臨床薬剤学I（4年次前期） アクティブラボ（1～3年次通年） 薬剤学・製剤学実習（3年次後期） 臨床薬剤学II（6年次前期） 総合薬学講座（6年次通年）
(2) 大学院生への教育	2018年～ 2018年～	最新のトピックを取り入れると共に、自分自身の研究生活で経験した様々な事柄（主に失敗談）を披露することで、受講生のモチベーション上昇に繋がればと期待している。 薬剤学特論（大学院修士課程） 臨床薬剤学特論（大学院博士課程）
(3) 他大学での講義	2018年4月～2018年8月 2019年9月2-3日 2020年11月25日	岡山大学薬学部「薬剤学」（3年生前期） 岡山大学大学院自然科学研究科「薬の体内動態とその解析手法について」集中講義 京都大学大学院薬学研究科にて特論講義
2 作成した教科書、教材、参考書		
図解 腫瘍薬学（川西正祐/賀川義之/大井一弥編集、南山堂）	2020年	「マイクロRNAを用いた次世代がん診断」を分担執筆
新規モダリティ医薬品のための新しいDDS技術と製剤化（技術情報協会）	2023年	「ニオソームを利用した抗がん剤の新規デリバリーシステムの設計と開発」を執筆（p. 291-296）

新規モダリティ医薬品のための新しいDDS技術と製剤化（技術情報協会）	2023年	「ニオソームの体内動態評価法」を執筆（p. 505-509）
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	該当なし	
4 その他教育活動上特記すべき事項 神戸薬科大学ベストティーチャー賞受賞	2023年5月15日	
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Y. Kono, A. Fushimi, Y. Yoshizawa, K. Higaki, K. Ogawara	原著論文	Int. J. Pharm., 2022, 623, 121904 "Effects of particle size and release property of paclitaxel-loaded nanoparticles on their peritoneal retention and therapeutic efficacy against mouse malignant ascites"
H. Tanaka, Y. Ochii, Y. Moroto, D. Hirata, T. Ibaraki, K. Ogawara	原著論文	Pharmaceutics, 2022, 14, 2633 Nanocrystal Preparation of Poorly Water-Soluble Drugs with Low Metal Contamination Using Optimized Bead Milling Technology
M. Maruyama, H. Tojo, K. Toi, Y. Ienaka, K. Hyodo, H. Kikuchi, K. Ogawara, K. Higaki	原著論文	J. Pharm. Sci. 2022, 111, 293-297 Effect of doxorubicin release rate from polyethylene glycol-modified liposome on anti-tumor activity in B16-BL6 tumor-bearing mice
S. Tamer, Y. Kono, K. Higaki, T. Kimura, K. Ogawara	原著論文	J. Drug Deliv. Sci. Technol., 2023, 80, 104122 In vivo distribution characteristics and anti-tumor effects of doxorubicin encapsulated in PEG-modified niosomes in solid tumor-bearing mice
Y. Kono, R. Kamino, S. Hirabayashi, T. Kishimoto, H. Kanbara, S. Danjo, M. Hosokawa, K. Ogawara	原著論文	Biomedicines, 2023, 11, 558 Efficient liposome loading onto surface of mesenchymal stem cells via electrostatic interactions for tumor-targeted drug delivery
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

スチレンマレイン酸共重合体 (SMA) で被覆したエマルションの細胞内取り込み経路の検討	2022年5月	第37回日本薬剤学会 (オンライン開催)
磁性リポソームを用いたリポソーム修飾間葉系幹細胞の作製 (1):リポソーム修飾条件の最適化	2022年5月	第37回日本薬剤学会 (オンライン開催)
リポソーム搭載マクロファージの作製に関する基礎的検討-リポソーム組成の最適化とマクロファージの表現型の影響の評価-	2022年6月	第38回日本DDS学会 (オンライン開催)
脂溶性薬物の放出制御を目指したシクロデキストリン含有リポソームの設計:種々のシクロデキストリンを用いた検討	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部大会
Span80あるいはSpan85ニオソームによるパクリタキセル内封PEGリポソームからの放出トリガリングとその機構解析	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2011年4月～2021年3月	日本薬剤学会 FG世話人 (2015年より副リーダー, 2019年よりリーダー)	
2011年4月～	日本薬剤学会 代議員	
2014年4月～	日本DDS学会 評議員	
2017年4月～	日本薬物動態学会 評議員	
2018年4月～	日本薬学会 近畿支部委員	
2021年4月～	日本薬学会代議員 (関西支部)	

専任教員の教育・研究業績

所属	生命有機化学研究室	職名	教授	氏名	波多野 学
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2020.4～現在	「有機化学II」を指導している。有機化合物の構造・性質・反応に関する基本的事項を習得させる。授業ではしばしば生体内の反応や生物活性物質との関連などに触れ、学生に興味を持たせるよう取り組んでいる。		
		2020.4～現在	「機器分析学実習」を指導している。有機化合物の分析を目的とする物質の定性・定量に関する基本的事項を修得させる。PLQの実施や積極的な議論を行い、理解を深める工夫をしている。		
		2020.4～現在	「アクティブ・ラボ」を指導している。薬学における有機化学研究領域を理解してもらうため、研究マインドの醸成と薬学に対するモチベーション向上を目的として指導した。触媒という観点から有機化学の基礎を体験させている。		
		2022.4～2023.3	「有機化学演習」を指導した。代表的な有機化合物の構造・性質・反応、立体構造、脂肪族および芳香族化合物の構造・性質・反応、官能基を持つ有機化合物の性質・反応に関することなど、基本的事項を全般的に修得させた。		
		2022.4～現在	「ロジカル思考演習I」を指導している。薬学生としての意識やモチベーションを高める指導を行った。SGDでは充実したプレゼン資料作成を支援し、クラス内での議論を促し、全体発表会でも活発に質問させている。		
		2020.4～現在	「化学系創薬学特論」を指導している。医薬品創製化学分野の研究内容に関するより高度で専門的な最新的话题を紹介し、専門研究への橋渡しの話題提供や授業を展開している。		

	2020.4～現在	「総合医薬品化学特論」を指導している。有機化学分野から医薬品を眺め、医薬品に対する理解を深める。医薬品合成を行うために必要な有機反応の基礎を習得し、それを応用できることを目的として指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書	2021.11	有機合成のための新触媒反応101 [項目19、80を執筆]、有機合成化学協会編、東京化学同人、ISBN: 9784807920051
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2021.7	ハリマ化成グループ広報誌にて取材記事掲載。Harima Quarterly (HQ), No 147 (2021 SUMMER) 「One Hour Interview」100%を超える価値の創造を目指して 神戸薬科大学 教授 波多野 学
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Manabu Hatano, Xue Zhao, Takuya Mochizuki, Kyogo Maeda, Ken Motokura, Kazuaki Ishihara	論文	Reusable Silica-Supported Ammonium BINsate Catalysts for Enantio- and Diastereoselective Friedel-Crafts-Type Double Aminoalkylation of N-Alkylpyrroles with Aldimines. Asian J. Org. Chem. 2021, 10(2), 360-365.
Jie Qi Ng, Hiro Arima, Takuya Mochizuki, Kohei Toh, Kai Matsui, Manussada Ratanasak, Jun-Ya Hasegawa, Manabu Hatano, Kazuaki Ishihara	論文	Chemoselective Transesterification of Methyl (Meth)acrylates Catalyzed by Sodium(I) or Magnesium(II) Aryloxides. ACS Catal. 2021, 11(1), 199-207.
Hiroyuki Hayashi, Shotaro Yasukochi, Tatsuhiro Sakamoto, Manabu Hatano, Kazuaki Ishihara	論文	Insight into the Mechanism of the Acylation of Alcohols with Acid Anhydrides Catalyzed by Phosphoric Acid Derivatives. J. Org. Chem. 2021, 86(7), 5917-5212.
Hideyuki Ishihara, Jianhao Huang, Takuya Mochizuki, Manabu Hatano, Kazuaki Ishihara	論文	Enantio- and Diastereoselective Carbonyl-Ene Cyclization-Acetalization Tandem Reaction Catalyzed by Tris(pentafluorophenyl)borane-Assisted Chiral Phosphoric Acids. ACS Catal. 2021, 11(10), 6121-6127.

Kai Matsui, Kohei Toh, Manabu Hatano, Kazuaki Ishihara	論文	Multiselective Diels-Alder Reaction of α -Arylacroleins Catalyzed by Boron Tribromide-Assisted Chiral Phosphoric Acids. <i>Org. Lett.</i> 2022, 24(35). 6483-6488.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Development of Chiral Supramolecular Catalysts for Multiselective Diels-Alder Reaction	2019年・3月	Asian International Symposium - Organic and Green Chemistry, The 99th CSJ Annual Meeting (招待講演)
Chiral Macrocyclic O-Shaped Catalysts for Enantioselective Addition of Lithium Acetylides to Simple Ketones	2019年・9月	The 14th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (招待講演)
マルチ選択的反応を制御するキラル酸塩基協奏型触媒の精密設計	2020年・8月	有機合成化学協会関西支部・有機合成夏期セミナー「明日の有機化学合成」(招待講演)
ホウ素Lewis酸-キラルリン酸複合触媒を用いるマルチ選択的 Diels-Alder反応	2022年・9月	第36回若手化学者のための化学道場 師範講演 (主催: 有機合成化学協会中国四国支部)
塩化亜鉛触媒とグリニャール反応剤を用いるニトリルへのアルキル付加反応	2023年・3月	日本化学会第103春季年会2023(野田)
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
III 学会等および社会における主な活動		
1998年4月～現在に至る	日本化学会会員	
2000年4月～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2000年4月～現在に至る	近畿化学協会会員	
2003年4月～現在に至る	日本プロセス化学会会員	
2015年4月～現在に至る	アメリカ化学会会員	

2017年4月～2020年3月	先端錯体工学研究会会員
2010年4月～2012年3月	日本化学会東海支部化学教育協議会委員
2012年4月～2016年3月	日本化学会東海支部代議員
2015年4月～2018年3月	有機合成化学協会東海支部庶務幹事
2016年4月～2020年3月	日本プロセス化学会東海支部幹事
2016年4月～2023年3月	産学研究協力委員会「分子性触媒による高度分子変換技術」第194委員会委員
2017年4月～2020年3月	有機合成化学協会東海支部幹事
2021年4月～現在に至る	日本薬学会関西支部委員
2023年4月～現在に至る	有機触媒研究会会員

専任教員の教育・研究業績

所属	機能性分子化学研究室	職名	教授	氏名	田中 将史
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2023年～現在		基礎物理化学実習（2年次前期）・・・実習内容にとどまらず、他科目との関連性も踏まえた指導を行った	
		2022年～現在		基礎物理化学（1年次前期、兼任）・・・プリント冊子の作成、Webclassを用いた演習を実施した	
		2022年～現在		物理化学 I（1年次後期、兼任）・・・プリント冊子の作成、Webclassを用いた演習を実施した	
		2017年～現在		生物物理化学（3年次前期、兼任）・・・プリント冊子の作成、動画コンテンツを利用した理解の促進を図った	
		2019年・21年・23年		物理系創薬学特論（大学院博士）	
		2014年・16年・22年		物理系基礎創薬学特論（大学院修士）	
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項				2021年度ベストティーチャー賞	

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tanaka M.*, Kawakami T., Okino N., Sasaki K., Nakanishi K., Takase H., Yamada T., Mukai T.	論文	Arch. Biochem. Biophys. 2018, 639: 9-15. “Acceleration of Amyloid Fibril Formation by Carboxyl-Terminal Truncation of Human Serum Amyloid A”
Takase H., Tanaka M.*, Nakamura Y., Morita S., Yamada T., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids 2019, 221: 8-14. “Effects of Lipid Composition on the Structural Properties of Human Serum Amyloid A in Reconstituted High-Density Lipoprotein Particles”
Tanaka M.*, Miyake H., Oka S., Maeda S., Iwasaki K., Mukai T.	論文	Biochim. Biophys. Acta 2020, 1862 (5): 183209. “Effects of Charged Lipids on the Physicochemical and Biological Properties of Lipid-Styrene Maleic Acid Copolymer Discoidal Particles”
Tanaka M.*, Fujita Y., Onishi N., Ogawara K., Nakayama H., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids 2020, 232: 104954. “Preparation and Characterization of Lipid Emulsions Containing Styrene Maleic Acid Copolymer for the Development of pH-Responsive Drug Carriers”
Tanaka M.*, Takarada T., Nadanaka S., Kojima R., Hosoi K., Machiba Y., Kitagawa H., Yamada T.	論文	Arch. Biochem. Biophys. 2023, 742: 109615. “Influences of Amino-Terminal Modifications on Amyloid Fibril Formation of Human Serum Amyloid A”
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
スチレンマレイン酸共重合体 (SMA) 含有脂質エマルジョンの作製と生体内応用の検討	2019年3月	日本薬学会第139年会
AAアミロイドーシス発症の分子基盤の解明	2019年4月	AASAA (AAアミロイドーシスと血清アミロイドA) 研究会

pH応答性を有する脂質エマルション粒子の細胞内分布	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部大会
SAA分子の特徴とアミロイド原性	2021年11月	第8回日本アミロイドーシス学会学術集会
血清アミロイドAの化学修飾が構造特性やアミロイド線維形成に及ぼす影響	2023年3月	日本薬学会第143年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1999年3月～現在	日本薬学会正会員	
2005年8月～現在	日本生化学会正会員	
2007年2月～現在	日本膜学会正会員	
2007年8月～現在	日本ペプチド学会正会員	
2015年3月～現在	AAアミロイドーシスと血清アミロイドA (AASAA) 研究会 幹事	
2022年7月～現在	物性物理化学研究会委員	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 白木 孝
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年9月～2018年2月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、医療現場でのコミュニケーションに関する実習を行った。作成した模擬実例課題を用いて、薬局、病棟での初回面談や服薬指導などが実践できるようにした。教科書などではなかなか理解しにくい部分が多いので、病院などでの実際の自分の経験を基に、学生が病院や薬局での実務実習に行った際に役に立つように実習を行った。
	2013年4月～2021年7月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科1年次学生（2013年度はカリキュラム変更のため2012年度入学2年次学生も同時開講）に対して、医療倫理の講義を行った。1年次学生が医療倫理について考える必要性を理解できるよう、臨床現場で自らが経験してきた具体的な事例を多く紹介し、実際に医療現場で起きていることを、できるだけ臨場感を持って考えてみるができるように講義を行った。
	2014年4月～2021年2月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科6年次学生に対して、機能性食品学の講義を行った。6年次学生対象の科目で実務実習も終了しているので、実際によく使用されている機能性食品を具体的に取り上げ、また臨床現場で問題となり得る医薬品との相互作用についても解説し、より実践的な講義を行った。
	2016年4月～2021年7月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、調剤学の講義を行った。処方箋の見方から始まり、調剤の基本的な流れや注意すべき点等について、具体的な内容に基づいて学習を進め、模擬薬局実習を受けるために必要な基本的な知識を修得できるよう講義を行った。

	2018年9月～2021年1月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、臨床準備教育に相当する模擬薬局実習において、医療現場でのコミュニケーションに関する実習を行った。作成した模擬実例課題を用いて、薬局、病棟での初回面談や服薬指導などが実践できるようにした。教科書などではなかなか理解しにくい部分が多いので、病院などでの実際の自分の経験を基に、学生が病院や薬局での実務実習に行った際に役に立つように実習を行った。
	2018年12月～2019年12月	姫路獨協大学薬学部医療薬学科6年次学生に対して、先端薬物療法論の講義を行った。肝移植後の薬物療法について、免疫抑制剤などの使用法や、肝炎ウイルスに対する薬物治療など、現場で実際に行われている薬物療法を、病院での実際の経験に基づいて講義を行い、学生にとっても臨場感のあるものとなるように努めた。
	2022年4月～現在	1年次学生に対して、薬学入門の第2回から第4回の講義を行った。1年次学生が現在の薬剤師を取り巻く環境について、少しでも興味を持って理解できるよう、臨床現場で自らが経験してきた具体的な事例を含めて紹介し、実際に医療現場で起きていることを、できるだけ臨場感を持って考えてみる事ができるように講義を行った。
	2022年4月～現在	4年次学生に対して、OTCヘルスケア論の第1回から第6回の講義を行った。OTC薬について考える上でも、他の科目で学習してきた知識や考え方は非常に重要であるため、その都度復習としての説明も行い、有機的な知識の連携ができるように努めた。
	2022年4月～現在	4年次学生に対して、薬事関係法規・薬事制度の第2回から第8回の講義を行った。細かい内容が多い科目であるが、具体的な事例を含めることで、興味を持ち理解を助けることができるよう努めた。
2	作成した教科書、教材、参考書	
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等	

4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
簡易懸濁法適用が難しい抗HIV薬の懸濁液の調製について	2019年11月	日本医療薬学会第29回年会
III 学会等および社会における主な活動		
2013年4月～現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員	
2014年4月～現在	兵庫県薬剤師会薬学教育部委員	
2016年6月～2018年5月	兵庫県薬剤師会理事	
2017年6月～現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構運営委員	
2017年6月～2022年3月	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 事務局長補佐	
2018年6月～現在	兵庫県薬剤師会薬学教育部副委員長	
2018年8月～2022年3月	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 WEBシステム検討作業部会委員	
2022年4月～現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 事務局長	
2022年4月～現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 ICT作業部会座長	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 山野 由美子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2022年9月～	1年次生の「基礎実習」として、基礎的な実験手技や基本概念を全員が修得でき、高次学年の実習に繋がられるような内容を構築して実施した。教員に対する実習内容の計画段階での報告や実習後の報告も行き、連携を図った。学生に対する実習レポートのフィードバックもwebclassにて行った。
	2004年4月～現在に至る	「有機化学演習」を受け持ち、有機化学の演習を行っている。電子の動きにより化学反応が説明できることを理解させるために、電子の動きを中心に冊子にまとめて教材とした。
	2017年10月～現在に至る	「合成化学 I」では、有機化学I～IVまでで教えきれていない重要と思われる所を教科書から抜き出し、プリントに要点をまとめて、講義を行った。2020年度からは、生物有機化学分野を担当した。生体成分の性質や反応を化学構造式から考えら得るように講義内容を冊子にまとめ、パワーポイントで講義した。講義で使用したスライド資料に練習問題の答えと解説を入れて、毎週webclassにアップロードした。また、2022年度は、確認テストを2回行い、2023年度は繰り返し自習できる問題をwebclassにアップロードした。
	1985年4月～2021年12月	「機器分析学実習」を指導している。学生がより理解を深められるよう討議を活発に行い、また、関連した国家試験問題も紹介して解説した。
	1985年4月～2021年6月	研究室に配属された学生の研究指導を行った。実験操作法、実験ノート作成の仕方、研究の進め方、文献の読み方など、基本からの指導を行った。また、定期的に報告書を作成させ、卒業前にはパワーポイントを用いて口頭発表を行わせた。
	2007年10月～2019年	「有機化学IV」でカルボニル基の化学を担当した。練習問題を解かせ、学生が理解度をチェックできるよう工夫した。2019年度は、スライドプリントを配り、スライドを用いた授業を行った。削減できた黒板に書く時間分を、反応機構を書かせる時間や問題を解く時間に当てた。

	2009年10月～2017年3月	4年次生に対する授業科目として、「精密有機合成化学」（2016年度まで有機化学Ⅶと称した）の講義を行っていた。医薬品合成を例として、これまでに習った有機化学がどのように応用されているか解説した。CBT受験前であることを意識し、基本的な反応を復習できるよう努めた。また、教材冊子の中には問題を掲載し、自主学習がしやすいよう工夫した。
	2009年10月～2015年3月	2年次生に対する授業科目として、「生物有機化学」の講義を行っていた。生体成分の性質と反応を有機化学的に理解できるよう、黒板にできるだけ構造式を書き、どの官能基がどのように反応するのか解説した。また、要点をまとめた冊子を作成し、教科書のページ数も記載して、自主学習しやすいよう工夫した。
2 作成した教科書、教材、参考書	2022年 2020年～2023年 2009年～2019年 2009年～2018年 2009年～2015年	「基礎実習」の教材作成 「合成化学1」の教材作成 「有機化学系Ⅲ実習書」の作成 「精密有機合成化学」の教材作成：これまでに習った有機化学の知識で理解できる医薬品合成例と、スペクトルを冊子にまとめた。 「生物有機化学」の教材作成：生体成分の性質と反応を有機化学的に理解できるよう要点にまとめた。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
神戸薬科大学FD	2022年5月	新カリキュラムで実施した教育上の新しい試み
神戸薬科大学FD	2022年3月	アクティブラーニングについて
神戸薬科大学FD	2020年10月	AIを用いた入学試験並びに修学状況のIR分析結果の報告と前期遠隔授業に対する学生アンケートの集計結果について
4 その他教育活動上特記すべき事項 なし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Yamano Y., Tanabe, M., Shimada, A., Wada, A.	論文	Mar. Drugs 2022, 20(11), 658. "Total Synthesis of Loroxanthin"
Seki, S., Yamano, Y., Oka, N., Kamei, Y., Fujii, R.	論文	FEBS Lett. 2022, 596(12), 1544-1555. "Discovery of a novel siphonaxanthin biosynthetic precursor in Codium fragile that accumulates only by exposure to blue-green light"
Takatani N., Beppu F., Yamano Y., Maoka T., Hosokawa M.	論文	J. Oleo Sci. 2021, 70, 549-558. "Seco-type β -apocarotenoid generated by β -carotene oxidation exerts anti-inflammatory effects against activated macrophages"
Takatani N., Taya D., Katsuki A., Beppu F., Yamano Y., Wada A., Miyashita K., Hosokawa M.	論文	Mol. Nutr. Food Res. 2021, 65, 200405. "Identification of Paracentrone in Fucoxanthin-Fed Mice and Anti-Inflammatory Effect against Lipopolysaccharide-Stimulated Macrophages and Adipocytes"
Tsuboi, M., Iwasaki, H., Kaya, K., Wada, A., Yamano, Y.	特許	Jpn. Tokkyo Koho (2020), JP 6696060 B1 20200520. "Vitamin A derivative and method for the preparation thereof"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
カロテノイドの結合制御を目指した海洋緑藻の光合成アンテナのin-vivo再構成	2022年9月	第34回カロテノイド研究談話会
セコカロテノイドの合成研究	2021年3月	日本薬学会第141年会
(9E)-Gyroxanthin diesterの全合成	2021年3月	日本薬学会第141年会
Fucoxanthin酸化代謝物の合成と抗炎症効果	2020年3月	日本薬学会第140年会
Siphonaxanthinおよびloroxanthinの全合成	2019年9月	第45回反応と合成の進歩シンポジウム
3. その他		
ヒドロキシメチルカロテノイドの全合成研究	2020年12月	大阪市立大学 人工光合成研究拠点共同利用・共同研究成果報告会 での講演

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
1983年1月～現在に至る	日本薬学会会員
1986年1月～2020年12月	日本ビタミン学会会員
1995年1月～現在に至る	日本カロテノイド研究会会員
2002年4月～2021年12月	有機合成化学協会会員
2014年10月～2020年12月	近畿化学協会会員

専任教員の教育・研究業績

所属	生命分析化学研究室	職名	教授	氏名	神谷由紀子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1)薬学部学生に対する教育		2023年～現在	総合薬学講座I（6年次前期） 授業内容に合わせたプリントの作成、演習問題の実施により理解を促した。		
		2023年～現在	分析化学系実習（2年次前期） 化学物質の化学的分析法・物理的分析法について理論と実験法の習得を促した。		
(2)大学院博士課程学生に対する教育		2023年	物理系創薬学特論（大学院博士） 基礎ならびに最新の知見を織り交ぜた内容を解説した。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項		2023年6月28日 2023年7月19日	甲南大学先端生命工学研究所 FIBER未来大学 なでしこScientistトークにおける公開講演 日経STEAM2023 女性研究者座談会に登壇		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					

氏名	種別	内容
Sato, F.; Kamiya, Y.*; Asanuma, H.*	論文	<i>J. Org. Chem.</i> , 2023, 88, 2, 796-804, "Syntheses of Base-Labile Pseudo-Complementary SNA and L-aTNA Phosphoramidite Monomers"
Asanuma, H.*; Kamiya, Y.; Kashida, H.; Murayama, K.	総説	<i>Chem. Commun.</i> , 2022, 28, 3993, "Xeno nucleic acids (XNAs) having non-ribose scaffolds with unique supramolecular properties"
Kamiya, Y.*; Kamimoto, H.; Zhu, H.; Asanuma, H.*	論文	<i>Sensors</i> , 2021, 21, 1785, "Development of pre-miRNAs modification with FRET dye pair for intracellular visualization of processing intermediates generated in cells"
Kamiya, Y.*; Satoh, T.; Kodama, A.; Suzuki, T.; Murayama, K.; Kashida, H.; Uchiyama, S.; Kato, K.; Asanuma, H.*	論文	<i>Commun. Chem.</i> , 2020, 3, 156. "Intrastrand backbone-nucleobase interactions stabilize unwound right-handed helical structures of heteroduplexes of L-aTNA/RNA and SNA/RNA"
Kamiya, Y.*; Takeyama, Y.; Mizuno, T.; Sato, F.; Asanuma, H.*	論文	<i>Int. J. Mol. Sci.</i> , 2020, 21, 5218, "Investigation of strand selective interaction of SNA-modified siRNA with AGO2-MID"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
非環状型人工核酸による核酸医薬品開発を目指して(招待講演)	2023年7月	生体機能関連化学部会若手の会 第34回サマースクール
非環状人工核酸によるギャップマー型アンチセンス核酸の細胞死抑制	2023年7月	第8回核酸医薬学会年会
非環状型人工核酸が形成するユニークな三重鎖構造	2023年3月	日本化学会第103春季年会
“非環状型人工核酸による天然核酸認識の設計”[シンポジウムオーガナイザー (生体分子の人工設計: タンパク質、RNA、DNA)]	2022年9月	第60回日本生物物理学会年会
“光クロスリンク解析によるDicer-Platform/PAZのRNAコンタクトサイトの探索”	2022年9月	第16回バイオ関連化学シンポジウム
III 学会等および社会における主な活動		
2015年～現在	日本核酸医薬学会会員 (2023年5月～ 評議員)	
2004年～現在	日本生化学会会員	
2008年～現在	日本薬学会会員	

神谷

2003年～現在	日本糖質学会会員
2006年～現在	日本蛋白質科学会会員
2012年～現在	日本化学会会員
2012年～現在	日本高分子学会会員
2022年～現在	日本生物物理学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属	薬学部	職名	教授	氏名	中山 尋量
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 薬学部学生への教育		2006年4月～2022年3月		神戸薬科大学の6年制への学生には、基礎化学、無機錯体化学、物理化学 I、総合薬学講座の講義、基礎化学実習の指導を行っていた。	
		2022年4月～		また、5年次生からは卒業研究の指導を行っていた。	
		2006年4月～2012年3月		研究リテラシー、ロジカル思考演習を担当している。	
(2) 薬学研究科院生への教育		2006年4月～2012年3月		物理化学 I（旧カリ）	
		2009年～2022年3月		神戸薬科大学薬学研究科院生に薬学演習、課題研究の指導を行っていた。	
2 作成した教科書、教材、参考書					
薬学生のための基礎化学		2015年2月28日		編集 廣川書店	
薬学生のための基礎物理		2016年3月30日		編集 廣川書店	
物理系薬学 I. 物質の物理的性質（第2版）		2015年3月20日		編集 東京化学同人	
物理系薬学 II. 化学物質の分析		2016年4月1日		編集 東京化学同人	
物理系薬学 III. 機器分析・構造決定		2016年11月4日		編集 東京化学同人	
薬学演習 II. 基礎科学		2021年10月		執筆 東京化学同人	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
学生部長		2008年4月～2010年3月			
学生就職部長		2010年4月～2012年3月			
教務部長		2013年4月～2019年3月			
学生支援センター長		2018年4月～2022年3月			
II 研究活動					

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Maeda H., Tsuchida S., Nariyai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull., 2018, 34, 9-12. "Phosphorylation of Hydroxyproline with Trisodium cylo-Triphosphate and Evaluation of their Moisture Retaining Property"
Hayashi A., Fukui H., Nakayama H., Tsuhako M.,	論文	Applied Clay Sci., 2020, 187, 105480, Adsorption of Gaseous Aromatic Compounds in Linear Quaternary Ammonium-modified γ -Zirconium Phosphate"
Tanaka M., Fujita Y., Onishi N., Ogawara K., Nakayama H., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids, 2020, 232, 104954. "Preparation and Characterization of Lipid Emulsions Containing Styrene maleic Acid Copolymer for the Development of pH-responsive Drug Carriers,"
Hayashi A., Tsushima M., Yano M., Nakayama H..	論文	Clay Sci., 2021, 25, 47-53. "Glycyrrhizic Acid Dipotassium Salt Composite with layered Double Hydroxide as Moisturizer"
Hayashi A., Otsu S., Kamiya H., Yoshioka A., Nakayama H..	論文	Phosphorus Res. Bull, 2022, 38, 53-59. "Uptake and release of sodium diphosphate by a chloride-type layered double hydroxide"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
「アセトニトリルを用いた炭酸型層状複水酸化物によるカルボン酸化合物のインターカレーション」	2018年3月	第98回日本化学会年会
「塩化物型層状複水酸化物によるカルボン酸ガス吸着特性」	2019年3月	第99回日本化学会年会
「シクロデキストリンによるトリアムテレンの溶解性の改善」	2020年3月	第141回日本薬学会年会

「美白成分の浸透性の向上を目指したジホスホン酸塩によるリン酸修飾」	2020年9月	第29回無機リン化学討論会
「シクロデキストリンによるルシノールの溶解性改善とチロシナーゼ活性の評価」	2021年3月	第140回日本薬学会年会
3. 講演等		
演題名	発表年・月	場所等
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2016年9月～2020年8月	日本無機リン化学学会副会長	
2020年9月～2022年9月	日本無機リン化学学会会長	
2005年4月～2022年	日本薬学会近畿支部委員	
2011年4月～2018年3月	近畿化学協会代議員	
2012年9月～2015年3月	薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂に関する調査研究チーム委員	
2016年8月～2021年3月	医道審議会薬剤師分科会薬剤師国家試験出題基準改定部会委員	
2008年7月～現在	薬学共用試験センターCBT実施委員会委員	
2018年7月～2020年6月	薬学共用試験センター財務委員会委員	
2018年4月～2023年3月	大学コンソーシアムひょうご神戸FD・SD委員会 副委員長	
2017年4月～2018年3月	大学基準協会評価委員会委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	職名	氏名
薬学部	教授	小林 典裕
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2002. 4. 1～2022. 12. 31	調査対象の期間にわたって、『分析化学I』（1単位，化学平衡），『分析化学II』（1単位，化学物質の検出と定量），『臨床検査学II』（1単位（50%を分担），分析技術の臨床応用），『分析化学系実習』（1単位，化学物質の検出と定量）を担当してきた。授業は，指定の教科書（次項参照）に加え，必要に応じてプリントを配付して併用した。隔年で行われる授業アンケートを参考に授業の改善を図っている。2019年度までは対面授業であり，板書を多用する授業スタイルであった。早くから蛍光色のチョークを採用し，できるだけ大きく鮮明に書くように心がけている。2020年度からはコロナ禍の影響でweb講義としている。授業のパワーポイント教材をを入念に作製し，随所に例題を配した。結果，対面講義より内容は充実した。また，自分のペースで反復学習できるためか，学生の試験の成績は格段に向上した。実習では，意欲と態度を重視している。実験開始前の講義では，標準的な実験法を教卓で自ら実演し，こまめに実験室を巡回して実技指導に努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2008. 1. 1～2022. 12. 31	下記の教科書の執筆に関わった。 『NEW薬品分析化学』（廣川書店，編著），『NEW薬学機器分析』（廣川書店，分担），『コアカリ対応 分析化学』（丸善，分担），『ベーシック薬学教科書シリーズ2. 分析科学』（化学同人，分担），『スタンダード薬学シリーズ2. 物理系薬学 IV. 演習編』（東京化学同人，分担），『薬学分析科学の最前線』（じほう，分担），『免疫測定法－基礎から先端まで－』（講談社，編著）。 『コアカリ対応分析化学』（丸善出版，編著）。 詳細については，研究活動の欄を参照のこと。このほか，学生実習用テキスト（『分析化学系実習』），授業用テキスト（『臨床検査学II』，『分析化学III』）を作成し，活用した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし
4 その他教育活動上特記すべき事項		2012. 4～2014. 3 学生就職部長 2019. 4～2021. 12 薬用植物園長

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Y. Kiguchi, H. Oyama, I. Morita, M. Morikawa, A. Nakano, W. Fujihara, Y. Inoue, M. Sasaki, Y. Saijo, Y. Kanemoto, K. Murayama, Y. Baba, A. Takeuchi, N. Kobayashi	論文	Sci. Rep., 2020, 10, 14103. "Clonal array profiling of scFv-displaying phages for high-throughput discovery of affinity-matured antibody mutants"
H. Oyama, Y. Kiguchi, I. Morita, C. Yamamoto, Y. Higashi, M. Taguchi, T. Tagawa, Y. Enami, Y. Takamine, H. Hasegawa, A. Takeuchi, N. Kobayashi	論文	Sci. Rep., 2020, 10, 4807. "Seeking high-priority mutations enabling successful antibody-breeding: systematic analysis of a mutant that gained over 100-fold enhanced affinity"
H. Oyama, Y. Kiguchi, I. Morita, T. Miyashita, A. Ichimura, H. Miyaoka, A. Izumi, S. Terasawa, N. Osumi, H. Tanaka, T. Niwa, N. Kobayashi	論文	Anal. Chim. Acta, 2021, 1161, 238180. "NanoLuc luciferase as a suitable fusion partner of recombinant antibody fragments for developing sensitive luminescent immunoassays"
Y. Kiguchi, H. Oyama, I. Morita, Y. Nagata, N. Umezawa, N. Kobayashi	論文	Sci. Rep., 2021, 11, 8201. "The VH framework region 1 as a target of efficient mutagenesis for generating a variety of affinity-matured scFv mutants"
I. Morita, Y. Kiguchi, H. Oyama, K. Yamaki, N. Sakio, K. Kashiwabara, Y. Kuroda, A. Ito, A. Yokota, N. Ikeda, R. Kikura-Hanajiri, H. Ueda, S. Numazawa, T. Yoshida, N. Kobayashi	論文	Anal. Methods, 2022, 14, 2745-2753. "Derivatization-assisted immunoassays: application for group-specific detection of potent methamphetamine and amphetamine enantiomers"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
「CAP」法：高感度免疫測定法への新方略	2022.11	第1回日本抗体学会 設立記念学術大会

免疫測定法の高感度化に資する高親和力変異抗体探索システム —Clonal Array Profiling (CAP) 法の構築と応用—	2021. 1	第71回日本薬学会関西支部大会
VH-FR1へのアミノ酸挿入による抗コルチゾールscFvの試験管内親和性成熟	2020. 1	第70回日本薬学会関西支部大会
In vitro affinity maturation of anti-cortisol antibodies to develop sensitive immunoassays	2019. 5	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
新世代の高性能イムノアッセイを目指す「抗体育種」	2018. 8	日本分析化学会第67年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2006年4月～2021年12月	日本分析化学会 近畿支部常任幹事	
2008年12月～2021年12月	日本臨床化学会 近畿支部評議員	
2007年4月～2014年6月	生物化学測定研究会 副会長	
2014年6月～2017年12月	生物化学測定研究会 会長	

専任教員の教育・研究業績

所属	職名	氏名
薬学部	教授	安岡 久志
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2022年9月～ 2023年1月～ 2023年4月～	「ロジカル思考演習Ⅰ」を担当し、1年次生の基礎力及びプレゼンテーション能力等の向上に資する指導を行っている。 次年度入学生を対象に主に化学・数学の基礎学力向上を目的として入学前教育を実施している。 1年次に開講する「基礎有機化学」「基礎物理化学」の初期の段階において、各科目の専門教育に繋ぐための基礎学力の養成に努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2017年 (兵庫県立加古川東高校)	中学校・高等学校における学習指導・授業づくり。 藤田祐介・加藤秀昭・坂田仰編著 若手教師の成長をどう支援するか-養成・研修に活かす教職の基礎- pp43-47, 株式会社教育開発研究所, 東京
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2022年6月20日 2022年7月19日	神戸薬科大学SD研修会「高等学校の現状と今後の教育の方向性」～兵庫県立明石北高校を例として～ 神戸薬科大学FD研修会「授業改善と成績評価について」～兵庫県立明石北高校を例として～
4 その他教育活動上特記すべき事項	2012～13年 2022年 2023年	神戸薬科大学非常勤講師 リメディアル教育「化学」を担当 (神戸大学附属中等教育学校) 兵庫県立長田高校 課題研究アドバイザー 兵庫県立西宮高校 課題研究アドバイザー 兵庫県立加古川南高校 課題研究アドバイザー 兵庫県立長田高校 課題研究アドバイザー

		兵庫県立西宮高校 課題研究アドバイザー 兵庫県立加古川南高校 課題研究アドバイザー（特別非常勤講師） 兵庫県立姫路東高校 課題研究アドバイザー（予定）
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
III 学会等および社会における主な活動		
1986年4月～現在	兵庫県高等学校教育研究会科学部会会員・副会長（2020～2021年度）・顧問（2022年度）	
2013年4月～現在	日本スクール・コンプライアンス学会会員	
2023年4月～現在	日本物理教育学会会員	

河本

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 河本 由紀子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年4月～現在 2016年4月～現在 2016年4月～現在 2018年4月～現在 2020年4月～現在 2023年4月～現在	4年次の実務実習事前学習 5年次の学外実務実習 6年次の総合薬学講座 1年次の早期体験学習 4年次の社会保障と薬剤経済 2年次のロジカル思考演習Ⅱ
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2023年10月30日	第15回 神戸薬科大学エクステンションセンターシンポジウム（薬剤師×発信力）講演
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

神戸市立医療センター中央市民病院におけるトレーシングレポート運用の現状と課題	2019年1月	第40回日本病院薬剤師会近畿学術大会
薬学実務実習生における薬剤師連携の学習としての服薬情報提供書（トレーシングレポート）に関する検討	2020年2月	第41回日本病院薬剤師会近畿学術大会
兵庫県中小病診対策部活動報告	2020年2月	第41回日本病院薬剤師会近畿学術大会
トレーシングレポートを介した双方向の情報提供による薬剤師連携のアウトカム検証	2020年10月	日本医療薬学会年会第30回年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2000年4月～2016年3月	日本病院薬剤師会代議員	
2004年4月～2016年3月	兵庫県薬剤師会病診支部長	
2004年4月～2020年5月	兵庫県病院薬剤師会副会長	
2012年4月～2016年3月	日本病院薬剤師会療養病床委員会委員	
2012年4月～2020年5月	兵庫県薬事協会理事	
2014年4月～2020年5月	日本病院薬剤師会近畿ブロック中小病診委員会委員	
2020年5月～現在	兵庫県病院薬剤師会顧問	
1996年1月～現在	日本医療薬学会会員	
2016年7月～現在	日本くすりと糖尿病学会会員	
2016年4月～現在	日本老年薬学会会員	
2021年1月～現在	日本薬学会会員	
2021年1月～現在	日本薬学教育学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 福井 英二
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年4月～現在に至る	4年次生の実務実習事前教育
	2017年4月～現在に至る	5年次生の学外実務実習
	2017年12月～現在に至る	6年次生の総合薬学講座
	2018年4月～現在に至る	1年次生の早期体験学習
	2019年10月～現在に至る	5年次生のIPW演習
	2020年4月～現在に至る	6年次生のがん薬物療法論
	2023年4月～現在に至る	2年次生のロジカル思考演習Ⅱ
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2019年4月～2023年3月	がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）養成プラン 実習コーディネーター
	2022年4月～現在に至る	生涯研修認定制度評価委員会 委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1981年5月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
1998年9月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2000年2月～現在に至る	日本臨床栄養代謝学会会員	
2003年3月～現在に至る	日本クリニカルパス学会会員	
2004年11月～現在に至る	日本臨床腫瘍学会会員	
2005年8月～現在に至る	日本癌治療学会会員	
2009年3月～現在に至る	日本薬剤師研修センター 研修認定薬剤師	
2009年4月～2022年3月	認定実務実習指導薬剤師	
2012年4月～2016年5月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2013年5月～現在に至る	日本薬剤師会会員	
2014年4月～2016年3月	日本病院薬剤師近畿ブロック薬事制度委員会委員	
2014年6月～2016年5月	兵庫県薬剤師会薬局経営部委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	総合教育研究センター	職名	教授	氏名	山本 克己
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2017年4月～現在		4年次の実務実習事前教育	
		2017年4月～現在		5年次の学外実務実習	
		2017年4月～現在		6年次の総合薬学講座	
		2018年4月～現在		5年次・6年次の病院（2施設）における卒業研究を担当	
		2019年4月～現在		4年次の処方解析学Ⅱを担当	
		2021年4月～現在		初期体験臨床実習を担当	
		2023年4月～現在		ロジカル思考演習Ⅱを担当	
2 作成した教科書、教材、参考書		2010年～2018年		「計数・計量調剤」の項を執筆	
薬学生のための病院・薬局実務実習テキスト 2010年版～2018年版（各年改訂）（じほう）		2018年3月		研究計画書の記載方法について監修	
研究倫理審査申請準備ガイド （日本薬剤師会 臨床・疫学研究推進準備委員会）					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		2018年10月		演題：「臨床から基礎までをつなぐ新しい薬学教育を目指して」	
臨床・基礎薬学連携シンポジウム（主催 神戸薬科大学）		2019年6月		「レベルアップ輸液調製」	
「臨床から基礎までをつなぐ新しい薬学教育のあり方」 第53回薬剤師実践塾（神戸薬科大学 生涯研修講座）		2020年10月		「レベルアップ輸液調製 ～危険な医薬品の取り扱い～」	
2020年度 生涯研修e-learning講座05（神戸薬科大学）		2020年10月		「ポリファーマシーに関する対策について」	
2020年度 生涯研修e-learning講座09（神戸薬科大学）					
4 その他教育活動上特記すべき事項		2009年4月～2015年3月		病院実習導入講義（注射剤混合調製）	
大阪薬科大学 特任・招聘教授					

近畿大学薬学部 実務実習評価連絡会議 委員	2010年4月～2016年3月	病院・薬局実務実習指導者による評価の妥当性の検証
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
小林政彦, 但馬重俊, 山本克己, 村田久枝, 石倉久美子, 真常美紀, 吉良俊彦, 谷本祐子, 木下里紗, 辻井佳代, 堀越博一, 守島繁昭, 前田恵治, 隠岐尚吾	論文	大阪市天王寺区における5病院と保険薬局の連携～疑義照会項目における統一の効果と課題～, 日本薬剤師会雑誌, 70(3), 27-32, (2018)
辰見明俊, 前川裕希, 小森由理子, 山本克己, 濱口常男, 高橋一栄, 國正淳一	論文	ニボルマブによる重篤な免疫関連有害事象の発現予測因子としての好中球・リンパ球比および血小板・リンパ球比の有用性, 医療薬学, 46(6), 331-339, (2020)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
免疫チェックポイント阻害剤ニボルマブによる免疫関連有害事象発現予測因子の探索	2019年6月	日本医療薬学会 第3回フレッシュャーズ・カンファランス
医薬品情報創出に向けた臨床研究の審査体制(シンポジウム) 「倫理審査委員会」	2021年6月	第23回日本医薬品情報学会総会・学術大会
拡張不全を合併する2型糖尿病患者におけるGLP-1受容体作動薬の心機能への影響	2022年9月	第10回日本くすりと糖尿病学会学術集会
3. その他		
講演名	発表年・月	会の名称
学校薬剤師の研究活動における今後について	2018年3月	平成29年度第2回大阪府薬剤師会学薬部会 学校薬剤師研修会
ポリファーマシーに関する対策について	2020年1月	高槻市薬剤師会 『薬薬連携を通してポリファーマシー!』研修会
薬物療法の現状と展望ー薬剤の分類、薬効、副作用などー	2020年2月	日本臨床衛生検査技師会 令和元年度認定認知症領域検査技師日臨技指定講習会
倫理審査における審査委員の観点について ～倫理審査申請時の注意点～	2022年2月	大阪府薬剤師会 令和3年度学術研究倫理に関する研修会
無菌調製の基礎知識	2022年7月	令和4年度 大阪府薬剤師会 無菌調剤室利用者研修会

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2008年4月～現在	一般社団法人 大阪府薬剤師会 理事 (2010年4月～2016年6月 副会長)
2018年6月～現在	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 顧問
2017年6月～現在	大阪府社会保険診療報酬請求書審査委員会 審査委員
2011年7月～現在	大阪府献血推進協議会 適正使用対策部会 委員
2016年9月～現在	公益社団法人 日本薬剤師会 臨床・疫学研究推進委員会 委員
2017年3月～現在	一般社団法人 大阪府薬剤師会 学術研究倫理審査委員会 委員長
2008年4月～2016年3月 2022年4月～現在	公益社団法人 日本薬剤師会 代議員
2008年4月～2016年6月	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 理事 (2010年4月～2016年6月 副会長、 2016年7月～2018年6月 監事)
2010年4月～2014年3月	一般社団法人 日本病院薬剤師会 代議員
2017年6月～2022年3月	公益社団法人 臨床心臓病学教育研究会(JECCS) 理事
2011年5月～2017年3月	大阪府社会保険診療報酬請求書審査委員会学識経験者審査委員選考協議会選考協議会 委員
2015年8月～2018年5月	大阪府地域職域連携推進協議会 NCD対策検討部会 委員
2021年4月～2021年8月	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員
1980年～現在	日本薬学会 会員
2006年～現在	日本医療薬学会 会員
2017年～現在	臨床心臓病学教育研究会 会員
2020年～現在	日本医薬品情報学会 会員

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 國東 ゆかり
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2021年4月～現在 2021年4月～現在 2021年4月～現在 2021年4月～現在 2021年4月～現在 2022年4月～現在	1年次の初期体験臨床実習 4年次の実務実習事前学習 4年次の処方解析1 5年次の学外実務実習 6年次の総合薬学講座 4年次の社会保障制度と薬剤経済
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2022/10/30	第15回 神戸薬科大学エクステンションセンターシンポジウム（薬剤師×発信力）講演
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ブリナツモマブを安全に投与するためのレジメン登録	2019年10月	第57回日本癌治療学会学術集会
HIV 感染品胎妊婦の母子感染予防にジドブジン注射剤を使用した経験	2019年11月	第29回日本医療薬学会年会
乳がん患者 EC 療法におけるアプレピタントとオランザピンの副作用予防効果の比較	2020年2月	第41回日本病院薬剤師会近畿学術大会
心不全チームと緩和ケアチーム連携後の末期心不全患者における呼吸困難緩和に対するモルヒネの使用実態調査	2020年7月	第84回日本循環器学会学術集会
薬剤師によるirAE対策の遵守確認介入前後におけるフォロー件数の単施設後視的比較検討	2020年10月	第30回日本医療薬学会年会
小児がんに関連した難治性便秘症を回避するための薬剤指導とバイオマーカー診断	2020年11月	第62回日本小児血液・がん学会学術集会
III 学会等および社会における主な活動		
1983年4月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
1983年4月～現在に至る	日本薬剤師会会員	
2008年8月～現在に至る	日本臨床腫瘍学会会員	
2008年8月～現在に至る	日本癌治療学会会員	
2008年8月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2010年7月～2020年6月	日本病院薬剤師会生涯研修履修認定	
2011年2月～現在に至る	日本臨床腫瘍薬学会会員	
2017年4月～2021年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	
2021年5月～現在に至る	日本乳癌学会会員	
2022年3月～現在に至る	日本薬学会会員	
2023年4月～現在に至る	兵庫県立こども病院 治験審査委員会外部委員	

小椋

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 小椋 千絵
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2023年4月～現在 2023年4月～現在 2022年4月～現在 2022年4月～現在 2023年4月～現在 2022年4月～現在 2022年8月～現在 2022年4月～現在	1年次の初期体験臨床実習 4年次の社会保障制度と薬剤経済 4年次の処方解析Ⅱ 4年次の実務実習事前教育 5年次のIPW演習 5年次の学外実務実習 5～6年次の卒業研究 6年次の総合薬学講座
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項 社会医療法人愛仁会 明石医療センター附属看護専門学校	2016年4月～2020年3月	薬理学講義担当

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
小川 智孝, 寺沢 匡史, 小椋 千絵	論文	薬剤師による外来化学療法室における全患者指導の構築 愛仁会医学研究誌 VOL. 50, 108-110, 2018
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
簡易懸濁法導入への取り組み	2018年2月	近畿薬剤師合同学術大会2018 (第39回日本病院薬剤師会近畿学術大会 第20回近畿薬剤師学術大会)
外来から入院までを通じた薬剤師のシームレスな周産期患者への関わり	2019年1月	第40回日本病院薬剤師会近畿学術大会
明石市の保険薬局における抗菌薬処方への対応についての現状調査	2019年7月	医療薬学フォーラム2019 第27回クリニカルファーマシーシンポジウム
薬剤師における外来化学療法室での専従体制の評価	2019年11月	第29回日本医療薬学会年会
ペンプロリズムの奏功因子の検討	2020年2月	第41回日本病院薬剤師会近畿学術大会
3. その他		
III 学会等および社会における主な活動		
2009年5月～現在に至る	公益財団法人日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師	
2009年7月～現在に至る	認定実務実習指導薬剤師	
2013年9月～現在に至る	日病薬認定指導薬剤師	
2013年7月～2018年6月まで	日本病院薬剤師会生涯研修履修認定	
2018年7月～現在に至る	日病薬病院薬学認定薬剤師	
2019年4月～現在に至る	公認スポーツファーマシスト認定	
1986年4月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	

小椋

2016年4月～現在に至る	日本薬剤師会会員
2016年7月～現在に至る	日本医療薬学会会員
2018年5月～2022年5月	兵庫県病院薬剤師会理事
2022年4月～現在に至る	日本薬学会会員

濱名

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 濱名 則子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2023年4月～現在	1年次の早期体験学習
	2023年4月～現在	4年次の実務実習事前学習
	2023年4月～現在	5年次の学外実務実習
	2023年4月～現在	6年次の総合薬学講座
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
整形外科病棟における薬剤師の役割～薬剤師の介入により副作用の重篤化を回避できた症例	2018年2月	近畿薬剤師合同学術大会2018

地域包括ケア病棟においてNSTの介入によりポリファーマシーの改善に繋がった1例	2019年7月	医療薬学フォーラム2019
新型コロナワクチンの医療従事者接種における副反応アンケート	2022年1月	第43回 日本病院薬剤師会近畿学術大会
中小病院における周術期薬剤管理への取り組み	2022年7月	医療薬学フォーラム2022
神戸海星病院における調剤過誤防止への新たな取り組み	2023年2月	第44回 日本病院薬剤師会近畿学術大会
3. その他		
講演名	発表年・月	主催者
専門家によるアドバイスが得られるがん・ピア・サポート 薬剤師： 薬剤師とお話してみませんか？	2022年10月	NPO法人P. I. E. GROUP. SANDA
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1992年6月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	
1996年1月～現在に至る	日本医療薬学会会員	
2001年5月～現在に至る	日本糖尿病療養指導士	
2002年5月～現在に至る	日本糖尿病学会会員	
2009年1月～現在に至る	日本医療薬学会 医療薬学専門薬剤師	
2010年4月～現在に至る	認定実務実習指導薬剤師	
2008年5月～2023年3月	兵庫県病院薬剤師会 東神戸支部幹事	
2019年5月～2023年3月	兵庫県病院薬剤師会 評議員	

専任教員の教育・研究業績

所属 英語第一研究室	職名 准教授	氏名 赤井 朋子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 英語	1992年4月～現在に至る	<p>学部の1年生、2年生に英語の授業を行っている。</p> <p>1) 自然科学的な内容（医療や健康、環境問題等）のテキストを、着任間もない頃から積極的に使用している。評論文を丁寧に読み進めることにより、自然科学に特有の英文スタイルに慣れさせるように工夫している。語彙力を強化するために、重要な語句をプリントにまとめ、小テストを行っている。医療に関連のある基本的な英会話を、ペアワークしやすいようにプリントにまとめて練習をさせている。</p> <p>2) パラグラフ・リーディングやパラグラフ・ライティングの教材も、着任間もない頃から使用している。要点をつかみながら速読のコツを教えた上で、授業中に時間を測りながら黙読させ、読んだ内容についてグループで話し合う機会を設けている。そうすることにより、自ら考えながら能動的に英文を読めるように工夫している。（パラグラフ単位の英作文については、課題を与えて提出させたが、多くの学生から負担が重すぎるとのアンケート回答が寄せられたので、文単位の作文練習を無理なく行えるように工夫している。）</p> <p>3) 視聴覚教材を用いて、リスニングの授業を行っている。学生の集中力ができるだけ持続するように、変化に富んだ楽しい雰囲気教材を選ぶように心がけている。授業においては、視聴の前に聞き取りのヒントやクイズを与え、視聴後には聞き取った内容をグループで話し合わせるなど、学生が段階的に聞きとっていけるように、様々な工夫をしている。授業前にはそのための綿密な準備を、時間を測りながら行っている。音声の聞き取りに関するテストも行なっている。</p> <p>4) 習熟度別の授業では、成績が中程度～下位の学生を教えている。特に文法や語法の復習を丁寧に行うことを心がけている。授業の準備をする際には、英語の苦手な学生にはどのように説明をすればよいか、また、どのような練習をさせればよいかを考えメモにとっている。その一方で、授業中には、学生の理解度を確認しながら、双方向的で臨機応変な授業を行うようにし、基本事項の定着に努めている。</p>

<p>総合文化演習</p>	<p>1995年4月～2023年3月</p>	<p>5) 英語の語感を高めることの大切さを教えるようにしている。英英辞典の定義を確認させることにより、日本語訳で語義を覚えるだけでは不十分な英語の本来の意味に気づかせている。語と語の結びつき（コロケーション）が日本語とは異なることを教え、コロケーションを自分で調べて自然な英語表現ができるように、辞書の活用方法などを教えている。</p> <p>6) 2020年度前期は、COVID19対策として、オンデマンド講義動画を作成した。グループ・フォームを用いた確認テストを行い、そのフィードバックも行った。対面授業が再開した2020年度後期からは、対面+zoom配信のハイブリッド形式の授業を2年ほど行った。</p> <p>7) 授業評価アンケートの結果は、特に「授業は理解できましたか」と「全体としてこの授業に満足していますか」の項目において、概ね全学平均値を上回っている。また、授業のコマ数を他の教養教員より多く負担しており、特に2022年度まではドイツ語の教員（専任）の1.5倍以上のコマ数を負担していた。</p> <p>学部の2年生を対象に演習形式の授業（通年科目）を行った。映画や演劇に関するゼミとイギリス文化に関するゼミを担当した。（2023年度からは「ロジカル思考演習」を担当する。）</p> <p>1) 前期では、私の方から題材やトピックを提供し、テーマの設定の仕方や、文献検索・情報整理の方法、アウトラインの組み立て方や、発表原稿の作成の仕方など、与えられた題材を使って学べるように工夫した。</p> <p>2) 早くから（2002年度から）スモール・グループ・ディスカッションを取り入れた演習を行っている。私自身が英国での在外研究中（2001年度）にオブザーバーとして参加した授業で、SGDを用いた授業方法を学んだので、本学でも自分のゼミに取り入れ、学生の考えを引き出せるような授業を心がけた。また、互いの意見を尊重しながら話し合うことも英国の授業から教わったので、その点も考慮し、協力的に問題解決につなげていくコミュニケーションの取り方をゼミ生が習得できるように心がけた。</p> <p>3) 他の授業にはない私のゼミならではの特色を持たせるように心がけた。例えば、演劇や映画を通して人間や文化に対する理解を深め、グローバル社会に欠かせない、文化の多様性に対する寛容性を養うことを視野に入れて授業を行った。</p>
---------------	------------------------	--

<p>早期体験学習</p>	<p>2005年4月～現在に至る</p>	<p>4) 後期は、受講生の発表とそのフィードバックに費やした。映画演劇論のゼミでは、学生が発表で取り上げる作品を私自身が事前に鑑賞しておき、学生の発表に対して多くのフィードバックができるように心がけた。また、質疑応答の時間を充実したものにすため、質問する側の注意点、考え方なども伝えるように心がけた。授業評価アンケートでは、「先生や他の受講生から多くのコメントをもらえたことが励みになった」といった感想を多く受けている。また、私のゼミは常に受講を希望する学生が多かった。</p> <p>5) COVID19対策として、2020～2022年度は、三密を避けるためにも、全員1人で発表させた（それ以前はグループ発表だった。）テーマの設定から口頭発表、レポートの執筆に至るまで、全て1人で行ったことについて、受講生からは「大変よい経験になった」「自信につながった」という感想が届いている。</p> <p>新入生の早期体験学習が円滑に行われるように様々な形で学生のサポートを行っている。特に、2005年度（早期体験学習トライアル）、2009年度、2013年度、2017年度、2021年度には新入生の担任としてクラス授業を行い、体験学習後のプレゼンテーションの指導や、報告書原稿の添削等を行っている。また、学生の学習先である病院や薬局を訪問したり、学生の引率を行ったりもしている。救急救命インストラクターの資格を取得し、実技指導も行っている。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書 授業のプリントを作成</p>	<p>2013年4月～現在に至る</p>	<p>一部の授業において、学生が予習しやすいように、各章毎に予習プリントを作成し配布している。薬学に特化した市販の教科書が比較的少ないため、既存の教科書を本学の学生向けにカスタマイズして使用している。</p>
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p>		
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項 入学予定者のための英語教育</p>	<p>2003年度～2021年度</p>	<p>推薦入試による入学予定者に、あらかじめ問題集を送付し、返送されてきた学生の解答に目を通した上で、2月にそれに関する解説の授業を行った。</p>

早期体験学習トライアルの実施	2005年1月～2005年12月	6年制導入の前年度に、1年生のクラス担任として「早期体験学習」トライアルを実施した。本学では、どのような授業を組み立てるのか、施設訪問前には何を指導するのか、発表会はどのように行うのかといった問題に関する話し合いに参加し、実践報告も繰り返し行いながら、暗中模索であったこの科目の輪郭線を明確にしていく作業を他の先生方と協力し合いながら行なった。
『総合文化演習報告集』の作成	2002年4月～2011年3月	総合文化演習を受講した学生のレポートの中から、優秀レポートを選んで掲載し、担当教員からのコメントと、ゼミ全体の紹介を文章にまとめて掲載した。
クラス担任	2005年4月～現在に至る	クラス担任として、種々の関係業務に従事している。保護者面談や成績不振者との面談、その他の相談受付も行なっている。
習熟度別英語科目のとりまとめ役	2013年4月～2022年3月	習熟度別英語科目である「英語II」「英語IV」において、担当の先生方（非常勤講師）と、毎年、テキスト選定や授業の運営等についてミーティングを重ねた。本学の場合、学生間で英語の学力に大きな差が見られるので、教員同士の連携やコミュニケーションをはかることにより、多様な学生への効果的な対応に取り組んだ。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
赤井 朋子	論文	「ノエル・カワードの『作詞作曲』（一九三二）試論——言葉と音楽によるレビュー」森佳子・奥香織・新沼智之・萩原健（編）『演劇と音楽』（森話社、2020年）223-241.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
"Cultural Transfer between London and Takarazuka: the Translation and Adaptation of Western Comedies in Late 1910s-1920s Japan"（口頭発表）	2018年7月	International Federation for Theatre Research World Congress 2018 (IFTR 2018) (Belgrade)
"The Takarazuka Girls' Opera and the Urban-Rural Boundary"（口頭発表）	2019年7月	International Federation for Theatre Research World Congress 2019 (IFTR 2019) (Shanghai)

「ヴィクトリア劇場とEmily of Emerald Hill」 (口頭発表)	2020年9月	アジア・パシフィック劇場文化分科会 (オンライン)
「シンガポールで最初の英語演劇とアマチュア演劇クラブ」 (口頭発表)	2023年3月	近現代演劇研究会共催 永田靖教授退職記念行事「演劇研究の未来」 (大阪大学)
“The First English Play in Singapore and Its Relation to the Cultural Centre” (口頭発表)	2023年7月	2nd TATPIS Annual Conference (Taipei)
3. その他		
「交差するまなざし—外国 (人) が見つけた日本、日本 (人) が見つけた日本を巡って—」	2018年9月	第36回英米文化学会大会 ワークショップ
「共振するアジア・パシフィック演劇—劇場空間から読みとく複数性—」	2021年9月	第39回英米文化学会大会 ワークショップ
III 学会等および社会における主な活動		
1992年4月～現在	日本英文学会 会員	
1992年4月～現在	日本シェイクスピア協会 会員	
2000年4月～現在	日本演劇学会 会員	
2004年4月～現在	日本比較文化学会 会員	
2004年6月～2008年6月	日本演劇学会 幹事	
2006年8月～現在	International Federation for Theatre Research 会員	
2007年4月～2009年3月	日本演劇学会『近現代演劇研究』 編集委員	

赤井

2010年4月～2011年8月	国際演劇学会大阪大会 (IFTR Osaka 2011) 実行委員
2011年8月～現在	英米文化学会 会員
2017年3月～現在	Association for Asian Performance 会員
2019年4月～現在	『近現代演劇研究』査読委員
2019年4月～現在	英米文化学会「アジア・パシフィックの劇場文化」分科会発起人

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 准教授	氏名 竹仲 由希子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
有機化学実習の講義と実験指導	2002年1月～2017年	基礎的な実験操作をパワーポイントを用いた事前の講義で詳しく説明し、イメージしやすくしている。
基礎化学実習の講義と実験指導	2020年9月～現在に至る	基礎的な実験操作を写真や動画を挿入したパワーポイントを用いた事前の講義で詳しく説明し、イメージしやすくしている。
有機化学演習の講義	2006年4月～現在に至る	黒板を使用し、丁寧に講義を進めている。毎回授業の最初に、前回の範囲の小テストをおこない、学生の理解度を確認するとともに、復習も兼ね解説をしている。
有機化学Iの講義	2008年10月～2016年度	まとめおよび練習問題のプリントを配布し、学生が学習内容を整理しやすくしている。毎回小テストをすることにより、分からない箇所を学生に認識させる。
生薬化学の講義	2017年4月～2022年度	天然由来の化合物を骨格毎に生合成経路も含めてまとめたプリントを配布している。講義では、生薬学や有機化学で学んだことの復習もかねながら、色々な観点から構造式をとらえられるようにしている。
構造解析学IIの講義	2018年8月～現在に至る	天然物の構造決定の歴史とともに、各種スペクトルデータを用いた構造解析の手法を講義した後、実際のNMRチャートを使用し構造決定の練習をさせる。演習として、スペクトルデータを用いて、数人のグループで未知の化合物の構造決定をさせる。
サイエンティフィックリテラシーの講義	2022年4月～現在に至る	高校までに習っている化学の範囲を題材に、それらの単語や公式を本質的に理解することで、薬剤師（国家試験）としても応用し活用できることを気づかせ、「丸暗記」から「理解」へ勉強法を改善させることを目指している。
ロジカル思考演習の講義	2022年9月～現在に至る	化学に関しては、中学、高校でも学んでいるため、「勝手に思い込んでいること」＝「誤概念」が多くあるため、講義では基礎的な説明から始め、「正しい考え方」で問題を解くことができるように工夫している。
生薬学の講義	2022年9月～現在に至る	漢方薬や、西洋薬のリード化合物を含有している植物として用いられている重要な生薬について、身近なものとして興味を持ってもらえるよう工夫している。
2 作成した教科書、教材、参考書		

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項 チューター学生に対する指導 6年生に対する国家試験勉強の指導	2005年4月～2008年3月 2017年4月～現在に至る	
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Yukiko Takenaka, Takao Tanahashi	論文	<i>Phytochemistry Letters</i> , 2018, 26 , 64-67. "Biosynthetic origin of alkylated decaline-type polyketides and induction of a new metabolite by addition of benzoate in cultured mycobionts of <i>Pyrenula</i> sp."
Duy Hoang Le, Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Takao Tanahashi	論文	<i>Vietnam J. Chem.</i> , 2019, 57 (1), 112-115, doi:10.1002/vjch.201960018. "Evaluation of DNA polymerase inhibitory activities of depsidones, depsides and diaryl ethers from the Vietnamese lichen <i>Rimelia clavulifera</i> "
Yukiko Takenaka, Naoaki Okazaki, Toyoyuki Nishi, Naotaka Nagakura, Takao Tanahashi	論文	<i>Heterocycles</i> , 2020, 101 (1), 186-194, doi:10.3987/COM-19-S(F)10. "Iridoid glucosides from <i>Linociera sangda</i> "
Yukiko Takenaka, Satoko Seki, Toyoyuki Nishi, Takao Tanahashi	論文	<i>Journal of Natural Medicines</i> , 2020, 74 (4), 811-818, doi:org/10.1007/s11418-020-01436-3. "Two new sesquiterpenes from <i>Artemisia annua</i> L."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
薬用植物園を利用した教育 一薬用植物園学生ガイドの育成一	2022年8月	第7回日本薬学会教育学会大会

初年次教育における認知された課題価値の教授と学習者の課題価値、学習行動に関する調査	2023年3月	第143回日本薬学会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010年1月～2011年12月	日本地衣学会評議員	
2014年1月～2015年12月	日本地衣学会監事、評議員	
2016年1月～2017年12月	日本地衣学会庶務幹事	

専任教員の教育・研究業績

所属	医療薬学研究室	職名	准教授	氏名	佐々木 直人
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2018年9月～現在		3年次生の薬物治療学Ⅲを担当している。臨床医としての経験を生かした講義を行っている。	
		2018年4月～現在		4年次生の処方解析Ⅰ・処方解析Ⅱを担当している。病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義している。	
		2016年10月～現在		4年次生の実務実習事前教育を担当している。臨床医としての経験を生かした教育を行っている。	
		2017年11月～現在		6年次生の総合薬学講座を担当している。国家試験対策のポイントを示しながら、分かりやすく講義している。	
		2016年10月～現在		学部学生および大学院生に実験操作、実験ノート作成、研究発表などの指導を行っている。また、学生自身が目的意識をもって研究を進められるように指導している。	
		2017年4月～現在		大学院修士課程において病態解析治療学特論の講義を行っている。	
		2018年4月～現在		大学院博士課程において疾患解析治療学特論の講義を行っている。	
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
II 研究活動					

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Amin HZ, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Hayashi T, Emoto T, Matsumoto T, Yoshida N, Tabata T, Horibe S, Kawauchi S, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	Scientific Reports. 9(1):8065, 2019. "CTLA-4 Protects against Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice."
Amin HZ, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	Circ Rep. 2:339-342, 2020. "Cytotoxic T Lymphocyte-Associated Antigen-4 Protects Against Angiotensin II-Induced Kidney Injury in Mice."
Tanaka T, Sasaki N, Rikitake Y.	論文	J Clin Med. 10(24):5907, 2021. "Recent Advances on the Role and Therapeutic Potential of Regulatory T Cells in Atherosclerosis."
Emoto T, Yamamoto H, Yamashita T, Takaya T, Sawada T, Takeda S, Taniguchi M, Sasaki N, Yoshida N, Saito Y, Sivasubramaniyam T, Otake H, Furuyashiki T, Robbins CS, Kawai H, Hirata KI.	論文	Circulation. 145(18):1434-1436, 2022. "Single-Cell RNA Sequencing Reveals a Distinct Immune Landscape of Myeloid Cells in Coronary Culprit Plaques Causing Acute Coronary Syndrome."
Kasahara K, Sasaki N, Amin HZ, Tanaka T, Horibe S, Yamashita T, Hirata KI, Rikitake Y	論文	Heliyon. 8(7):e09981, 2022. "Depletion of Foxp3+ regulatory T cells augments CD4+ T cell immune responses in atherosclerosis-prone hypercholesterolemic mice."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Cytotoxic T-Lymphocyte-Associated Antigen-4 Downregulates Inflammatory Responses and Improves Angiotensin II-Induced Kidney Injury and Abdominal Aortic Aneurysm Formation.	2021年10月	第19回国際動脈硬化学会議
Modulation of T cell immune balance as an attractive strategy to treat atherosclerosis.	2022年3月	第86回日本循環器学会学術集会
特定波長の紫外線B波が免疫反応および動脈硬化に与える影響	2022年3月	日本薬学会第142年会
動脈硬化抑制に有効な紫外線B波の波長の探索	2022年6月	第44回日本光医学・光生物学会

獲得免疫系による動脈硬化制御機構の解明と治療応用	2022年7月	第54回日本動脈硬化学会総会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2000年5月～現在	日本内科学会会員（2005年9月～現在：日本内科学会認定内科医、2015年12月～現在：日本内科学会総合内科専門医）	
2000年5月～現在	日本循環器学会会員（2008年4月～現在：日本循環器学会認定循環器専門医）	
2008年6月～現在	日本動脈硬化学会会員（2019年7月～現在：評議員）	
2008年12月～現在	日本免疫学会会員	
2012年5月～現在	American Heart Association会員	
2015年5月～現在	日本臨床免疫学会会員	
2016年11月～現在	日本薬学会会員	
2017年6月～現在	日本光医学・光生物学会	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬理学研究室	職名 准教授	氏名 八巻 耕也
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2002.4.1 - 2003.4.1 - 2006.3.31 2006.4.1 - 2009.3.31 2006.4.1 - 2011.3.31 2016.4.1 - 2020.3.31 2018.4.1 - 2007.4.1 - 2007.4.1 - 2009.4.1 - 2013.4.1 - 2014.4.1 - 2018.4.1 - 2018.4.1 - 2020.3.31 2018.4.1 - 2020.3.31 2020.4.1 - 2021.3.31	薬理学実習（兼担） 情報リテラシー助手 薬理学Ⅱ（兼担） 臨床薬理学特論（兼担） アクティブラボ（兼担） 病態解析治療学特論（兼担） 薬理学Ⅰ 薬学総合講座（兼担） 基礎薬学（C B T）演習（兼担） 薬学入門（兼担） 医薬品毒性学（兼担） 高齢者医療（兼担） 在宅医療演習（兼担） 海外薬学研修（兼担） 医薬品構造学（兼担） 講義においては自作のプリントやプレゼンテーションを作成し、学生の理解が深まるように努力した。また、講義中も適宜、学生に反応を確認したり、問いかけを行うことにより、学生が講義を理解しているかを把握するように努めた。 2008年度の薬理学Ⅱ、2012年度の薬理学Ⅰの講義では、授業評価を基にした「ベストティーチャー賞(学内賞)」を受賞した。
2 作成した教科書、教材、参考書		

		講義を行うにあたり、自作のプリントやプレゼンテーションを作成し利用した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		<p>学術論文 八卷 耕也, 上田 昌史, 上田 久美子, 江本 憲昭, 水谷 暢明, 池田 宏二, 八木 敬子, 田中 将史, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 北河 修治 薬学雑誌., 2016, 136, 1051-1064. “基礎から臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の 学習効果”</p> <p>学術論文 八卷 耕也, 池田 宏二, 上田 久美子, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 和田 昭盛, 小山 淳子, 児玉 典子, 北河 修治 薬学雑誌., 2017, 137, 1285-1299. “分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導入が 生み出す学習意欲と学習効果”</p>
4 その他教育活動上特記すべき事項	2005. 4. 1 - 2006. 4. 1 - 2007. 3. 31 2007. 4. 1 - 2020. 3. 31	<p>高校での出張講義</p> <p>チューター（成績不良な学生への学習支援）</p> <p>実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップのタスクフォース</p> <p>高校、大学（正規の講義以外）、卒後の薬剤師のための教育にも可能なかぎり 参画している。</p>
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
M Terashi, K Yamaki, Y Koyama.	論文	Immunol. Invest., 2023, 52, 83-103. "Development of a Novel IgG1 Anaphylaxis Mouse Model with Uniquely Characteristic Skin Manifestations Induced Through the Fc γ R111-Histamine Pathway."
K Yamaki, K Ohta, N Kobayashi, I Morita, Y Kiguchi, H Oyama, K Ito, A Nanbo, H Oh-Oka, Y Koyama, Y Kawata, H Fujisawa, M Ohta.	論文	Biol. Pharm. Bull., 2022, 45, 1022-1026. "Purification of Emu IgY for Therapeutic and Diagnostic Use Based on Monoclonal Secondary Antibodies Specific to Emu IgY."

I Morita, Y Kiguchi, H Oyama, K Yamaki, N Sakio, K Kashiwabara, Y Kuroda, A Ito, A Yokota, N Ikeda, R Kikura-Hanajiri, H Ueda, S Numazawa, T Yoshida, N Kobayashi	論文	Anal. Methods, 2022, 14, 2745-2753. "Derivatization-assisted immunoassays: application for group-specific detection of potent methamphetamine and amphetamine enantiomers."
K Yamaki, M Terashi, S Yamamoto, R Fujiwara, JI Inoue, K Shimizu, S Yanagita, Y Doi, KI Kimura, K Kotani, M Sugihara, Y Koyama	論文	Immunopharmacol. Immunotoxicol., 2022, 44, 76-86. "Immunoglobulin a suppresses B cell receptor-mediated activation of mouse B cells with differential inhibition of signaling molecules."
Yamaki K, Terashi M, Ogura S, Inoue S, Naka N, Nakagaki T, Oka N, Koyama Y	論文	Pharmazie, 2020, 75, 7, 339-343. "Anti-allergic effect of the Src family kinase inhibitor saracatinib."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Src family kinase 阻害薬 saracatinib の抗アレルギー作用	2019 年 3 月	日本薬学会 第 139 年会
IgA は抗原分布および B 細胞の活性化を制御し、認識抗原に対する感作を抑制する	2020 年 3 月	日本薬学会 第 140 年会
IgG 依存性アレルギーモデル G-ASDIS の確立とその誘導に関与する細胞及び分子の探索	2021 年 3 月	日本薬学会 第 141 年会
マウス脾臓 B 細胞の B cell receptor 刺激による活性化に対する IgA の抑制効果	2022 年 3 月	日本薬学会 第 142 年会
Emu IgY に特異的なモノクローナル二次抗体の作製とそれを用いた emu IgY の精製	2023 年 3 月	日本薬学会 第 143 年会
III 学会等および社会における主な活動		
2002 年 ～ 現在	日本薬学会 会員	
2002 年 ～ 現在	日本薬理学会 会員	
2016 年 ～ 現在	日本薬学教育学会 会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 准教授	氏名 児玉 典子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年～現在に至る	（総合薬学講座） 重要ポイントの説明と、間違いやすい問題をピックアップし、基本知識を活用して応用問題を解く方略を示している。
	2009年～現在に至る	（感染制御学Ⅰ） 新しく学ぶ重要単語の意味理解と既修知識の関連性を見出すように、教科書を読んで理解させる授業を行っている。
	2020年～現在に至る	（感染制御学Ⅱ） 話題のニュースを動画に多く取り入れて、感染症に関する興味をもたすような授業を行っている。
	2022年～現在に至る	（サイエンティフィックリテラシー） 学習の課題価値や学習方略についての理解を促すために、「何のために勉強するのか？」といった課題価値や「計画を立てて勉強する」といった学習方略を意識づける授業を行っている。
	2022年～現在に至る	（ロジカル思考演習Ⅰ） 生命科学の既に学んだ内容を題材に、勘違いに気づき、「なぜ間違えたのか？」を意識させ、修正させる授業を行っている。
	2008年～現在に至る	（薬学英語入門Ⅰ）オンデマンド授業： 一方向性となりがちなオンデマンド授業を、学習者の理解を促す双方向性の授業を考案・実施している。
	2008年～現在に至る	（薬学英語入門Ⅱ）：オンデマンド授業： 薬学英語入門Ⅰよりもレベルアップさせ、授業内容の深い理解を促すためにグループ活動を重視した授業を行っている。
	2022年～現在に至る	（基礎実習） 実験の目的や操作の原理を理解させるだけでなく、実験の結果がうまくいかない時に、なぜそうなるのか？どこに原因があるのか？といった考察を重要視した授業を行っている。

2 作成した教科書、教材、参考書	2012年3月	HUMAN READER 生命科学英語 -life and disease-
	2016年3月	HUMAN READER 生命科学英語 -life and disease- 改訂版
	2018年9月	感染制御学 病原微生物との共存と戦い 初版
	2020年3月	ホッコリする化学計算 リメディアル化学 vol.1 -化学計算の基礎- 第1版 (企画・編集)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2022年3月	FD研修会「学習支援の現状と取り組み」
	2023年5月	FD研修会「新カリキュラムで実施した教育上の新しい試み」
4 その他教育活動上特記すべき事項	2009年10月～現在	キャリアカウンセラー資格取得 (CCE, Inc. 認定 GCDF-Japan)
	2017年8月～現在	キャリアコンサルタント資格取得 (キャリアコンサルティング協議会 認定)
	2010年10月～現在	ゲシュタルト療法研修修了資格(日本心理療法士協会)
	2010年12月～2014年12月	TA心理カウンセラー2級資格取得 (日本心理療法協会)
	2012年 4月～現在	認定心理士資格取得 (日本心理学会)
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
児玉 典子, 細川 美香, 藤波 綾, 小山 淳子, 竹内 敦子	論文	薬学教育, 2018, 2, 167-174. “薬学英语学習の過程で生じる正感情と影響要因の検討 -動機づけ予測に関連した感情の観点からの考察-”
細川 美香, 児玉 典子, 田中 将史, 竹内 敦子, 小山 淳子	論文	YAKUGAKU ZASSHI, 2020, 140 (1), 107-111. “コーディングによる質的解析を用いた予習方法に関する研究-専門英語科目「薬学英语入門」における意識調査-”
児玉典子, 細川美香	論文	Libra, 2022, 22, 16-24 “薬学英语学習者の自尊感情と自意識、自己効力感の関連”
児玉典子	論文	Libra, 2022, 22, 25-34, “1年生の学習動機と学習観について”
児玉 典子, 藤波 綾, 湯立	論文	薬学教育, 2022, 6, 235-241. “Control-Value Theory を応用した薬学英语教育の試み-自己効力感, 達成関連感情, 学習方略の関連-”
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

児玉

“Stay home” 期間，学生の効果的な自学学習とリメディアル教育におけるメタ認知的学習支援の試み	2020年9月	日本薬学教育学会（第5回）オンライン発表
新入生の学年移行時における学習の動機づけ・学習観の変化	2021年3月	日本薬学会（第141年会）オンライン発表
Zoomを活用したオンライン型研修会の試み・今後の課題について	2021年8月	日本薬学教育学会（第6回）オンライン発表
薬系大学における学習に対する苦手意識尺度の作成	2022年8月～9月	日本教育心理学会（第64回総会）オンライン開催
学習において生じる感情と学習方略についての調査	2022年8月	日本薬学教育学会（第7回）オンライン発表
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
日本薬学会，日本薬学教育学会，教育工学会，教育心理学会、パーソナリティ心理学会		

専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 准教授	氏名 灘中 里美
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） (1) 本学薬学部学生への教育	2008年4月-現在に至る	学部学生に分子生物学の講義を行っている。 1) 担当している分野の進歩は著しいので、講義担当のコアカリの SB0s を満たすように努めながら、講義に関連する内容における最近の発見や注目されている事項（新しい遺伝子医薬品の開発例や病因の解明など）についてプリントを作成し、適宜配付している。 2) ベーシックな分子生物学的知識を習得する課目であるが、できるだけ医療に関連するよう解説し、高学年で習う臨床系の科目の理解につながる基盤をつくってもらえるように努めている。 3) 1回の講義では、なるべくテーマを絞り、1つのテーマに関して単回で終了するように心掛けている 4) 講義した内容が薬剤師国家試験にどのように出題されているかを知ってもらうために、過去に出題された国家試験の問題を10～20問選んでプリントで配布して解説を行い、これらの問題に関連したものを定期試験に出題している。 5) 講義内容を深く理解してもらうために、文章問題を演習として取り入れている。また、昨今の国家試験に対応できる能力を養うため、定期試験ではマーク式問題だけでなく思考力を問う文章問題を出題している。
	2007年4月-現在に至る	学部学生に生物学系の実習指導を行っている。 1) 実習前の導入講義では、講義で習った基礎知識を復習するとともに、実習内容が医学・薬学の領域で実際に活用されていることが想像できるように努めている。また、コンパクトにまとめて30分以内で説明が終了するように心掛けている。

		2) 実習時間後に学生個々にレポートを作成してもらい、その日に行った実習を理解できるようにしている。
	2007年4月-現在に至る	<p>学部学生に卒業研究の指導を行っている。</p> <p>1) 受け身の講義と違い、参加型の実習であるので、学生自身が問題解決していけるようなトレーニングを行えるよう心掛けている。具体的には、学生のレベルに合った課題を与え、実験目的や方法を説明した後は、各自で日常の実験計画を立ててもらい、学生自身の力で課題を解決していくようなスタイルをとっている。学生だけでは目標達成が難しい場合はサポートするが、目標をクリアできない場合においても、答えのない課題に対してアプローチしていくプロセスを経験してもらうように心掛けている。</p> <p>2) 論理的な考え方や表現力が身に付くように、定期的に研究内容を学生にまとめさせ、発表するためのサポートを行っている。</p> <p>3) 卒業研究I, II で行った研究活動の成果をまとめる卒業論文の作成、および研究成果を発表する際のプレゼンテーションの指導を行っている。</p>
(2) 本学大学院生への教育	2007年4月-現在に至る	大学院特論（生化学特論）の講義を担当している。研究活動を通して知り得た最新の知識を講義で紹介できるよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2011年4月-現在に至る 2020年4月-現在に至る	生物学系II実習（生化学実習）テキスト 薬学生化学（分子生物学II）教科書（廣川書店）
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし
4 その他教育活動上特記すべき事項		特になし
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Sakamoto, K., Ozaki, T., Ko, Y.-C., Tsai, C.-F., Gong, Y., Morozumi, M., Ishikawa, Y., Uchimura, K., Nadanaka, S., Kitagawa, H., Zulueta, M. M. L., Bandaru, A., Tamura, J., Hung, S.-C., and Kadomatsu, K.	論文	Nature Chem. Biol. (2019) 15, 699-709. doi.org/10.1038/s41589-019-0274-x Glycan sulfating patterns define autophagy flux at axon tip via PTPR σ -cortactin axis.
Nadanaka, S., Hashiguchi, T., and Kitagawa, H.	総説	FASEB J., (2020) 34 (6), 8385-8401. doi.org/10.1096/fj.201902076R Aberrant glycosaminoglycan biosynthesis by tumor suppressor EXTL2 deficiency promotes liver inflammation and tumorigenesis through Toll-like 4 receptor signaling.
Kitazawa, K., Nadanaka, S., Kadomatsu, K., and Kitagawa, H.	論文	Commun. Biol. (2021) 4, 114 doi.org/10.1038/s42003-020-01618-5 Chondroitin 6-sulfate represses keratinocyte proliferation in mouse skin, which is associated with psoriasis
Nadanaka, S., Tamura, J., and Kitagawa, H.	論文	Front. Oncol. (2022) 12 https://doi.org/10.3389/fonc.2022.914838 Chondroitin Sulfates Control Invasiveness of the Basal-Like Breast Cancer Cell Line MDA-MB-231 Through ROR1
Maeda, S., Yamada, J., Naanaka, S., Kitagawa, H., and Jinno, S.	論文	Br. J. Pharmacol. (2022) 179, 4755-4896 https://doi.org/10.1111/bph.15920 Chondroitin sulfate proteoglycan is a potential target of memantine to improve cognitive function via the promotion of adult neurogenesis
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Chondroitin sulfate-mediated N-cadherin/beta-catenin signaling is associated with basal-like breast cancer cell invasion	2019.09.29- 10.03	11th International Conference on Proteoglycans
神経可塑性に関わるセマフォリン3Aが認識する糖鎖構造の解析	2019.08.19 - 21	第38回日本糖質学会年会

グリコサミノグリカンの合成異常に着目したAAアミロイドーシ ス発症制御因子の解明	誌上開催 2020.11.21- 11.23	第39回日本糖質学会年会
シンデカン-1を利用した Basal-like 型乳がん細胞の巧みな増殖戦略	誌上開催 2021.10.27- 10.29	第40回日本糖質学会年会
コンドロイチン硫酸による乳がん細胞の浸潤能促進機構の解析	2022. 9. 29~10.1	第41回日本糖質学会年会
III 学会等および社会における主な活動		
2001年～現在	日本分子生物学会会員	
1994年～現在	日本生化学会会員	
2001年～現在	細胞生物学会会員	
1995年～現在	糖質学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 放射線管理室	職名 准教授	氏名 安岡 由美
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2013年～現在に至る 2009年～現在に至る 2010年, 2014年, 2018年 1990年～現在に至る 1991年～現在に至る 1991年～現在に至る 2010年～現在に至る	放射化学：放射線に関する基礎知識 放射線管理学：放射線に関する総合的理解 早期体験学習：問題意識を持ち早期体験学習への積極性の育成 物理化学系実習(放射線実習)：放射性物質の安全取扱い ゼミ生の教育：環境放射能・公衆衛生 放射線業務従事者教育訓練：法令を順守と放射性物質の取り扱い法 実務実習事前教育:放射性医薬品の取り扱いについて
2 作成した教科書、教材、参考書	2007年～現在に至る	物理化学系実習(放射線実習) テキスト
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Wakabayashi, A., Yasuoka, Y., Janik, M., Nagahama, H., Fukuhori, N., Mori, Y., Arai, Y., Fujii, S., Mukai, T.	論文	Radioisotopes 2019 68 317-329. "Derivation and validity evaluation of calibration factors for activated-charcoal radon collectors."
Higuchi S., Kamishiro Y., Ishihara M., Yasuoka Y., Mori Y., Hosoda M., Iwaoka K., Tokonami S., Takahashi R., Janik M., Muto J., Nagahama H., Mukai T.	論文	Radiation Protection Dosimetry 2019, 184, 426-429. "Evaluation of a radon air monitor in the measurement of radon concentration in water in comparison with a liquid scintillation counter."
Omori, Y., Nagahama, H., Yasuoka, Y., Muto, J.	論文	Scientific reports 2021, 11, 4092. "Radon degassing triggered by tidal loading before an earthquake."
Muto, J., Yasuoka, Y., Miura, N., Iwata, D., Nagahama, H., Hirano, M., Ohmomo, Y., Mukai T.	論文	Scientific reports 2021, 11, 7451. "Preseismic atmospheric radon anomaly associated with 2018 Northern Osaka earthquake."
Matsumoto, M., Yasuoka, Y., Takakaze, Y., Tokonami S., Iwaoka K., Mukai T.	論文	Journal of Radioanalytical and Nuclear 2023, 332, 167-172. "Evaluation of radon concentration measurements in water using the radon degassing method."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
空気用ラドンモニタを用いた水中ラドン濃度測定におけるスクリーニング法の検討2	2021年12月	第3回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会
2018年大阪府北部地震前後の大気中ラドン濃度変動の検討	2019年7月	第56回アイソトープ・放射線研究発表会

監視モニタによる空气中ラドン濃度測定の評価 —温度依存性の評価—	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部大会
空気用ラドンモニタを用いた水中ラドン濃度測定におけるスクリーニング法の検討	2020年6月	日本保健物理学会第53回研究発表会 Web大会
排気モニタによる大気中ラドン濃度の推定	2020年6月	日本保健物理学会第53回研究発表会 Web大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1990年～現在に至る	日本薬学会会員	
1990年～現在に至る	日本アイソトープ協会	
1990年～現在に至る	日本保健物理学会会員 (2021/7～2023/6 理事)	
2001年～現在に至る	日本放射線安全管理学会会員	
2002年11月～現在に至る	放射線医学総合研究所 客員協力研究員	
2011年4月～2012年3月	日本放射線安全管理学会 メンタルケア委員会 委員	
2011年9月～2013年3月	日本保健物理学会 専門研究会「暮らしの放射線Q&A対応委員会委員」	
2011年9月11日	神戸市消防局 感謝状	
2011年11月1日	平成23年度主任者部会年次大会ポスター賞	
2014年7月～現在に至る	岡山県 環境放射線等測定技術委員会委員	
2016年10月～現在に至る	ISO/TC147(水質) /SC3 (放射線測定) 国内審議委員会委員	
2017年10月12日	日本アイソトープ協会 平成29年度放射線安全取扱部会表彰 放射線安全取扱部会功労表彰	

専任教員の教育・研究業績

所属 微生物化学研究室	職名 准教授	氏名 中山 喜明
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
(1) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)	2014年より2016年	「生物学系Ⅱ実習」(3年次後期)を分担した。微生物の取扱い、検出、同定についての基本的技能などを指導した。
	2015年より現在	「アクティブラボ」(1-3年次通年)を分担した。低学年次の研究室未配属学生に対して微生物化学研究室で行っている研究について、体験学習を行った。
	2015年より現在	「薬学入門」(1年次前期)を分担した。生物系薬学に関する基礎的講義を実施した。SGDやピア評価により能動的学習の導入を実践した。
	2016年より現在	「微生物化学実習」(2年次後期)を分担した。微生物の取扱い、検出、同定についての基本的技能などを指導した。
	2017年より2021年	「免疫学」(2年次後期)を分担した。
	2022年より現在	「免疫学」(2年次後期)を担当した。
(2) 本学薬学部学生への研究指導	2014年より現在	研究室に配属された学部学生に対して、研究指導を実施した。
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育	2013年より隔年	「生命科学特論」を分担。大学院生に対して、講義を実施した。
(4) 他大学での講義	2015年	京都大学大学院薬学研究科「基盤生物化学概論・生命科学概論講義」を分担した。
	2022年より現在	京都大学大学院医学研究科「分子生命基礎医療科学特論」を分担した。
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		<p>学術論文 八巻 耕也, 上田 昌史, 上田 久美子, 江本 憲昭, 水谷 暢明, 池田 宏二, 八木 敬子, 田中 将史, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 北河 修治 薬学雑誌., 2016, 136, 1051-1064. “基礎から臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の学習効果”</p>
		<p>学術論文 八巻 耕也, 池田 宏二, 上田 久美子, 土生 康司, 中山 喜明, 武田 紀彦, 森脇 健介, 和田 昭盛, 小山 淳子, 児玉 典子, 北河 修治 薬学雑誌., 2017, 137, 1285-1299. “分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導入が生み出す学習意欲と学習効果”</p>
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年より現在	実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップのタスクフォース
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Masuda Y, Nakayama Y, Shimizu R, Naito K, Miyamoto E, Tanaka A, Konishi M.	論文	“Maitake α -glucan promotes differentiation of monocytic myeloid-derived suppressor cells into M1 macrophages” Life Sciences. 317:121453. (2023)
Masuda, Y., Nakayama, Y., Tanaka, A., Naito, K., Konishi, M.	論文	“Activation of macrophages mediates dietary restriction-induced splenic involution” Life Sciences. 310:121068. (2022)
Hokari S, Chikahisa S, Shiuchi T, Nakayama Y, Konishi M, Nishino S, Itoh N, Sei H.	論文	“Social stress alters sleep in FGF21-deficient mice” Brain Research Bulletin. 191:40-47. (2022)

Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M	論文	“Maturation of dendritic cells by maitake α -glucan enhances anti-cancer effect of dendritic cell vaccination.” International Immunopharmacology. 67;408-406 (2019)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
マクロファージ分極における分泌因子neudesinの役割の検討	2023年3月	日本薬学会第143年会（札幌）
脳梗塞時のミクログリアにおける分泌因子neudesinの病理的役割の検討	2023年3月	日本薬学会第143年会（札幌）
分泌因子neudesinの樹状細胞機能の抑制を介した新規がん免疫回避機構の解明	2023年3月	日本薬学会第143年会（札幌）
III 学会等および社会における主な活動		
2004年8月～現在に至る	日本分子生物学会会員	
2012年8月～現在に至る	日本糖質学会会員	
2017年11月～現在に至る	日本薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	臨床心理学研究室	職名	准教授	氏名	中島 園美
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年4月～現在に至る	「社会心理学」は、オンデマンド講義であった。対人関係における様々な理論や実験を概説し、自己と他者の考えや行動への理解が深まることを目的とした。質問紙などの心理学的手法を用いて自己分析を行なうなどし、学生が体験的に学べるよう工夫を行った。			
	2012年4月～2023年3月	「総合文化演習」大学生の発達支援教育プログラムとして、将来のビジョンを獲得することを目的としたソリューション・フォーカスト・アプローチを導入した表現療法を実施している。さらに、疾患に関連する映画を用いたグループ発表を行い、患者や患者の家族への理解や生と死、医療のあり方について考えを深めた。また毎回SGDと小レポートを導入し、自己表現力や言語化能力向上を目指している。プレゼンテーション力を高めるために、まず最初に、グループでの発表、次に個人での発表と段階的にプレゼンテーション体験を積めるようにしている。その際、学生が到達目標を明確に理解できるように、ルーブリックを作成し、学生自身で達成度を評価できるようにした。それによって、自分の課題を発見することを目指した。			
	2015年4月～2017年8月	「臨床心理学」医療人として、患者と患者の家族への共感を基盤としたコミュニケーション能力を養うために、各疾患毎に心理的特徴を中心に概説し、望ましい関わり方を提示した。さらに、チーム医療の一員として多職種の中で適切なコミュニケーションが発揮できるように連携の留意点も解説した。さらに講義内容が医療現場で実践できるように、ケースを設定して、ロールプレイ、SGDを導入し、最後に自身のロールプレイを振り返り、考察や今後の自身の課題を小レポートにまとめることを求めた。次回の授業にて数名分の小レポートを読み上げてコメントをし、小レポートへの積極的な関与を高めたり、より多くの適切な対応例を知ることができるようにした。			
	2015年9月～2021年3月	「人の行動と心理」全人的医療を遂行できる医療人を養成するために、患者と家族の心理社会的側面を理解したり、医療現場でのコミュニケーション力の基盤を形成することを目指し、1年次に「人の行動と心理」、2年次の前期で「医療コミュニケーション」、後期で「医療コミュニケーション演習」と体系的・段階的なカリキュラムとなっている。まず、1年次での「人の行動と心理」では、人の行動と心理のメカニズムやプロセスを学び、患者や家族の心理的な問題をアセスメントし、適切に援助するための基盤を形成する内容とした。コミュニケーション・トレーニングである「アサーション」ワークも導入している。内容は、学生の身近な問題をケースとして取り上げ、自分の考えや気持ちを、相手の立場や気持ちも考慮しながら、適切な言葉で伝え、相互尊重の関係を築くことのできるコミュニケーション・スキルの獲得を目的とした構成にしている。そして、次回の授業のスライドにおいて、学生のレポートの中のいくつかを取り上げフィードバックを行い、同級生の適切な表現をモデリングできるよう意図した。			

	2016年4月～現在に至る	<p>「医療コミュニケーション」 医療人として、患者と患者の家族への共感的なコミュニケーションを実践できるように、各疾患毎の患者の心理的特徴を中心に説明し、望ましい関わり方を提示した。また、患者の家族のストレスも説明し、家族にも配慮やサポートが必要なことを伝えた。さらに、チーム医療の一員として多職種の中で適切なコミュニケーションが発揮できるように連携の留意点も解説した。 コミュニケーショントレーニング「アサーション」の「傾聴」ワークを導入している。 ゲストスピーカーとして、ホスピスに従事しているチャプレンに終末期に関する話をして頂いた。臨床現場の話聞くことは、医療者としての態度形成に役立つと考えた。</p>
	2016年10月～現在に至る	<p>「医療コミュニケーション演習」「医療コミュニケーション」で学んだことを基盤とした患者や家族への支援や医療チームのメンバーへの対応する実践力を獲得するために、臨床事例を設定し、小グループで、ロールプレイ、SDGを行った。小グループでの活動を通して、チームでの問題発見・解決能力を養うことも意図している。</p>
	2016年11月～現在に至る	<p>「医療倫理学演習」医療現場における倫理的問題を有する事例を提示し、SGDをしてワークシートに記入という構成になっている。導入において、学生がテーマに興味をもち、活発なディスカッションが行えるよう、関係する内容の新聞記事や映画などを紹介してから、事例を提示するという工夫を行なっている。</p>
	2018年9月～現在に至る	<p>「高齢者医療」において、『高齢者の心理と接し方』担当。現代の超高齢社会、医療者として高齢者と円滑にコミュニケーションを取るための基盤となる高齢者の心理的側面を概説した。今後の薬剤師の在宅医療への積極的な参画が求められることから、在宅医療の事例を提示し、患者の立場では、どのように感じるか、どんな医療を求めているかなどワークシートをもとにSGDを行なってもらった。患者の体験を知り、患者の立場で考えられ医療者の態度育成を意図している。</p>
	2019年4月～現在に至る	<p>「在宅医療演習」において、「高齢者の終末期在宅医療を考える」の講義を担当。高齢者の在宅医療の事例を用いたスモールグループディスカッションを通して、在宅医療を担う医療者の態度育成を目指している。ワークシートを用いて、学生が考えを深めていけるよう工夫した。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p>		
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p>	2013年9月	<p>「教育プログラムとしてのコラージュ療法－誘発コラージュ法と認知物語療法を導入した試み－」日本心理臨床学会第32回秋季大会 大会シンポジウム発表 口頭発表 抄録集111. 2013</p>
	2013年10月	<p>「コラージュ療法に認知物語アプローチを導入した教育プログラム開発研究－コラージュ作品を用いてのグループ・ディスカッションの効果－」日本コラージュ療法学会第5回大会 一般演題 口頭発表 抄録集24-25. 2013</p>
	2014年	<p>「コラージュ療法に誘発コラージュ法と認知物語療法を導入した教育プログラム開発研究－イメージ変化と認知の変化の事例検討－」コラージュ療法学研究 5(1), 59-70. 2014.</p>

	2018年9月	「薬学生による「認知症カフェ」の取り組み—メモリーブック作成による認知症患者と家族介護者との交流プログラム—」第3回日本薬学教育学会大会 一般演題 ポスター発表 講演要旨集 222.
	2019年6月	学長裁量経費に基づく教育改革プログラム及び学内研究プログラム成果報告会（2018年度） 「『認知症カフェ』における認知症高齢者そして家族介護者との交流活動を通しての薬学生の医療コミュニケーション力の変化—傾聴スキルの向上について」
	2020年3月	「薬学生に対する終末期ケア教育の試み」日本薬学会第140年会 一般演題 ポスター発表 要旨集 194.
	2020年3月	「医療系学生への共感力育成教育プログラム導入の効果検証—闘病記を用いた共感ワーカー」日本薬学会第140年会 一般演題 ポスター発表 要旨集 194.
	2020年9月	「薬学生への共感性を高める教育的プログラム—Jefferson Scale of Empathyでの効果検証—」第5回日本薬学教育学会大会 一般演題 ポスター発表 講演要旨集 192. 2
	2020年11月	「コラージュ療法を導入した大学生への発達支援教育プログラム」日本コラージュ療法学会第12回大会 一般演題 口頭発表 抄録集24-25.
4 その他教育活動上特記すべき事項	2015年10月	第70回リカレントセミナー 講演「薬剤師のためのコーチング - コーチングスキルを用いて患者さんとのコミュニケーション力をアップしよう」
	2016年6月	2016年度喫煙者の「禁煙教育」講演「認知行動アプローチで禁煙ワーク」場所：神戸薬科大学
	2016年6月	第1回健康サポートセミナー 講演「幸福へのヒントを得る心理学」場所：東灘区民センター（うはらホール）8階 会議
	2016年9月	平成28年度 兵庫地区大学月曜懇談会 9月例会 講演「軽度発達障害の特徴と学生支援」場所：神戸薬科大学
	2017/12/1～2022年8月	認知症カフェ 場所：地域連携サテライトセンター
	2017年3月	がん哲学学校 in 神戸 第12回メディカル・カフェ 演題「コラージュ・ワーク 自分を見つけるアート」場所：神戸薬科大学6号館 ラウンジ
	2018年3月	がん哲学学校 in 神戸 第17回メディカル・カフェ 講演「ストレス・マネジメント」場所：地域連携サテライトセンター
	2022年	2021年度ベストティーチャー賞受賞
	2022年10月	神戸薬科大学第62回薬剤師実践塾(オンライン研修会)講演 コミュニケーショントレーニング「アサーション」場所：エクステンションセンター

	2022年1月～現在に至る	キッズカフェ『ぬいぐるみ薬局』で薬剤師になってみよう！ 東灘区役所の後援で実施 場所:地域連携サテライトセンター
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
編集代表：北河 編集：岩川、高尾、長嶺 執筆：山中、中島、小塚、長嶺、辻井、南、橋本、白川、笠原、太田	著書	「薬剤師、在宅へ行く」南山堂 1章 Bad Newsを受容できない患者への対応 p 11-15. 8章 看取りに備える一エンド・オブ・ライフケア p 103-109. 執筆担当 (2022)
中島園美、松井左知子	論文	新型コロナウイルス感染症による活動自粛が認知症の家族介護者に与える精神的影響に関する質的研究 日本在宅医療連合学会誌第3巻別冊 40-44. 2022. (査読有)
中島園美	論文	大学生への発達支援教育プログラムとしてのコラージュ療法の応用 -ソリューション・フォーカスト・アプローチに基づくワークシートを用いて- コラージュ療法学研究 12(1), 3-14. 2021. (査読有)
2. 学会発表 (2018. 1. 1～2022. 12. 31に行った学会発表)		
演題名	発表年・月	学会名
薬学生に対する終末期ケア教育の試み	2020年3月	日本薬学会第140年会
新型コロナウイルス感染症による活動自粛が認知症の家族介護者に与える精神的影響に関する質的研究	2021年11月	第3回日本在宅医療連合学会
薬剤師の声の高低は患者の安心感とパーソナリティ印象にどう影響するのか？	2021年8月	第6回日本薬学教育学会大会
バディシステムを用いたコミュニケーションワークによる薬学生の社会的スキル向上の効果検討	2022年8月	第7回日本薬学教育学会大会
母親と薬学生が考える小児医療で求められる薬剤師像のズレ	2022年10月	第72回日本薬学学会関西支部総会大会
III 学会等および社会における主な活動		
2006年4月～現在に至る	日本心理臨床学会員	
2009年4月～現在に至る	カウンセリング学会員	
2009年4月～2017年11月	地方独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪はびきの医療センター (旧大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター) 教育入院プログラム「ストレス・マネジメント」心理教育担当、アトピー性皮膚炎患者および家族へのカウンセリング担当	
2013年4月～現在に至る	日本コラージュ療法学会員	
2014年10月15日	帝塚山学園 (帝塚山大学) 講演 教育セミナー「ストレスマネジメント - 対人関係を円滑にするコミュニケーション -」	

2014年12月	「重症アトピー性皮膚炎患者への長期的支援としての集団コラージュ療法—作品と認知物語療法を通して表現された心的世界の検討—」 第62回 京都文教コラージュ療法研究会 講演
2016年4月～現在に至る	日本薬学教育学会員
2016年4月～現在に至る	日本薬学会員
2021年5月～現在に至る	日本在宅医療連合学会員

専任教員の教育・研究業績

所属	製剤学研究室	職名	准教授	氏名	古林 呂之
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
薬剤設計学		2018年10月～	3年次科目。SBOsに基づき、薬剤師国家試験で取り扱われる内容をできる限り盛り込んだ資料を作成し、配布している。学生それぞれの興味に様々な角度からアプローチするためにより多くの情報を提供している。		
臨床薬剤学 I		2019年4月～	4年次科目（全12コマのうち3コマ担当）。SBOsに基づき、薬剤師国家試験で取り扱われる内容をできる限り盛り込んだ資料を作成し、配布している。学生それぞれの興味に様々な角度からアプローチするためにより多くの情報を提供している。		
臨床薬剤学 II		2020年4月～	6年次科目（全12コマのうち1コマ担当）。浸透圧の計算について、演習形式で授業を行い、詳細な解説により根本からの理解に繋がるよう工夫している。		
総合薬学講座		2018年10月～	6年次科目（4コマ担当）。製剤学について国家試験で重要となる内容に絞り、網羅的に復習できる資料を作成し配布している。		
アクティブラボ		2019年4月～	3年次生を対象に薬物動態関連の研究を行い、薬剤学分野の研究の面白さと研究室の雰囲気を感じてもらおうように工夫している。		
製剤学・薬剤学実習		2019年4月～	3年次生後期の製剤学・製剤学実習において、製剤化と粉体物性測定についての指導を行っている。		
卒業研究		2018年10月～	製剤学研究室に配属された4、5、6年次生に対し、卒業研究の指導を行っている。卒業研究を通して、問題解決能力やプレゼンテーション能力等を養えるよう、学年や学生個々の能力に合わせて指導するよう努めている。		
早期体験学習		2022年4月～	1年生クラス担任として、薬局見学にかかる準備と報告に関する指導を行った。その他、これから先の大学生活における勉強方法や生活面について指導を行い、スムーズに大学生活に馴染んでもらえるように働きかけた。また、その間にクラス学生の性格等をできるだけ把握するように努めた。		
薬剤学特論(大学院)		2018年10月～	薬物の経鼻吸収動態と評価法及び経粘膜薬物吸収における製剤機能の評価と製剤化の実際について、他の専門分野の学生にも理解できるように可能な限りかみ砕いて講義している。		
大学院研究指導		2021年4月～	研究の目的の理解と必要な実験及び計画と実施について、また、得られたデータの解析についての指導を行っている。		

<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p> <p>(1) 重要公式を用いたわかりやすい薬剤学計算問題の解き方 物理薬剤学・製剤学編(改訂版) 寺田勝英／高山幸三 編集(ネオメディカル)</p> <p>(2) 製剤化のサイエンス(改訂7版) 寺田勝英／高山幸三 編集(ネオメディカル)</p> <p>(3) わかりやすい薬物動態計算問題の解き方 丸山一雄／中瀬朋夏 編集(ネオメディカル)</p>	<p>2014年3月16日</p> <p>2015年3月23日</p> <p>2019年3月28日</p>	<p>製剤学2 製剤試験(粉体粒度測定法)、製剤学3 製剤試験(製剤均一性試験)を担当、執筆した。(前職において執筆)</p> <p>第2部製剤設計 第2章製剤化と製剤試験法 「Ⅰ医薬品添加物」、「Ⅱ製剤化」を執筆した。(前職において執筆)</p> <p>⑱腎クリアランス、⑳クレアチニンクリアランス(Cockcroft-Gaultの式)を執筆した。</p>
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし</p>		
<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p> <p>特になし</p>		
<p>II 研究活動</p>		
<p>1. 著書・論文等</p>		
<p>氏名</p>	<p>種別</p>	<p>内容</p>
<p>Tanaka A., Takayama K., Furubayashi T., Mori K., Takemura Y., Amano M., Maeda C., Inoue D., Kimura S., Kiriyaama A., Katsumi H., Miyazato M., Kangawa K., Sakane T., Hayashi Y., Yamamoto A.</p>	<p>論文</p>	<p><i>Mol. Pharm.</i>, 2020, 17, 32-39. "Transnasal Delivery of the Peptide Agonist Specific to Neuromedin-U Receptor 2 to the Brain for the Treatment of Obesity."</p>
<p>Furubayashi T., Inoue D., Nishiyama N., Tanaka A., Yutani R., Kimura S., Katsumi H., Yamamoto A., Sakane T.</p>	<p>論文</p>	<p><i>Pharmaceutics</i>, 2020, 12, 79-92. "Comparison of Various Cell Lines and Three-Dimensional Mucociliary Tissue Model Systems to Estimate Drug Permeability Using an In Vitro Transport Study to Predict Nasal Drug Absorption in Rats."</p>
<p>Furubayashi T., Inoue D., Kimura S., Tanaka A., Sakane T.</p>	<p>論文</p>	<p><i>Pharmaceutics</i>, 2021, 13, 1363. "Evaluation of Pharmacokinetics of Intranasal Drug Delivery for Targeting Cervical Lymph Nodes in Rats."</p>
<p>Tanaka A., Nakano H., Yoneto K., Yoneto C., Furubayashi T., Suzuki K., Okae A., Ueno T., Sakane T.</p>	<p>論文</p>	<p><i>Biol. Pharm. Bull.</i>, 2022, 45, 403-408. "Topical Xerostomia Treatment with Hyaluronate Sheets Containing Pilocarpine."</p>
<p>Kiguchiya A., Teraoka R., Furubayashi T., Sakane T.</p>	<p>論文</p>	<p><i>Yakugaku Zasshi</i>, 2023, 143, 1, 77-84. "Evaluation of Photostability of Small Molecular Compounds with Solid-state UV Spectra."</p>

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
経鼻反復投与による血中薬物濃度の維持コントロールに関する検討～鼻腔内滞留時間の制御～	2022年3月	日本薬学会第142年会
鼻腔内投与による視神経への薬物送達	2022年5月	日本薬剤学会第37年会
鼻粘膜を介した頸部リンパ節送達におけるペプチド薬の物性の影響	2022年5月	日本薬剤学会第37年会
脂溶可溶化ゲル製剤を利用した α -galactosylceramideの頸部リンパ節送達の改善	2022年5月	日本薬剤学会第37年会
鼻腔内投与によるoxytocinの脳内送達－Glymphatic systemの影響－	2022年6月	第38回日本DDS学会学術集会
3. その他		
講演演題名	発表年・月	会名
点鼻剤の過去・現在・未来～薬物動態学・製剤学から点鼻剤を考える～	2019年10月	第183回神戸西ブロック薬学研修会
薬物の経鼻吸収動態評価と制御 ～経鼻投与は経口投与に代わるのか？～	2022年5月	日本薬剤学会第37年会 学術シンポジウム
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1995年9月～	日本薬物動態学会委員（現在に至る）	
1996年1月～	日本薬学会会員（現在に至る）	
1997年1月～	日本薬剤学会会員（現在に至る）	
2001年7月～	日本DDS学会会員（現在に至る）	
2013年9月～	創剤フォーラム会員（現在に至る）	
2019年5月～	日本がん免疫学会会員（現在に至る）	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬品物理化学研究室	職名 准教授	氏名 佐野 紘平
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		
(1) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)	2016年～現在	物理化学系実習 (2年次後期) GM計数管による β 線の測定、計数の統計的変動の理解に関する実習等を担当
	2016年～現在	物理化学Ⅲ (2年次後期) (分担、6コマ) 溶液の性質および電気化学に関する講義を担当 学生の理解を深めるために、問題演習を実施。
	2016年～2020年	アクティブラボ (1～3年次通年) 1～3年次の学部学生に対して、物理化学関連の実験指導を実施。
	2017年～現在	薬学入門 (1年次前期) 物理系薬学に関する基礎的講義を実施。
	2017年～現在	アイソトープ演習 (3、4年次前期) (分担、6コマ) 放射線取扱主任者試験 (国家試験) の資格取得を目指し、問題演習を実施。 2018年度と2020年度、受講生から第1種放射線取扱主任者試験に1名ずつ合格
(2) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)	2016年～現在	研究室に配属された学部学生に対して研究指導を実施。 担当学生計5名が学会優秀発表賞を受賞 (計7件)。
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育	2016年～現在	大学院生に対して、講義および研究指導を実施。 担当学生2名が学会優秀発表賞を受賞 (計3件)。
	2019年、2021年	物理系創薬学特論 (大学院博士)
(4) 他大学での講義	2017年7月14日	京都大学大学院薬学研究科の大学院生にセラノスティックス分子プローブに関する講義を実施。

2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし
4 その他教育活動上特記すべき事項		該当なし
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kohei Sano, Yuko Kanada, Katsushi Takahashi, Ning Ding, Kengo Kanazaki, Takahiro Mukai, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	<i>Molecular Pharmaceutics</i> , 15 :3997-4003 (2018) Enhanced delivery of radiolabeled polyoxazoline into tumors via self-aggregation under hyperthermic conditions.
Kohei Sano, Ling Bao, Natsuka Suzuno, Kento Kannaka, Toshihide Yamasaki, Masayuki Munekane, Takahiro Mukai	論文	<i>ACS Applied Polymer Materials</i> , 1 :953-958 (2019) Development of cancer-targeted single photon emission computed tomography/fluorescence dual imaging probe based on polyoxazoline.
Kohei Sano, Natsuka Suzuno, Ling Bao, Yoshie Haratake, Kohei Kijima, Masayuki Munekane, Toshihide Yamasaki, Takahiro Mukai	論文	<i>ACS Applied Polymer Materials</i> , 3 :4889-4895 (2021) Development of a poly(2-ethyl-2-oxazoline)-based fluorescence imaging probe targeting folate receptor in tumor tissues.
Kohei Sano, Yumi Ishida, Toshie Tanaka, Tatsuya Mizukami, Tomono Nagayama, Yoshie Haratake, Masayuki Munekane, Toshihide Yamasaki, Takahiro Mukai	論文	<i>Cancers</i> , 13 :5005 (2021) Enhanced delivery of thermoresponsive polymer-based medicine into tumors by using heat produced from gold nanorods irradiated with near-infrared light.
Kohei Sano, Koki Umemoto, Haruka Miura, Satoshi Ohno, kyohei Iwata, Rin Kawakami, Masayuki Munekane, Toshihide Yamasaki, Daniel Citterio, Yuki Hiruta, Takahiro Mukai	論文	<i>ACS Applied Polymer Materials</i> , 4 :4734-4740 (2022) Feasibility of using poly[oligo(ethylene glycol) methyl ether methacrylate] as tumor-targeted carriers of diagnostic drugs.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Enhanced delivery of radiolabeled thermoresponsive polymers into tumors under hyperthermic conditions for internal radiotherapy. (Best Poster Award受賞)	2018年・11月	The tenth China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences

熱応答凝集性ポリマー型放射性薬剤を用いる内用療法の開発研究	2019年・11月	第59回 日本核医学会学術総会
生体直交型反応による薬物放出を可能とする抗がん剤内封リポソーム製剤の開発 (JCA若手研究者ポスター賞受賞)	2021年・10月	第80回 日本癌学会学術総会
関節リウマチの診断、治療に資する蛍光色素標識酸化鉄ナノ粒子の開発 (優秀ポスター発表賞受賞)	2021年・10月	第71回 日本薬学会関西支部大会
Internal radiotherapy of tumors using radiolabeled polymers that thermoresponsively self-aggregate under hyperthermic conditions. (Young Investigator Award受賞)	2021年・11月	The 11th China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences
3. その他 (講演等)		
演題名	発表年・月	学会名
Brachytherapy with intratumoral injections of radiometal-labeled polymers that thermo-responsively self-aggregate in tumor tissues. (日本核医学会研究奨励賞 (最優秀賞) 受賞講演)	2018年・11月	第58回 日本核医学会学術総会
水溶性高分子の物理化学的特性に基づくがんのセラノスティクス薬剤の創製 (日本薬学会奨励賞) 受賞講演)	2019年・3月	日本薬学会 第139年会
がんのセラノスティクスを目指した水溶性ポリマーを基盤とするDDS製剤の開発	2020年・8月	第36回 日本DDS学会学術集会
がんの核医学治療に資する小線源型放射性薬剤の開発	2021年・5月	核医学診断・治療のためのRI利用推進シンポジウムー64Cu・67Cu：核種製造と治療薬創製の展望ー
全身性アミロイドーシスの核医学診断に資する放射性ヨウ素標識thioflavin-T-Congo-redハイブリッド型プローブの開発	2022年・5月	第16回 日本分子イメージング学会学術集会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

佐野

2003年～現在	日本薬学会会員
2006年～現在	日本分子イメージング学会会員
2008年～現在	日本核医学会会員
2016年～現在	日本DDS学会会員
2019年～現在	日本癌学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属	臨床薬学研究室	職名	准教授	氏名	原 哲也
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2020年7月1日－		学部学生に薬物治療学Ⅳ、薬物治療学Ⅴ、処方解析Ⅱ、総合薬学講座を担当している。これまでの臨床医としての経験に基づき、学生の疾患の病態への理解と興味を引き出すため、実際に経験した症例とのエピソード、病棟での実体験をできるだけ織り交ぜながら講義するようにしている。講義前にパワーポイントファイルをプリントし、一部穴埋め式にして、集中力を維持させるよう工夫している。少単元毎、もしくは授業毎に講義したことの復習や、具体的に国家試験で求められる知識レベルをイメージできるように、過去問を提示して、解答させるようにしている。Googleフォームを用いて、リアルタイムに学生の理解力を把握する。これにより、正解率が高い問題の解説は少なくし、低い問題には時間を費やす、という対応ができるように独自に工夫をしている。神戸大学医学部医学科の学生や、研修医への教育にも従事しており、研究室に配属された学生には、医学部学生との合同授業や、研修医との合同ミーティングをZOOMを用いて参加させている。これらによって多職種連携への意識づくり、医師視点での考え方を身に着け、将来の医師への情報提供、疑義照会がスムーズにできるように工夫している。	
2 作成した教科書、教材、参考書 β遮断薬のすべて 第三版		2008年		「β遮断薬の血管、血管内皮に対する作用」を担当した。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Okano M, Hara T, Nishimori M, Irino Y, Satomi-Kobayashi S, Shinohara M, Toh R, Jaffer FA, Ishida T, Hirata K.	論文	In Vivo Imaging of Venous Thrombus and Pulmonary Embolism Using Novel Murine Venous Thromboembolism Model JACC Basic Transl Sci. 2020;5:344-356.
Hisamatsu E, Nagao M, Toh R, Irino Y, Iino T, Hara T, Tanaka H, Satomi-Kobayashi S, Ishida T, Hirata KI.	論文	Fibronectin-containing High-Density Lipoprotein is Associated with Cancer Cell Adhesion and Proliferation. Kobe J Med Sci 2020;66:E40-E48.
Oshita T, Toh R, Nagano Y, Kuroda K, Nagasawa Y, Harada A, Murakami K, Kiriya M, Yoshikawa K, Miwa K, Kubo T, Iino T, Nagao M, Irino Y, Hara T, Shinohara M, Otake H, Shinke T, Nakajima K, Ishida T, Hirata KI.	論文	Association of cholesterol uptake capacity, a novel indicator for HDL functionality, and coronary plaque properties: An optical coherence tomography-based observational study. Clin Chim Acta. 2020;503:136-144.
Suzuki M, Tanaka H, Yokota S, Hara T, Ueda Y, Hirata KI.	論文	Multiple cardiac complications associated with collagen disease. J Echocardiogr. 2020, in press.
Yoshikawa S, Hara T, Suzuki M, Fujioka M, Taniguchi Y, Hirata KI.	論文	Imatinib Dramatically Improved Pulmonary Hypertension Caused by Pulmonary Tumor Thrombotic Microangiopathy (PTTM) Associated with Metastatic Breast Cancer. Int Heart J. 2020;61:624-628.
Jaffer FA, Hara T.	論文	PET/MR Illumination of Atherosclerosis Pathobiology: How a Nanobody Becomes Somebody. JACC Cardiovasc Imaging. 2019;123:2027-2028.
2. 学会発表		

演題名	発表年・月	学会名
Real-Time in Vivo Imaging of Thrombosis Initiated by Red Blood Cell Aggregation in Novel Murine Stasis Model of DVT.	2018年7月	日本動脈硬化学会 学術総会
Establishment of novel deep venous thrombosis model suitable for in vivo imaging.	2018年11月	AHA Scientific Sessions 2018
新規マウス血栓モデルによるDVT生体イメージング	2018年9月	日本腫瘍循環器学会 学術総会
Establishment of femoral vein ligation model; a new DVT imaging model.	2019年4月	Vascular Discovery 2019.
Novel Deep Venous Thrombosis Model Enabled Visualization of Thrombus Formation and Organization Process in vivo.	2019年3月	日本循環器学会 学術総会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2002年6月-	日本内科学会	2007年10月-現在 日本内科学会認定内科医、2018年12月-現在 日本内科学会総合内科専門医
2002年6月-	日本循環器学会	2009年4月-現在 日本循環器学会認定専門医
2021年6月-	ISHR日本部会 U45	leader

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 准教授	氏名 河内 正二
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2009年4月～現在 2012年4月～現在 2012年4月～2020年3月 2012年4月～現在 2014年4月～現在 2015年4月～現在 2016年4月～現在 2018年4月～現在 2019年4月～現在 2020年4月～現在 2020年4月～現在 2023年4月～現在	4年次の「実務実習事前教育」を分担した。 4、5年次の「海外薬学研修」の講義を分担した。 6年次の「処方解析学・演習」を分担した。 6年次の「総合薬学講座」を分担した。 3年次の「調剤学Ⅰ」を分担した。 1年次の「早期体験学習（救命救急訓練）」を分担した。 4年次の「安全管理医療」を分担した。 4年次の「処方解析学Ⅰ・Ⅱ」を分担した。 5年次の「在宅医療演習」を分担した。 2年次の「医療コミュニケーション演習」を分担した。 6年次の「感染制御学Ⅱ」を分担した。 1年次の「薬学入門」を分担した。 臨床現場での経験を活かして最新の情報を提供することを心がけている。講義に使用する資料は、図表や写真画像および動画を多く取り入れ、学生が理解し、知識が定着するよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年4月～現在 2017年4月～現在に至る	神戸大学附属中学校と連携したがん教育プログラムの推進に参画している。 タスクフォースとして、薬剤師のためのワークショップに協力している。
II 研究活動		

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Horibe S, Kawauchi S, Tanahashi T, Sasaki N, Mizuno S, Rikitake Y.	論文	Biochem BiophysRes Commun. 2018; 507 (1-4) :426-432. "CD44v-dependent upregulation of xCT is involved in the acquisition of cisplatin resistance in human lung cancer A549 cells"
Kawauchi S, Horibe S, Sasaki N, Tanahashi T, Mizuno S, Hamaguchi T, Rikitake Y.	論文	Mar Drugs. 2019; 17 (2) :104. "Inhibitory effects of sodium alginate on hepatic steatosis in mice induced by a methionine- and choline-deficient diet"
Kawauchi S., Horibe S., Sasaki N., Hirata KI., Rikitake Y.	論文	Exp Cell Res. 2019; 374(2): 333-341. "A novel in vitro co-culture model to examine contact formation between astrocytic processes and cerebral vessels"
Amin HZ, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Hayashi T, Emoto T, Matsumoto T, Yoshida N, Tabata T, Horibe S, Kawauchi S, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	Sci Rep. 2019; 9(1):8065. "CTLA-4 Protects against Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice"
Horibe S, Ishikawa K, Nakada K, Wake M, Takeda N, Tanaka T, Kawauchi S, Sasaki N, Rikitake Y.	論文	Oncol Rep. 2022; 47:32. "Mitochondrial DNA mutations are involved in the acquisition of cisplatin resistance in human lung cancer A549 cells".
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Inhibitory effects of sodium alginate on methionine and choline-deficient diet-induced hepatic steatosis in mice.	2018年6月	10th International Symposium on Cell/Tissue Injury and Cytoprotection /Organoprotection 2018
データマイニング手法によるNASHの原因医薬品の探索ならびに自己組織化マップの有用性	2019年3月	日本薬学会第139年会
肝性脳症患者へのリファキシミン長期投与による有効性と安全性の調査	2019年10月	第69回 日本薬学会関西支部総会・大会

薬剤性非アルコール性脂肪肝炎（NASH）が小腸粘膜恒常性に及ぼす影響	2022年3月	日本薬学会第142年会
アミオダロンによる薬剤性NASHにおける小腸粘膜恒常性の破綻機序に関する検討	2023年3月	日本薬学会第143年会
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
III 学会等および社会における主な活動		
2005年4月～現在	日本病院薬剤師会	
2005年4月～現在	日本医療薬学会	
2009年4月～現在	日本薬学会	
2010年4月～現在	日本薬剤師会	
2017年4月～現在	登録販売者試験委員（兵庫県2017-2018、関西広域連合2019-）	

専任教員の教育・研究業績

所属 生命分析化学研究室	職名 准教授	氏名 大山 浩之
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
分析化学実習	2010年4月～現在	分析化学実習では、講義で学んだ原理・原則などについて実習を通してより理解を深くし、安全かつ円滑に実験を遂行するための手法や技術の指導に努めている。
分析化学II	2018年4月～現在	各種滴定の原理およびこれらの応用例を講義している。医薬品の定量分析では国家試験でよく出題されるポイントを中心に解説している。
卒業研究I, II, III	2010年4月～現在	研究テーマの背景やその新規性に関して、平易な例を示しつつその重要性や国内外での位置づけ、今後の発展性や社会における有用性を理解させるよう努めている。短期的なゴールを設定し、モチベーション維持させることを心掛けている。
薬学入門	2010年4月～現在	化学的、物理的、生物化学的分析法について、代表例を挙げながら分析化学という学問に興味を持てるよう講義している。また、薬剤師国家試験での出題や薬剤師の業務との関連性についても解説し、自身の研究との接点にも言及している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Oyama H., Kiguchi Y., Morita I., Yamamoto C., Higashi Y., Taguchi M., Tagawa T., Enami Y., Takamine Y., Hasegawa H., Takeuchi A., Kobayashi N.	論文	Sci. Rep. 2020, 10, 4807. "Seeking high-priority mutations enabling successful antibody-breeding: systematic analysis of a mutant that gained over 100-fold enhanced affinity"
Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Morikawa M., Nakano A., Fujihara W., Inoue Y., Sasaki M., Saijo Y., Kanemoto Y., Murayama K., Baba Y., Takeuchi A., Kobayashi N.	論文	Sci. Rep. 2020, 10, 14103. "Clonal array profiling of scFv-displaying phages for high-throughput discovery of affinity-matured antibody mutants"
19. Morita I., Oyama H., Kiguchi Y., Oguri A., Fujimoto N., Takeuchi A., Tanaka R. Ogata J., Kikura-Hanajiri R., Kobayashi N.	論文	J. Pharm. Biomed. Anal.2020, 190, 113485. "Immunochemical monitoring of psilocybin and psilocin to identify hallucinogenic mushrooms"
Oyama H., Kiguchi Y., Morita I., Miyashita T., Ichimura A., Miyaoka H., Izumi A., Terasawa S., Osumi N., Tanaka H., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. Acta. 2021, 1161, 238180. "NanoLuc luciferase as a suitable fusion partner of recombinant antibody fragments for developing sensitive luminescent immunoassays"
28. Su J., Zhu B., Inoue A., Oyama H., Morita I., Dong J., Yasuda T., Sugita-Konishi Y., Kitaguchi T., Kobayashi N., Miyake S., Ueda H.	論文	Biosens. Bioelectron. 2023, 219, 114793. " The Patrol Yeast: A new biosensor armed with antibody-receptor chimera detecting a range of cell wall-impermeable toxic substances associated with food poisoning"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
In vitro affinity maturation of anti-cortisol antibodies to develop sensitive immunoassays	2019年5月	23rd IFCC-EFLM European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
高感度な発光ELISAを目的とするscFv融合用レポーター酵素の比較検討	2020年10月	第70回日本薬学会関西支部総会・大会
CDR内チロシン置換の抗 Δ^9 テトラヒドロカンナビノールscFv抗原結合能への影響	2021年3月	日本薬学会第141年会

コルチゾール-抗コルチゾールscFv複合体を認識するラクダ化単一ドメイン抗体の探索	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部総会・大会
CAP法を活用するチロキシン-抗チロキシンscFv複合体を認識する変異scFvの探索	2023年3月	日本薬学会第143年会
III 学会等および社会における主な活動		
2004年4月～現在	日本薬学会会員	
2006年6月～現在	日本分析化学会会員	
2010年4月～現在	日本臨床化学会会員	
2013年4月～現在	生物化学的測定研究会会員	
2017年6月～現在	日本法中毒学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	中央分析室	職名	准教授	氏名	都出 千里
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		1996～2010	有機化学系III実習（旧 機器分析学実習および有機化学系II実習） 学生実習の円滑な進行を促すための準備をおこない、実習講義をおこない実習室で学生の指導に当たる。また、実習内容についての討議を学生と行い理解を深めさせた。		
		2003, 2005, 2006	情報リテラシー 講義の円滑な進行のためのサポートを行った。		
		2010～	構造解析学I（分担）担当分野をわかりやすくするためにパワーポイント、補充プリントを用いて講義を行っている。		
		2017～	有機化学演習（B 4クラス）担当分野の説明をわかりやすくするために補助プリントを用いて講義を行っている。		
		2018～	情報リテラシー（分担）では担当範囲をわかりやすくするためパワーポイントを用いた講義を行っている。また、補講時間を設け、授業だけでは課題が終わらない学生に指導している。		
		2018～	構造解析学II（分担）で担当分野の説明をわかりやすくするためにパワーポイントや補助プリントを作成したり、実際のスペクトルの測定なども行っている。		
		2019～	有機化学演習で理解を深めるために、ほぼ毎回、学生に問題を2～3問、紙に解答させ、それを添削することで、個人個人に反応式の書き方などを指導した。		
		2023～	分析化学(III)（分担）新カリキュラムの講義であり、構造解析学Iの内容を含む。分光分析全般が担当であることから、それぞれの違いなども併せて説明し、理解しやすくする工夫をしている。また、補助プリントも作成し、講義を行っている。		
		2023	分析化学III(分担)旧カリキュラムの講義でX線回折や旋光度の講義を担当した。教科書だけではわかりにくいところが多いので、大切なところをまとめたプリントを作成し、講義で使用している。		
		1996～	毎年数名のゼミ生の実験指導を行い、学年末にはプレゼンテーションのためのまとめ方、発表の方法などの指導を行った。		

2 作成した教科書、教材、参考書	2010～2012	分析化学III(分担)NMRやE S Rの原理を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。
	2013～	構造解析学 I (分担)NMRやE S Rの原理を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。
	2010～	現在の薬学総合講座では最低限必要なことをまとめたプリントを用意するとともに毎年、国家試験の問題を追加して解説するための資料を作成している。
	2018～	構造解析学 I I (分担)NMRでの構造解析を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。演習するスペクトル課題を選定し、プリントにしている。
	2021～	構造解析学 I で使用している薬学機器分析学のNMRの部分について改定し、執筆した。
	2022.2	廣川書店 薬学機器分析第3版 (共著)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Teraoka R. Fukami T. Furuishi T. Nagase H. Ueda H. Tode C. Yutani R. Kitagawa S. Sakane T.	論文	Chem. Pharm. Bull. (2019), 67(9), 940-944. "Improving the solid-state photostability of furosemide by its cocrystal formation"
Yutani R. Haku R. Teraoka R. Tode C. Koide T. Kitagawa S. Sakane T. Fukami T.	論文	Crystals (2019), 9(11), 553. "Comparative evaluation of the photostability of carbamazepine polymorphs and cocrystals"

Yoshimura H. Hirota Y. Soda S. Okazeri M. Takagi Y. Takeuchi A. Tode C. Kamao M. Osakabe N. Suhara Y.	論文	Bioorganic & Medicinal Chemistry Letters (2020), 30(8),127059. "Study on structure-activity relationship of vitamin K derivatives: Conversion of the naphthoquinone part into another aromatic ring and evaluation of their neuronal differentiation-inducing activity"
Tode C. Maoka T. Takeuchi A.	論文	Carotenoid Science (2020), 24, 24-34. "Application of DOSY Experimentto Analysis of Astaxanthin and it's Analogues"
Maoka T. and Tode C.	論文	Marine Drugs, (2022), 20, 732-737. "A Novel Carotenoid with a Unique 2,6-Cyclo- ψ -End Group, Roretziaxanthin, from the Sea Squirt Halocynthia roretzi"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ζ -caroteneの合成研究－その1－	2019.9	第33回カロテノイド研究談話会
固体NMRを用いたロキソプロフェンナトリウムの構造解析	2020.3	日本薬学会 第140年会
ζ -caroteneの幾何異性体の合成研究	2021.3	日本薬学会 第141年会
NMRによるシクロデキストリン包接挙動の解明及び苦みマスク効果との関連	2021.9	第37回シクロデキストリンシンポジウム
qNMR法を用いた健康食品中の有効成分の含有量調査－その1－	2023.3	日本薬学会 第143年会
III 学会等および社会における主な活動		
1993年12月～	日本薬学会会員	
1995年～	日本カロテノイド学会会員	
2006年～	日本核磁気共鳴学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品化学研究室	職名	准教授	氏名	武田 紀彦
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2015年10月～現在	3年次の「医薬品化学実習」を担当している。医薬品合成を実施し、基本的な化学反応を理解してもらうように努めている。未知検体においては様々な定性試験から得られた官能基の情報をもとに、未知検体の正しい構造へ導ける論理的思考を養うように心がけている。			
	2015年4月～2022年3月	1年次の「薬学入門（分担）」の有機化学の部分を担当している。「これから習う有機化学」を意識しながら、NSAIDsを題材に講義をしている。またスモールグループディスカッションを行うことで、薬は有機化合物であり、有機化学、物理化学、薬理学、薬剤学など様々な学問と関連していることを理解してもらうように意識している。			
	2017年9月～現在	3年次の「医薬品化学（分担）」の「代謝系に作用する医薬品、抗がん剤、感染症治療薬」を担当している。薬剤名による単なる記憶ではなく、医薬品の構造式をみれば、どのような薬理作用を持ち、その投与方法、溶解度や酸性・塩基性などの物理的性質がイメージできる学問であることを意識してもらうように心がけている。			
	2017年9月～現在	3年次の「有機化学演習 B3」を担当している。これまで習った講義内容の総まとめであるが、すべての内容がつながり、より深く理解してもらう目的で、学生には適宜反応機構や解答などを板書してもらう。学生がわからない箇所、大事なポイントは特に丁寧に説明し、少しでも理解が深まるように意識しながら講義をしている。			
	2018年8月～現在	4年次の「合成化学II(分担)」を担当している。これまで習得した化学反応を活用し、与えられた分子の合理的な合成経路を提案してもらう。始めにチュートリアルで逆合成解析を説明し、各自練習問題を解いてもらう。次に複雑な分子を設定し、スモールグループディスカッションを通して様々な合成経路を議論・考慮し、最終的に合成経路を各グループ発表してもらう。各グループには質疑応答も対応できる十分な対策を練るよう指導している。			

	2020年4月～現在	6年次の「がん薬物療法論(分担)」の「低分子の細胞障害性抗がん薬」を担当している。有機化学の観点から抗がん薬の構造式の重要性、官能基が果たす役割、その作用機序を含めて説明している。特に抗がん薬にはヘテロ環が多く含まれているため、ヘテロ環の分類、化学的性質、反応性だけでなく生体内DNA関連のヘテロ環の説明から始まり、古典的なDNAのアルキル化による抗がん薬からチロシンキナーゼ阻害薬である分子標的薬まで幅広く、理解してもらえるように意識している。
	2021年4月～現在	2年次の「医薬品構造学(分担)」を担当している。パーキンソン病を題材に有機化学、薬理学、臨床薬学の視点から分野横断型講義を展開しています。履修している薬学系科目が全て繋がっていることを意識しながら説明している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2021年5月	第22回 公開市民講座 ー神戸薬科大学の知の還元ー 「くすりのちから＝分子のちから～未来を変える分子のつくり方を目指して～」 Web配信ではあるが、講師を務めた。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Matsuzaki H., Takeda N., Yasui M., Ito Y., Konishi K., Ueda M.	論文	Org. Lett., 2020, 22(23), 9249-9252. "Synthesis of Pyrazoles Utilizing the Ambiphilic Reactivity of Hydrazones" doi: 10.1021/acs.orglett.0c03465
Takeda N., Kobori Y., Okamura K., Yasui M., Ueda M.	論文	Org. Lett., 2020, 22(24), 9740-9744. "Sequential Nucleophilic Arylation/Ring-Contractive Rearrangement of N-Alkoxy lactams" doi: 10.1021/acs.orglett.0c03821

Takeda N., Kobori Y., Yasui M., Matsumoto Y., Orihara K., Kido Y., Ueda M.	論文	Tetrahedron. Lett., 2021, 73, 153098. "Sequential nucleophilic addition/1,2-rearrangement of <i>N</i> -iminolactam: A ring contractive strategy for the synthesis of 2-acyl pyrrolidines" https://doi.org/10.1016/j.tetlet.2021.153098
Matsuzaki H., Takeda N., Yasui M., Okazaki M., Suzuki S., Ueda M.	論文	Chem. Commun., 2021, 57, 12187-12190. "Synthesis of multi-substituted 1,2,4-triazoles utilizing the ambiphilic reactivity of hydrazones" https://doi.org/10.1039/D1CC05326D
Takeda N., Suganuma R., Yasui M., Ueda M.	論文	Org. Biomol. Chem., 2023, 21, 1435-1439. "Synthesis of isolable β -chloroamines from <i>N</i> -alkoxylactams with organometallic reagents" https://doi.org/10.1039/D2OB02151J
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
アミドの極性転換反応： α 位および γ 位への求核剤導入法の開発	2019年5月	第17回次世代を担う有機化学シンポジウム
連続ヘテロ原子を有するラクタムを利用したアルキン導入を伴う連続反応の開発	2019年10月	第45回反応と合成の進歩シンポジウム
オキシムエーテルの α 位での極性転換を利用した <i>N</i> -アルコキシインドールの合成	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部総会・大会
オキシムエーテルの α 位での極性転換を利用した縮環ピロール合成法の開発	2022年11月	第45回反応と合成の進歩シンポジウム
<i>N</i> -アルコキシラクタムの求核付加-脱水反応を利用した β -クロロエナミン合成	2023年3月	日本薬学会 第143年会

3. その他（講演など）			
演題名	発表年・月	学会名	
連続ヘテロ原子が関与するアミドの化学	2018年8月	第38回有機合成若手セミナー 「明日の有機合成を担う人のために」（依頼講演）	
<i>N</i> -アルコキシアミドを用いた新分子変換法	2019年7月	第5回関西薬学シンポジウム：化学系の若い力 （依頼講演）	
アミド・エナミドが創り出す新たな有機合成反応の 開発～連続ヘテロ原子を組み込むと何ができる？～	2020年1月	ヘテロ原子部会第3回懇話会（依頼講演）	
III 学会等および社会における主な活動			
2003年～現在に至る	日本薬学会会員		
2010年～現在に至る	有機合成化学協会会員		
2015年～現在に至る	近畿化学協会会員		
2019年～現在に至る	近畿化学協会ヘテロ原子部会幹事		

専任教員の教育・研究業績

所属	生命有機化学研究室	職名	准教授	氏名	山田 健
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2023年4月～現在	3年次の「合成化学1（分担）」を指導している。関連する分野の復習を含め該当範囲を解説した。授業の終わりには、問題演習を実施し、知識の定着を図った。問題演習の解説はWebClassにuploadし、いつでも復習できるようにした。		
		2023年4月～現在	1年次の「薬学入門（分担）」を指導している。ノーベル賞受賞者の研究理念、研究体制、研究業績を紹介し、医療人としての基本的姿勢の養成に努めた。		
		2023年4月～現在	6年次の「総合薬学講座（分担）」を指導している。薬剤師国家試験を意識し、より厳選して該当範囲を解説した。授業の終わりには、問題演習を実施し、知識の定着を図った。問題演習の解説はWebClassにuploadし、いつでも復習できるようにした。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Takeshi Yamada, Miu Yagita, Yutaka Kobayashi, Goh Sennari, Hiroyuki Shimamura, Hidehito Matsui, Yuki Horimatsu, Hideaki Hanaki, Tomoyasu Hirose, Satoshi Omura, Toshiaki Sunazuka	論文	Synthesis and evaluation of antibacterial activity of bottromycins. J. Org. Chem. 2018, 83, 7135-7149.
Takeshi Yamada, Yusuke Watanabe, Sentaro Okamoto	論文	6-Halo-2-pyridone as an efficient organocatalyst for ester aminolysis. RSC Advances 2021, 11, 24588-24593.
Takeshi Yamada, Kazuki Arai, Rie Kikuchi, Sentaro Okamoto	論文	Deuteration of indole compounds: Synthesis of deuterated auxins, indole-3-acetic acid-d5 and indole -3-butyric acid-d5. ACS Omega 2021, 6, 19956-19963.
Kouta Ibe, Haruki Nakada, Mayu Ohgami, Takeshi Yamada, Sentaro Okamoto	論文	Design, synthesis, and properties of des-D-ring interphenylene derivatives of 1 α ,25-dihydroxyvitamin D3. Eur. J. Med. Chem. 2022, 243, 114795.
Takeshi Yamada, Sentaro Okamoto	論文	Organocatalytic multicomponent coupling to access a highly functionalised tetracyclic furoindoline: Interrupted Passerini/Joullié-Ugi cascade reaction. Chem. Commun. 2022, 58, 11701-11704.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
シロイヌナズナに対する側根成長阻害化合物の開発と作用機序について	2019年・10月	第9回CSJ化学フェスタ2019
NHC-Zn触媒を用いたアリル位アルキル化反応	2021年・3月	日本化学会第101春季年会
6-クロロ-2-ピリドンに触媒に用いたエステルのアミノリシス	2021年・3月	日本薬学会第141年会
3,5,6-トリフルオロ-2-ピリドンを共役酸塩基触媒に用いた2-イソシアノエチルインドールのInterrupted Passerini反応	2021年・10月	第47回反応と合成の進歩シンポジウム

Organocatalytic Interrupted Passerini Reaction of 3-(2-isocyanoethyl)-indole	2022年・11月	International Congress on Pure & Applied Chemistry Kota Kinabalu (ICPAC Kota Kinabalu) (招待講演)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2002年4月～現在に至る	日本化学会会員	
2003年3月～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2011年12月～現在に至る	日本薬学会会員	
2023年4月～現在に至る	ヨウ素学会会員	
2023年4月～現在に至る	日本プロセス化学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 病態生化学研究室	職名 講師	氏名 多河 典子
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2006年10月～2016年9月 2009年10月～ 2013年10月～ 2017年4月～ 2009年4月～9月 1987年4月～ 2005年9月～ 2008年～ 1987年4月～ 1987年4月～1990年3月	学部3年生 臨床検査学Ⅰ 講義 学部1年生 生化学Ⅰ 講義 学部3年生 内分泌学 講義（2コマ） 学部3年生 臨床生化学 講義（科目名変更 旧 臨床検査学Ⅰ） 学部1年生 早期体験学習指導 学部4～6年生に卒業研究Ⅰ・Ⅱ指導 学部6（旧4）年生 総合薬学講座講義（2（1）コマ） 病態解析治療学特論（病態生化学特論） 1～2コマ 学部3（4）年次生 臨床検査（臨床化学）実習指導 学部4年生 臨床検査総論実習指導
2 作成した教科書、教材、参考書	2006年10月～ 2009年10月～1021年7月	臨床生化学（臨床検査学Ⅰ） 講義プリント 生化学Ⅰ 講義用プリント
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2009年～2011年 2010/11/10 2011/11/11 2014/6/21	推薦入学者の宿題作成、質問会で解説を行った。 出張講義 県立明石南高校、県立姫路南高校、県立小野高校
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Masumoto K, Tagawa N, Kobayashi Y, Kusuda S.	論文	Pediatr Neonatol. 2019;60(5):504-511. "Cortisol production in preterm infants with or without late-onset adrenal insufficiency of prematurity: A prospective observational study."

Mitsumoto Y, Sato R, Tagawa N, Kato I.	論文	J Nutr Sci Vitaminol (Tokyo). 2019;65(2):202-204. "Rubiscolin-6, a δ -Opioid Peptide from Spinach RuBisCO, Exerts Antidepressant-Like Effect in Restraint-Stressed Mice."
Kimura M, Kosuge K, Ko Y, Kurosaki N, Tagawa N, Kato I, Uchida Y.	論文	Chem Pharm Bull (Tokyo). 2020 Aug 1;68(8):810-813. "Potent Antibacterial Activity of Synthetic Peptides Designed from Salusin- β and HIV-1 Tat(49-57)."
Tagawa N, Fujinami A, Natsume S, Mizuno S, Kato I.	論文	PLoS One. 2022 Jan 27;17(1):e0262542. "Relationship between adiponectin multimer levels and subtypes of cerebral infarction."
Tagawa N, Ogura H, Miyawaki H, Asakawa A, Kato I.	論文	Mol Med Rep. 2023 Jan;27(1):7. "Intraperitoneal administration of nesfatin-1 stimulates glucagon-like peptide-1 secretion in fasted mice."
Hosogi S, Kuwahara A, Kuwahara Y, Tanaka S, Shimamoto C, Tagawa N, Kato I, Yoshimoto K, Aoi W, Takata K, Miyazaki H, Niisato N, Tsubo Y, Yagi K, Nakahari T, Marunaka Y.	論文	Biomed Res. 2023;44(1):17-29. "Mumefural prevents insulin resistance and amyloid-beta accumulation in the brain by improving lowered interstitial fluid pH in type 2 diabetes mellitus."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
マウス脂肪組織におけるnesfatin-1の発現・分泌促進について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学 病態生化学研究室 2) 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科心身内科学分野	2018/4/26	第91回日本内分泌学会学術総会
肥満モデルマウスの視床下部及び脂肪組織での新規エネルギー代謝関連ペプチドの発現について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬大 2) 鹿児島大院医歯	2018/8/24	第58回日本臨床化学会年次学術集会
消化管ホルモンxeninのELISA法の開発 多河 典子1)、中張隆司2)、浅野 真司3)、桑原 厚和3)、丸中 良典3)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬大2) 立命館大薬 3) 立命館大総合科学技術研	2019/3/23	日本薬学会第139年会

<p>マウス視床下部及び脂肪組織でのNUCB2 mRNA発現について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾 1)、乾 明夫2)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学 病態生化学研究室 2) 鹿児島大学 大学院 医歯学総合研究科心身内科学分野</p>	<p>2019/5/10</p>	<p>第92回日本内分泌学会学術総会</p>
<p>腸管ペプチドxeninのELISA法の確立とマウス小腸組織での定量 ○多河 典子1)、浅野 真司2)、中張 隆司3)、桑原 厚和3)、丸中 良典3)、加藤 郁夫1) 1) 神戸薬科大学病態生化学研究室2) 立命館大学薬学部分子生理学教室3) 立命館大学総合科学技術研究機構</p>	<p>2020/10/30～11/1</p>	<p>第60回日本臨床化学会年次学術集会</p>
<p>III 学会等および社会における主な活動</p>		
<p>1986年7月～</p>	<p>日本薬学会会員</p>	
<p>2006年4月～</p>	<p>日本内分泌学会代議員</p>	
<p>2014年6月～</p>	<p>日本臨床化学会評議員</p>	

専任教員の教育・研究業績

所属	地域連携サテライトセンター	職名	講師	氏名	上田 久美子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概	要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 学部学生への講義・実習					
がん薬物治療論（6年次前期、選択、兼任）		2020年4月～現在に至る	主な抗がん薬について、その体内動態や、臨床現場で薬物を投与する際に知っておくと役立つ薬剤学、製剤学の内容を盛り込んだ講義動画を作成している。		
地域医療・プライマリケア論（4年次前期、兼任）		2023年4月～現在に至る	学校薬剤師の業務と、在宅医療での薬剤師の役割について、パワーポイントを使用してわかりやすく解説した。		
薬物動態学Ⅱ（3年次後期）		2006年4月～2021年3月	薬物速度論について、プリント冊子を作成して講義した。式の導出については、途中の計算にもつまづかないよう、数学にて学習した内容などもプリント冊子に含めた。板書内容を効率よくプリント冊子に記入できるように、プリント冊子の作成を工夫した。国家試験問題もプリント冊子に掲載することで、学生の勉強へのモチベーションを上げる努力をした。一方で、計算問題に苦手意識を持つ学生に対しては、複雑な計算問題を一問一答式に分解してプリント冊子に掲載することで、学習意欲をそがないようにした。さらに、毎時間講義の疑問点や感想を記載、提出させ、それらに紙面にて回答することで、学生の疑問に答えるとともに、学生との対話を試み、次年度以降のプリント冊子にその内容を反映させた。また、チーム基盤型演習を一部に取り入れることで、学生の勉強へのモチベーションをさらに上げる努力をした。グループ学習を全面的に取り入れたこともあったが、一部の学生は積極的に参加したものの、消極的な学生もみられた。翌年度からは通常講義に戻して実施した。		
薬学入門（1年次前期、兼任）		2012年4月～2021年3月	主にアスピリンの体内動態について、1年次生にもわかるようにパワーポイントでアニメーションを多様してスライドを作成して講義した。2020年度には、講義動画を作成するとともに、学生からの質問に回答する動画も作成した。		
臨床薬剤学Ⅱ（6年次前期、選択、兼任）		2020年4月～2020年9月	主に薬物速度論の計算問題の解説を中心とした講義動画を作成した。出来るだけ計算の過程がわかるよう丁寧に解説した。		
テーラーメイド医療（6年次前期、選択、兼任）		2017年4月～2019年9月	抗がん薬のうちテーラーメイド医療が行われている薬物について、プリントを作成して講義した。		

臨床薬剤学（4年次前期、兼任）	2005年4月～2008年9月	主に薬物相互作用、TDMを担当した。薬物相互作用は、その機序や薬物名を簡単に整理できるよう、表形式にまとめて提示した。TDMについては、基礎となる考えなどがわかるよう、種々の文献から資料を集めて整理、提示した。午前2コマ連続（休憩を挟んで180分）の集中講義であり、遅刻する学生が多かったため、講義開始時に小テストを行い、前回の講義の振り返りをするとともに、学生がある程度そろってからその日の講義を開始するように心がけた。2008年度に、ベストティーチャー賞を受賞した。
総合薬学講座（6年次、兼任）	2006年4月～2022年3月	主に薬物速度論を担当した。学生が苦手とする計算問題について、基礎的な問題を確実に得点できるよう指導することに力点を置いた。最終年度には、複合問題も担当した。
薬剤学・製剤学実習（3年次後期）	1998年6月～2021年3月	TDM、薬物動態を主に担当した。TDMでは、臨床現場での重要性を想像できるように、また基礎となる薬物速度論の概念が少しでも理解できるよう工夫した。薬物動態では、薬物速度論の基礎を実際実験して確かめることができるよう、また膨大な計算を時間内に効率良くできるよう、実習書を工夫した。
アクティブラボ（1-3年次、兼任）	2020年4月～2021年3月	がん研究の一部をアクティブラボ配属学生と一緒に実験し、まとめる手助けをした。予備知識がない学生にも理解できるように工夫した。
(2) 研究室配属学生への研究指導	1998年6月～2021年6月	薬剤学研究室在籍時に、研究室配属学生のうち数名の卒業研究指導を行った。がんや薬物動態学に関する研究を通して、実験の目的や実験結果の考え方を理解させるように努力した。また、わかりやすいプレゼンテーションや卒業論文の作成を目指すよう指導することを心がけた。
(3) 大学院での講義	2010年4月～2020年3月	薬剤学特論を2010年度、2012年度、2014年度、2016年度、2018年度、2019年度に1コマずつ担当した。受講生に合わせて、臨床的な内容、自身の研究内容、薬物動態の基礎などと内容を変えて実施した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
FD研修会にて報告	2020年10月	薬学総合教育・研究センター 統括部門、支援部門、教務課 “前期遠隔授業に対する学生アンケートの集計結果について”
FD・SD研修会にて報告	2006年12月	他大学で実施された共用試験OSCEトライアルの参加報告を行った。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
(1) ベストティーチャー賞	2009年3月	2008年度 4年次前期 臨床薬剤学
(2) 神戸薬科大学学長裁量経費取得状況		

2021年度 神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムに採択	2021年4月	“低学力学生に対する「理解」を中心に据えた新たな演習プログラムの構築”
平成30年度（2018年度）神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムに採択（継続）	2018年4月	“チーム基盤型学習（TBL）を用いた分野横断統合演習の構築とピア評価システムの有用性の検討”
平成29年度（2017年度）神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムに採択（継続）	2017年4月	“チーム基盤型学習（TBL）の構築とピア評価システムの有用性の検討”
平成28年度（2016年度）神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムに採択	2016年4月	“チーム基盤型学習（TBL）を用いた分野横断統合演習の構築”
(3) 学内委員会活動		
地域連携サテライトセンター運営委員	2022年4月～現在に至る	地域連携サテライトセンター専任教員として委員会に参加している。
実務実習運営委員	2006年4月～2018年3月	実務実習を受講する4年次生の実習施設振り分け作業を、他大学との交渉、実習施設や病院薬剤師会、薬剤師会との交渉を含め、学内の中心となって行った。また、3年次生対象の実務実習施設振り分け説明会にて、学生に対する説明を担当した。さらに、6年制長期実務実習開始時には、近畿6府県の各地区で開催された連絡会のほぼすべてに大学代表として出席し、実務実習指導薬剤師に対して本学での教育状況等を説明した。
実務実習問題対策委員	2006年4月～2018年3月	実務実習で発生した問題に対し、委員長や他の委員と協力して対応した。
OSCE実施委員会委員	2006年4月～2018年3月	共用試験OSCE開始前には他大学で実施されたトライアルを複数回見学し、また実際に評価者、責任者としても参加した。その経験をもとに、本学でのOSCEトライアルを複数回企画運営し、現在の本学のOSCEの原型を作った。
研究室・施設紹介冊子編集委員	2005年4月～2007年3月	現在の大学案内のもととなる「研究室・施設紹介冊子」を、他の委員と協力して新たに作成した。
(4) ワークショップへの参加		
全国薬学教育者ワークショップ	2006年8月	第19回全国薬学教育者ワークショップ近畿（大阪工業大学）
(5) 高校への出前講義、高大連携		
高大連携事業（薬学の講義）	2015年8月	大阪女学院高校
薬学の講義	2014年7月	姫路市立高校
薬学の講義	2007年3月	和歌山県立桐蔭高校
II 研究活動		
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
Ueda K, Nakamura T, Tanaka S, Hosokawa M, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Drug Metab. Pharmacokinetics. 2020:35:124-130. "Numerical analysis of apparent decitabine uptake in HCT116 cells: Incorporation of a bidirectional first-order kinetic parameter for ENT1 transport and Michaelis-Menten parameters for subsequent phosphorylation."
Hosokawa M, Goto K, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2020:68(12):1233-1237. "Optimization of Analytical Conditions for Hydrophilic Nucleic Acids Using Mixed-Mode and Reversed-Phase Pentabromobenzyl Columns"
Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 2019:509(1):249-254. "Decitabine exerted synergistic effects with oxaliplatin in colorectal cancer cells with intrinsic resistance to decitabine."
上田久美子、寺岡麗子、竹内敦子、安岡由美、内田吉昭、八巻耕也、土生康司、宮田興子、中山尋量、北河修治.	資料	Libra, 2018: 18: 1-12. "薬学教育早期体験学習におけるピア評価の試み"
上田久美子、寺岡麗子、八巻耕也、土生康司、宮田興子、力武良行、中山尋量、北河修治.	報告	Libra, 2018: 18: 29-44. "チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み その3"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ヒト大腸がんHCT116細胞におけるデシタビンの取り込みの速度論解析	2020年3月	日本薬学会第140年会
ヒト大腸がんHCT116細胞におけるデシタビンの取り込みの速度論解析—膜透過クリアランスと代謝クリアランスを含むコンパートメントモデル—	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会
ヒト大腸がんHCT116細胞におけるイマチニブのENT1阻害効果に及ぼすアルブミンの影響	2019年3月	日本薬学会第139年会
Kinetic analysis of decitabine uptake in HCT116 colon cancer cells	2018年11月	2018 International Meeting on 22nd Microsome and Drug Oxidations and 33rd Japanese Society for the Study of Xenobiotics
チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築	2018年9月	第3回日本薬学教育学会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

上田 久美子

1992年 3月～現在に至る	日本薬学会 会員
1996年 9月～現在に至る	日本薬物動態学会 会員
1998年 6月～現在に至る	日本病院薬剤師会 会員
1997年 7月～現在に至る	日本医療薬学会 会員
1997年 7月～現在に至る	日本薬剤学会 会員
2004年 1月～現在に至る	日本医療薬学会 医療薬学専門薬剤師
2004年 1月～現在に至る	日本医療薬学会 医療薬学指導薬剤師
2006年 4月～2017年 3月	薬学教育協議会 病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 委員
2009年 4月～2011年 3月	日本薬学会 ファルマシア トピックス専門小委員
2016年 6月～現在に至る	日本薬学教育学会 会員
2019年12月～現在に至る	神戸市応急手当普及員（救急インストラクター）

専任教員の教育・研究業績

所属 生化学研究室	職名 講師	氏名 三上 雅久
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） (1) 学部学生への教育	2022年4月～現在に至る	カリキュラムの改訂に伴い、学部1年次生に対して「生命科学I」の講義を担当している。本講義は、生化学・分子生物学関連の講義としては最初の講義となるため、生物系科目に対してできるだけ興味をもってもらえるよう、また苦手意識を持つ学生を減らせるように、日常の話題や疾患との関連性を織り交ぜながら担当範囲（タンパク質・酵素・脂質）を解説している。CBTや国家試験への対策として、WebClassを活用しながら、関連する過去問の改変問題の出題・解説を実施し、その一部を定期試験に出題することで、学生の理解度の把握に努めている。
	2007年4月～2022年3月	学部1年次生に対して「生化学II」（2014年度新入生までは、学部2年次前期に開講）の講義を、また学部2年次に対して「生化学III」の講義を行った。「生化学II」では、タンパク質・酵素について、できるだけ日常の話題や疾患との関連性を織り交ぜながら解説した。「生化学III」では、エネルギー代謝と恒常性の維持について、補助プリント等を用意して、体系的に理解してもらえよう努めた。また、学生からの質問に対して個別対応にとどまらず、後の講義やオフィスアワーなどで学生全体にフィードバックした。CBTや国家試験への対策として、関連する過去問の解説を実施し、その一部を定期試験に出題することで、学生の理解度の把握に努めた。学生評価アンケート（2年に一度）では、平均以上の評価を得た。
	2008年9月～2011年3月	学部3年次生（約70名の少人数クラス）に対して、「薬学英语入門II」の講義を行った。既存の薬学英语のテキストや学術論文から抜粋した資料を用い、英文内容の背景ならびに概要の理解に重点をおいた。講義毎に、前回の講義で取り扱った頻出専門用語や注意すべき発音などについて確認テストを実施した。担当期間中に実施された2回の学生評価アンケートにおいて、いずれもベストティーチャー賞を受賞した。

(2) 大学院生への研究指導	2000年4月～現在に至る	学部3年次生に対して、生物学系II実習（2014年度より生物学系I実習に、2017年度より生化学実習に名称変更）の実施を担当している。限られた時間の中で、当該分野の必須項目を満たし、自ら考えながら実習を行えるような実習プログラムを組み立てている。実習項目についても、最新の医療や遺伝子操作技術の進展と同調したものにするために、随時改訂している。実習時間の最後に、少人数のグループごとに質疑応答を行い、実習内容と講義や国家試験との関連性を意識させる指導を心がけている。
		学部学生の卒業研究に対する指導を行っている。与えられたテーマに対して、自ら積極的に取り組む姿勢を身につけさせることに重点を置いている。定期的に行われる研究室のセミナーでの文献紹介や研究報告などを通じて、携わっている研究分野に対する深い理解と、プレゼンテーション能力や問題解決力の向上を目標に指導している。
	2000年4月～現在に至る	生化学講座所属の大学院生に対する研究指導ならびに大学院特論（生化学特論、2012年度以降、生命科学特論に改称）の講義を担当している。大学院特論では、糖鎖の生理機能の重要性と正常な機能に異常を来たした代謝異常症について発生的視点から講義をしている。大学院生に対しては、研究テーマを理解し、主体的に実験計画と組み立てながら課題解決に取り組めるようになることを目標に指導をしている。また、修了までの間に少なくとも1回の学会発表ができるよう、日々の研究指導にあたっている。
2 作成した教科書、教材、参考書 教科書	2015年3月31日発行	第5章 糖質 スタンダード薬学シリーズII 4 生物系薬学I. 生命現象の基礎（東京化学同人、2015）28-34.
	2020年9月4日発行	第2章 タンパク質の基本、第3章 タンパク質の機能、第4章 タンパク質代謝、第5章 タンパク質解析技術、第16章 組織・器官の構築 「ニューディレクション薬学生化学」（京都廣川書店）
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 該当なし。		
4 その他教育活動上特記すべき事項 ベストティーチャー賞受賞	2008年度、2010年度	薬学英語入門II（2008年度および2010年度）

II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Mikami, T., Kitagawa, H., and Iwasaki, N.	著書	In Glycoscience: Basic Science to Applications Insights from the Japan Consortium for Glycobiology and Glycotechnology(JCGG) Springer Chapter13, 2020, pp221-226. "Glycans in Osseous Tissue and Articulation"
Mikami T., Kitagawa H.	著書	In Comprehensive Glycoscience, 2nd edition (ed. Joe Barchi) 2021, 3, pp. 29-62, Elsevier. "Biosynthesis and Degradation of Glycans of the Extracellular Matrix: Sulfated Glycosaminoglycans, Hyaluronan, and Matriglycan"
Shida M., Mikami T., Tamura J., Kitagawa H.	論文	Biochim. Biophys. Acta Gen. Subj. 2019, 1863(9), 1319-1331. "Chondroitin sulfate-D promotes neurite outgrowth by acting as an extracellular ligand for neuronal integrin $\alpha V \beta 3$ "
Koike, T., Mikami, T., Tamura, J., Kitagawa, H.	論文	Nat. Commun. 2022, 13, 7952. "Altered sulfation status of FAM20C-dependent chondroitin sulfate is associated with osteosclerotic bone dysplasia"
Mikami T., Kitagawa H.	総説	Trends Glycosci. Glycosci. 2021, 33 (191) E11-E16. "Chondroitin sulfate glycosaminoglycans regulate distinct cell surface receptor-mediated neuronal functions"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
高硫酸化コンドロイチン硫酸Dによる神経突起伸長促進機構の解析	2018年・8月	第37回日本糖質学会年会 (仙台)
Chondroitin sulfate-D promotes neurite outgrowth by acting as an extracellular ligand for neuronal integrin $\alpha V \beta 3$.	2019年・9-10月	11th International Conference on Proteoglycans (Kanazawa)

コンドロイチン硫酸の骨格筋可塑性における役割と加齢性変化	2020年・9月	第93回日本生化学会大会（横浜）
コンドロイチン硫酸の骨格筋維持機構における役割と加齢性構造変化	2021年・12月	第44回日本分子生物学会年会（横浜）
骨格筋におけるコンドロイチン硫酸の加齢性構造変化と再生・維持機能に与える影響	2022年・9-10月	第41回日本糖質学会年会（大阪）
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1997年2月～現在に至る	日本薬学会会員	
1996年4月～現在に至る	日本生化学会会員	
2000年4月～現在に至る	日本糖質学会会員	
1998年4月～現在に至る	日本分子生物学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 講師	氏名 猪野 彩
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2010年～	4年次の実務実習事前教育を分担した。 5年次に実施される実務実習を想定して実習を行い、臨床現場で求められる知識・技能・態度の習得ができるように指導を行っている。 『代表的な医薬品の配合変化』、『調剤監査』、『持参薬チェック』を主に担当している。
	2010年～	1年次生の初期体験臨床実習を分担した。 医療現場でのチーム医療の実際を見学することに加え、学生たち自身が参加する実習の中でチームを意識して取り組むように指導している。
	2011年～	4年次の薬事関係法規・薬事制度を分担した。 裁判事例などを挙げて、法律の条文が具体的に理解できるように工夫をしている。法律制定や改正の経緯などについて時代背景やニーズと結び付けた説明を行うことで、法律の意味を理解したうえで各条文について解釈できるように努めた。 『薬剤師法』、『毒物及び劇物取締法』、『医療法』、『健康保険法』、『介護保険法』を担当している。
	2012年4月～2020年3月	6年次の処方解析学・演習を分担した。 『泌尿器系疾患』として前立腺肥大症、前立腺癌について、『眼疾患』として、白内障、緑内障、加齢黄斑変性症について講義・演習を行った。 各疾患の疫学、病態、治療、治療薬、患者への指導などについて幅広い知識の習得に繋がるように努める。
	2014年～	6年生を対象に「総合薬学講座」を担当している。 薬事関係法規の範囲として、主に『毒物及び劇物取締法』を担当し、実務の範囲として『処方箋、調剤録』を担当している。

	2014年～	3年次の調剤学Ⅰの講義を分担した。 薬剤師業務について、法的根拠とともに薬剤師業務の流れについて説明を行い、薬剤師業務の意義について理解を得るように努めた。 基礎的な知識として、医療用語、代表的な医薬品の用法用量についても講義を行った。	
	2017年～	2年次の医療コミュニケーション演習を分担した。 症例について、SGDを行いながら、医療コミュニケーションツールを実践することの効果を確認できるように指導する。	
	2018年～	4年次の処方解析Ⅱを分担した。 『泌尿器系疾患』として前立腺肥大症、前立腺癌について、『眼疾患』として、白内障、緑内障、加齢黄斑変性症について講義・演習を行った。 各疾患の疫学、病態、治療、治療薬、患者への指導などについて幅広い知識の習得に繋がるように努める。	
2	作成した教科書、教材、参考書		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4	その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動			
1. 著書・論文等			
	氏名	種別	内容
	竹下治範, 北 早織, 若林知子, 藪田有沙, 猪野 彩, 原田祐希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 濱口常男	論文	PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響, 医薬品情報学, 20(2) 98-103, 2018
2. 学会発表			
	演題名	発表年・月	学会名

NDBオープンデータを用いた乳幼児における抗ヒスタミン薬の処方実態調査	2018年3月	日本薬学会第138年会
育児中の母親が薬の疑問について薬剤師に相談しない理由についての検討	2019年3月	日本社会薬学会第38年会
「副作用」の説明に着目した服薬指導時の薬剤師の対応についての検討	2019年3月	日本社会薬学会第38年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2002年～現在に至る	日本病院薬剤師会 会員	
2016年～現在に至る	日本薬学会 会員	
2021年～現在に至る	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員	
2023年～現在に至る	日本医療薬学会 会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬用植物園	職名 講師	氏名 西山 由美
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
生薬化学実習 (2017年から細胞生物学実習)	1986年～2008年 2010年～2022年	2年次生の生薬化学実習（2017年からは細胞生物学実習）を担当している。実習開始時の講義ではパワーポイントを使って、実験の目的や実験内容について説明し、実験終了時には、結果について考察するなどのディスカッションを行い理解を深めるようにしている。また、実験中は各実習机を見回り、手技が正しく安全に行われているかチェックし、正しい器具の取り扱いなどを習得してもらうようにしている。
生薬学	2011年～現在に至る	2年次生（2012年からは1年生）の生薬学を担当している。生薬に関する基本的なことから始め、薬としての生薬について理解を深めてもらえるようにしている。国家試験やC B T試験に必要な知識を習得しながら、生薬に興味を持てるように標本を用意して講義を行っている。また、これまで希望者のみに行っていた屠蘇散作りを、全学生が行えるよう講義の中に取り入れ、生薬を身近な薬として考えてもらうようにした。
生薬化学	2014年～2017年	2年次生の後期（2016年度は前期）の生薬化学の後半部分を担当していた。生薬由来の医薬品の内、特にアルカロイド化合物を中心に講義を行った。重要な医薬品が多いので、国家試験やC B T試験に必要な知識を中心に、興味を持ちやすい内容から始め、化合物の構造式やその特徴・作用を暗記ではなく、化学的に見れるような力をつけていけるように心掛けた。
薬用資源学	2017年～現在に至る	3年生（後期）の薬用資源学を担当している。選択科目であり、生薬や天然物に関心のある学生のアドバンス教育として、深く掘り下げた内容で講義を行っている。2020年からは動画での講義であるが、オンデマンドの良さを活かしながら、学生がより興味を持ち学習しようと思えるように考えて動画を作成することを心がけている。また、学生が何を学びどう感じたかなどのコメントを書いてもらい、それをフィードバックしながら、次の講義に活かせるようにしている。

漢方医学	2014年～現在に至る	4年次生（前期）の漢方医学（2014, 2015年度は4コマ、2016年度からは7コマ、2020年度からは11コマ）を担当している。これまで学んできた西洋医学とは概念が異なるので、その部分を意識して説明している。近年は、漢方薬も多く処方されるようになったことや、利用を希望する人も増えてきているので、漢方に関する基本的な知識や汎用される漢方薬を中心に講義し、またCBT試験や国家試験の問題に対応できるように工夫している。
薬学英语入門Ⅱ	2017年～現在に至る	3年次生（後期）の薬学英语入門Ⅱを担当している。英語で書かれた専門的な文章をただ訳すだけでなく、図や資料使いながら内容を深く理解することを目標としている。
ロジカル思考演習Ⅰ	2022年～現在に至る	1年次生（後期）のロジカル思考演習Ⅰを担当している。深く考えることを重視し、身近な「植物」をテーマにして、プレゼンやレポートの基本的な作成の仕方を学べるように心がけた。グループ学習も取り入れ、コミュニケーションの取り方やその重要性を認識できるように、楽しさも取り入れるなどの工夫を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書		
生薬学のプリント冊子	2013年～現在に至る	生薬学の講義で用いる冊子を毎年作成している。書き込み式なので、生薬について自分でまとめながら、勉強出来るようにしている。余白を使って、教科書に載っていないことなどを書き込み、生薬について自分だけのまとめのノートになるように使ってもらいたいと考えている。
生薬化学のプリント冊子	2015年～2017年	生薬化学の講義で用いる冊子を作成した。書き込み式で、重要な化合物を自分でまとめて勉強できるようにしている。余白を利用して、教科書の内容を自分でまとめて書いたり、教科書に載っていないことなども書き込んで、自分のまとめのノートとなるように使ってもらいたいと考えて作成した。
漢方医学のプリント冊子	2015年～現在に至る	漢方医学の講義で用いる冊子を毎年作成している。テキストには多くの情報があり、漢方医学のことを学ぶにはじっくり読むのが一番だが、馴染みのない単語や内容が多いことから、簡単に内容をまとめた冊子を作成した。ただし、冊子だけでは不十分なので、冊子とテキストの両方で勉強して欲しいと考えている。冊子には、国家試験やCBTの問題集も入れて、少なくともどんな内容を勉強し理解しないとイケないかを考えてもらうことにした。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		第7回日本薬学会教育学会大会において、植物園を利用した教育の一環として学生ガイドに関する発表を行った。

<p>4 その他教育活動上特記すべき事項</p>	<p>2018年～2019年</p> <p>2020年～現在に至る</p> <p>2022年～現在に至る</p>	<p>薬用植物園を教育に活かすために、植物園を利用してどのような教育ができるかを検討するために、1年生を対象に薬用植物園トライアル実習を行った。植物園で、植物を直接観察したり五感を使って体験することで、植物の生態や利用法などを学んでもらった。また、薬用植物を用いた利用法として染色などを行うほか、簡単な実験も行い、知識がより定着するように工夫した。今後、これらの内容を、植物園を利用した実習などに役立てていく予定である。</p> <p>薬用植物園を利用した能動的な学習として、学生ガイドの育成を始めた。植物や生薬、ガイドに関心のある学生で希望者に対して行うものだが、学生は一般の人たちに向けてガイドするために、説明の内容だけでなく方法なども自ら考えて行い、能動的な学習につながると考えている。また、薬剤師に必要なコミュニケーション能力の向上にもつながるものと考えている。</p> <p>講義の内容に興味・関心を持つことは、学ぶ上で重要なことであると考え、講義に体験を取り入れることを試みた。まずは、生薬学において身近な生薬に関心を持つことを期待し、「屠蘇散」作りの体験を組み込んだ。アンケートでは、それぞれの生薬に特有の匂いなどもあって印象に残り、より生薬に関して興味を持ち覚えることができたとの意見が寄せられた。</p>
<p>II 研究活動</p>		
<p>1. 著書・論文等</p>		
<p>氏名</p>	<p>種別</p>	<p>内容</p>
<p>Nishiyama Y., Noda Y., Nakatani N., Shitan N., Sudo T., Kato A., Chalo Mutiso P. B.</p>	<p>論文</p>	<p>Journal of Natural Medicines, 2019, 73(1): 289-296. "Structure of constituents isolated from the bark of Cassipourea malosana and their cytotoxicity against a human ovarian cell line"</p>
<p>北河 修治、西山 由美</p>	<p>著書</p>	<p>果物の色に秘められた巧みな力⑨ かきといちじく 大塚薬報 2019, 4月, No. 744, 22-25.</p>
<p>北河 修治、西山 由美</p>	<p>著書</p>	<p>果物の色に秘められた巧みな力⑩ トロピカルフルーツ 大塚薬報 2019, 5月, No. 745, 26-29.</p>
<p>Sumiko Ikari, Shiou-Ling Lu, Feike Hao, Kenta Imai, Yasuhiro Araki, Yohei Yamamoto, Chao-Yuan Tsai, Yumi Nishiyama, Nobukazu Shitan, Tamotsu Yoshimori, Takanobu Otomo, Takeshi Noda</p>	<p>論文</p>	<p>PLoS One, 2020, 15(3): e0230156. "Starvation-induced autophagy via calcium-dependent TFEB dephosphorylation is suppressed by Shigyakusan"</p>
<p>森川みか、宮崎智子、西山由美、竹内敦子、韓 秀妃</p>	<p>論文</p>	<p>薬局薬学. 2022, 14(2) : 161-169. 「0410対応」の処方箋を通して見える今後の薬局業務</p>
<p>2. 学会発表</p>		

演題名	発表年・月	学会名
ヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対する漢方薬とシスプラチンの併用効果	2018年・3月	日本薬学会138年会 金沢
ビャクシのヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対する抗腫瘍活性成分の探索	2018年・3月	日本薬学会138年会 金沢
Uvaria scheffleri根の成分検索	2019年・3月	日本薬学会139年会 千葉
薬用植物園を利用した教育 ー薬用植物園学生ガイドの育成ー	2022年・8月	第7回日本薬学会教育学会大会 オンライン
新型コロナウイルス感染拡大状況下での薬局及び病院の対応について ー質の高い生涯研修を目指した神戸薬科大学同窓会の取り組みー	2022年・10月	第55回日本薬剤師学術大会 仙台
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
植物のちから	2019年・9月	2019年度阪神地区相互利用担当者連絡会 神戸
研究って・・・？ ーなんだか難しそうー	2022年・6月	兵庫県立東灘高等学校 探求活動における講演会
III 学会等および社会における主な活動		
1986年7月～現在に至る	日本生薬学会会員	
1986年12月～現在に至る	日本薬学会会員	
2018年4月～現在に至る	日本薬剤師会会員（兵庫県薬剤師会会員）	
2022年4月～現在に至る	日本薬学教育学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 講師	氏名 藤波 綾
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	<p>1995. 4. 1～現在に至る</p> <p>2004, 2007～2009年度</p> <p>2011. 10. 1～現在に至る</p> <p>2020. 4. 1～現在に至る</p> <p>2015. 4. 1～現在に至る</p> <p>2016. 10. 1～2019. 9. 30</p> <p>2020. 10. 1～現在に至る</p> <p>2019. 4. 1～現在に至る</p>	<p>臨床生化学実習（旧臨床検査実習） 学生実習の円滑な進行を促すための準備を行い、実習中は実習室で指導にあたっている。また、実験終了時には、結果について考察するなどのディスカッションを行い理解を深めるようにしている。</p> <p>情報リテラシー 講義の円滑な進行のためのサポートを行った。</p> <p>薬学英語入門II</p> <p>薬学英語入門I 3年次生に対して、生命科学の分野で必要とされる基礎的な英語の知識を習得しながら、それまでの専門科目の講義内容をも復習できるように講義を行っている。2020年度からはオンライン講義となったため、内容の理解に必要な資料を多く準備するとともに、学生の質問に答える体制づくりを行った。2022年度後期から対面講義になったため、コロナ禍前の方針を継承しつつも学生の理解度を見計らいながら講義を行っている。</p> <p>薬物治療学 I（旧臨床検査学II） 3年次生に対して、血液に関する臨床検査の項目と意義、異常値に対する見方などを講義している。</p> <p>総合薬学講座（病態・治療） 6年次生に対して、止血、凝固・線溶系と血液検査と疾患の関係および国試について解説し、問題文の条件設定がかなりヒントになることを伝えた。</p> <p>総合薬学講座（実務） 6年次生に対して、薬物療法の実践における「用法・用量」について注意すべき医薬品とその理由および相互作用について解説している。</p> <p>実務実習事前教育 4年次生に対して、5年次に行われる実務実習時に必要な技能や態度（特に調剤、処方せん監査）を指導している。</p>

	2020. 4. 1～現在に至る	感染制御学II 適切な感染症診療を行うための臨床検査ならびに肺炎やインフルエンザなどの感染症についての予防と治療について解説している。
	2021. 10. 1～現在に至る	処方解析II 婦人科系疾患、皮膚疾患および感染症の病態と使用される薬物の特徴や使用法の総合的な理解の一助となるように症例を交えて解説している。
	2023. 4. 1～	臨床生化学 2年次生に対して、1年次に学ぶ機能形態学（血液や凝固・線溶系に関する内容）の復習を行いながら、検査項目とその意義、異常値に対する見方を講義している。
2 作成した教科書、教材、参考書	2015. 4. 1～現在に至る	薬物治療学I 講義用スライドを冊子として作成している。
	2011. 10. 1～現在に至る	薬学英語入門I、II テキストを作成し、講義で利用している。
	2016. 10. 1～現在に至る	総合薬学講座 講義用スライドをプリントとして作成している。
	2021. 10. 1～現在に至る	処方解析II 講義用スライドを冊子として作成している。
	1995. 4. 1～現在に至る	臨床生化学実習 実習内容を実習書として作成している。
	2019. 4. 1～現在に至る	実務実習事前教育 実習内容を実習書として作成している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2021年8月	第6回日本薬学教育学会 オンライン発表 リモート環境下においてグループ学習を活発に行うために、我々はグループ学習中に生じる感情に焦点を当てる必要があると考え、まず、従来のグループ学習での発話を「感情」の観点から分析した。
	2022年8月	第7回日本薬学教育学会 オンライン発表

		オンデマンド型授業における新たな試みとして、1名の教員が「先生役」を、残り2名の教員が様々な年齢・職業を想定した「生徒役」を演じる仮想型ライブ授業を行った。このような3対1のオンデマンド型の英語授業に関する報告は見られないことから、まず初めに本授業の有用性と満足度について調査を行った。
4 その他教育活動上特記すべき事項	2017年度～現在に至る	薬学教育者ワークショップタスク 実務実習指導薬剤師養成のためにタスクとして参加者にサポートを行っている。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
藤波 綾、小山淳子、児玉典子	報告	Libra, 2018; 18: 59-71. 血糖値測定の話義を介した糖とその誘導体の重要性の理解度に関する調査・考察—基礎科目と臨床科目のコラボレーション授業を目指して—
Ohta M, Fujinami A, Oishi K, Kobayashi N, Ohnishi K, Ohkura N.	論文	J. Diet Suppl., 2019; 16(3):331-344. "Ashitaba (Angelica Keiskei) exudate prevents increases in plasminogen activator inhibitor-1 induced by obesity in Tsumura Suzuki Obese Diabetic Mice. "
Tagawa N, Fujinami A, Natsume S, Mizuno S, Kato I.	論文	PLoS One, 2022 Jan 27;17(1) : e0262542. "Relationship between adiponectin multimer levels and subtypes of cerebral infarction."
児玉典子, 藤波綾, 湯立.	短報	薬学教育, 6(2022) . Control-Value Theoryを応用した薬学英語教育の試み—自己効力感, 達成関連感情, 学習方略の関連—
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
高脂肪食負荷マウスにおけるアシタバ由来成分カルコンの抗糖尿病作用	2018年・3月	日本薬学会第138年会
脳梗塞におけるアディポネクチンアイソフォームの臨床的意義	2019年・3月	日本薬学会第139年会
野生型マウスのメタボリックシンドローム関連因子に及ぼすナットウキナーゼ摂取の効果	2020年・3月	日本薬学会第140年会

NASHモデルマウスのメタボリックシンドローム関連因子に及ぼすアシタバカルコン摂取の効果	2021年・3月	日本薬学会第141年会
3. その他		
演題名	発表年・月	講演内容
ポリフェノールの多彩な魅力 ーポリフェノールの王様 アシタバカルコンを通してー	2020年	2020年度神戸薬科大学健康食品講座
コロナに負けない！続けようフレイル予防！	2022年・1月	第40回 メディカル・カフェ
ポリフェノールで生活習慣病予防！ ～明日葉ポリフェノールの効果～	2022年・5月	神戸薬科大学 第23回公開市民講座
高齢化社会とフレイル	2022年・5月	兵庫県立東灘高校 看護医療探究
熱中症対策 作ってみよう！スポーツドリンク	2022年・6月	兵庫県立東灘高校 看護医療探究
ポリフェノールの多彩な魅力 ～ポリフェノールで生活習慣病予防！～	2022年・8月	こうべ生涯学習カレッジ
III 学会等および社会における主な活動		
1995年8月～現在に至る	日本臨床化学会会員	
1996年1月～現在に至る	日本薬学会会員	
2001年1月～現在に至る	日本生化学会会員	
2016年4月～現在に至る	初年次教育学会会員	
2016年4月～現在に至る	日本薬学教育学会会員	
2019年4月～現在に至る	日本薬剤師会会員	
2019年4月～現在に至る	日本病院薬剤師会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	医薬品情報学研究室	職名	講師	氏名	土生 康司
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2013～現在		CBT対策委員、実施委員	
		2013～現在		実務実習事前教育委員会委員	
		2014～現在		医薬品情報学（4年生前期）	
		2014～現在		薬学入門（1年生前期）	
		2014～現在		情報リテラシー（1年生前期）	
		2015～現在		実務実習運営委員会委員	
		2021.4～現在		総合教育研究センター統括部門（兼任）	
2 作成した教科書、教材、参考書		2018.9		臨床への有機と薬理からのアプローチ（京都廣川書店）執筆	
		2019.1		みてわかる薬学 図解医薬品情報学改訂第4版（南山堂）執筆	
		2021.12		できる薬剤師とよばれるために 上手に使いたい薬学ナレッジ101（じほう）執筆	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		2018.8		薬学統合学習の構築 第3報 ―低学年次生への臨床薬学・薬理学・有機化学の橋渡し教育の導入― 土生康司、水谷暢明、宮田興子 第3回薬学教育学会.	
4 その他教育活動上特記すべき事項		2013～現在		情報委員会委員	
		2014～2017.3		大学広報委員会委員	
		2015～現在		個人情報保護委員会委員	

	2016. 4～2018. 3	図書委員会委員
	2018. 4～現在	国家試験対策委員会委員
	2018. 4～現在	動物実験委員会委員
	2021. 4～2023. 3	インスティテューショナル・リサーチ委員会委員
	2023. 4～現在	神戸薬科大学における人を対象とする研究倫理審査委員会委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
畦地 穂、土生 康司、辻井 佳代、小林 政彦	解説（査読無）	リスクマネジメント 院内での薬剤師の活動 B型肝炎再活性化リスクのある医薬品の適正使用に向けた取り組み プレドニゾロンの長期使用によるリスク上昇患者への対策強化 医薬ジャーナル 55 Page661-665(2019).
土生康司、水谷暢明、宮田興子	実践報告（査読有）	基礎系分野を臨床的課題の理解に繋ぐ思考プロセスを体験するためのジグソー型学習の実施 薬学教育 doi: 10.24489/jjphe.2020-018 (2020).
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
薬剤師による問い合わせの一部簡素化に関する近隣クリニック・診療所医師の意識調査	2022. 6	日本プライマリ・ケア連合学会第13回学術大会
内容液飛散のインシデント報告があった軟カプセル製剤の高温高湿下での製剤安定性	2022. 3	日本薬学会第142年会
近隣5病院統一の問い合わせ簡素化に対する医師の意識調査	2019. 11	第29回日本医療薬学会年会
薬剤鑑別におけるPMDA 添付文書情報検索サイトの活用状況とニーズに関する病院薬剤師へのアンケート調査	2019. 3	日本薬学会第139年会

PMDA 添付文書情報検索サイトにおける糖尿病薬識別コードの登録様式の多様性	2019. 3	日本薬学会第139年会
3. シンポジウム等		
シンポジウム『新時代の医薬品リスクマネジメント ～新たなハザードに対して』 医薬品情報を活用するベースはできているか ～ドイツの状況から再考～	2019. 3	日本薬学会第139年会
臨床の諸問題を基礎薬学の知識でどのようにひも解くか SGLT2阻害薬について 臨床を考えた数字の読み方	2018. 10	神戸薬科大学 臨床・基礎薬学連携シンポジウム
臨床から基礎までをつなぐ薬学教育をどのように構築するか 低学年での臨床から基礎薬学までをつなぐ薬学教育 ～チーム基盤型教育 (TBL) を活用する橋渡し教育～	2018. 10	神戸薬科大学 臨床・基礎薬学連携シンポジウム
教育講演 学会発表のhow-to	2018. 2	近畿薬剤師合同学術大会2018
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003～現在	日本医療薬学会会員	
2013～現在	日本医薬品情報学会会員	
2014～現在	日本薬学会会員	
2003～現在	日本病院薬剤師会会員	
2010～現在	日本薬剤師会会員	
2007～現在	日本医療薬学会認定薬剤師	

専任教員の教育・研究業績

所属	総合教育研究センター	職名	講師	氏名	前田 秀子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2010年4月～現在に至る		1年生に「情報リテラシー」（前期）の講義をPower Pointを使用して行った。練習問題をやりながら基本操作を修得させる。さらに、定着させることを目指し課題を作成させた。	
		2009年4月～2021年3月		1年生に「基礎化学実習」（後期）を教えた。毎回、課題の提出をさせ、終了時に実験ノートの提出を行った。	
		2015年10月～2021年3月		1年生に「無機・錯体化学」（後期）を教えた。なるべく身近な化合物を例にあげて、無機化合物の機能や性質に興味を持たせるようにした。	
		2022年9月～2023年3月		1年生に「物理化学I」の反応速度論のところを教えた。毎回、課題を提出させ理解を定着させるようにした。また、課題の添削を行い、学生の苦手なところを把握するようにした。	
		2022年9月～		1年生に「基礎実習」（後期）を教えた。1年生は、初めて実験をする学生も多くいるため、基本的なことを丁寧に指導した。色々な実験を通して、高校の授業で学んだことを実際に自分の眼で見て確かめさせるようにした。	
		2023年4月～		2年生に「ロジカル思考演習II」の講義を行った。1年生後期の反応速度論の振り返りを行い、3年生の薬物動態学や製剤学の授業へのスムーズに移行できるようにした。	
		2023年5月～		2年生に「基礎物理化学実習」（前期）を教えた。3種類の実習を同時に行うことで、ひとつの実習あたりの人数を減らし、少人数でじっくり対応した。	
		2014年9月～		6年生に「総合薬学講座」を教えた。初めに重要な所を説明した後、練習問題を解かせ理解させながら講義を進めた。説明のプリントとは別に問題のプリントを配り、講義の後復習させ定着させる。	
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					

4 その他教育活動上特記すべき事項	2007年10月～2009年1月	神戸大学の非常勤講師として、1年生に化学実験を教えた。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Maeda H., Tsuchida S., Nariai, H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull. 2018, 34: 9-13. "Phosphorylation of Hydroxyproline with Trisodium cyclo-Triphosphate and Evaluation of Their Moisture Retaining Property"
Maeda H., Obata S., Nakayama H.	論文	J. Incl. Phenom. Macrocycl. Chem. 2018, 91(3-4), 125-131. "Preparation and characterization of the inclusion complexes of equol with sulfobutylether- β -cyclodextrin: Their antioxidant activity and dissolution evaluation"
Maeda H., Morita K., Murokawa A., Matsuo R., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull. 2019, 35: 55-58. "Introduction of Phosphonate Group into Kojic acid by Diphosphonate"
Maeda H., Matsushima T., Nagai T., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull. 2020, 36: 29-35. "Phosphonylation of 5' - Deoxy-5-fluorouridine and 1- β -D-Arabinofuranosylcytosine with Disodium Diphosphonate"
Maeda H., Shiobara R., Tanaka M., Kajinami A., Nakayama H.	論文	Drug Dev. Ind. Pharm., 2021, 47: 535-41. "Effect of mechanochemical inclusion of triamterene into sulfobutylether-beta-cyclodextrin and its improved dissolution behavior"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
シクロデキストリンによるプラバスタチンの包接能評価	2019. 09. 12	第36回シクロデキストリンシンポジウム

美白成分の浸透性の向上を目指したジホスホン酸塩によるリン酸修飾	2020. 09. 25	第29回無機リン化学討論会
シクロデキストリンによるルシノールの溶解性の改善とチロシナーゼ阻害活性の評価	2021. 03. 27	日本薬学会第141年会
シクロデキストリンによるメトキシサリチル酸の溶解性の改善とチロシナーゼ阻害活性の評価	2022. 3. 26	日本薬学会第142年会
プレートリーダーによるイリノテカンとシクロデキストリンとの包接複合体形成の評価	2023. 3. 27	日本薬学会第143年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010年10月～2018年10月	日本無機リン化学会学会誌編集委員	
2018年10月～現在に至る	日本無機リン化学会学会誌副編集委員長	
2020年9月～2022年9月	日本無機リン化学会総務担当理事	
2022年10月～現在に至る	日本無機リン化学会評議員	

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 講師	氏名 竹下 治範
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2014年～	<p>4年生を対象に「実務実習事前教育」を担当している。 『実務実習事前教育』においては、5年次に行われる長期実務実習（病院・薬局）にスムーズに取り組めるよう、臨床現場で求められる知識・技能・態度の指導を行い、特に挨拶や身だしなみ教育についても力をいれている。</p> <p>『実務実習事前教育』において、輸液の種類と適応、輸液療法について、実薬を用いるとともに計算問題等も作成して、実務実習に先立つ知識をえられるような工夫を行った。また、医療安全の分野では学生が医療事故インシデントを楽しく理解できるようなSDGの運用に努めた。</p> <p>6年生を対象に「総合薬学講座」を担当している。 『総合薬学講座』の授業では、病院薬剤師業務や注射薬、輸液療法について授業を行った。</p> <p>3年生を対象に「調剤学Ⅱ」を担当している。 『調剤学Ⅱ』の授業では、オムニバスでその他の教員と分担している。私の分担は、注射薬の調剤（計数・無菌調製）、代表的な輸液と適応、栄養輸液など現場の経験をもとに写真を多く取り入れ、最新のトピックスを交えて興味をもてるように工夫を行った。</p> <p>3年生を対象に「医療倫理演習」を担当している。倫理の4原則など理論的な内容と臨床での症例を交えて、臨床経験を活かして学生が理解しやすいよう補足説明に力を入れて教えている。</p>

	<p>2018年～</p> <p>2019年～</p> <p>2020年～</p>	<p>4年生を対象に「処方解析学1」「処方解析2」を担当している。処方解析学1では関節リウマチをメインに膠原病について、また処方解析学2では、酸関連疾患を4年生に、薬の知識だけでなく、症状、臨床検査値な幅広い知識と実務実習に役立つ内容を意識して講義している。</p> <p>「在宅医療演習」の開講の初年度をむかえるが、約3年に渡り準備を行ってきた。甲南女子大学の看護リハビリテーション学部（看護・理学）とともに、在宅医療（地域包括ケアシステム）を想定したIPW(多職種連携)の合同授業の運営に携わり、次世代の多職種のあり方について学生が学べるようサポートした。</p> <p>2020年度は、コロナ禍なのでオンライン開催の準備を行った。</p> <p>「感染制御学Ⅱ」の開講のため、結核感染症、小児感染症、泌尿器感染症及び、感染に関わるエビデンスやアウトブレイク対応法などの授業準備を行った。最新のCovid-19感染など、感染症の話題などにも触れた。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p> <p>調剤学Ⅱ教材</p> <p>在宅医療演習</p> <p>処方解析Ⅰ</p> <p>処方解析Ⅱ</p> <p>感染制御学Ⅱ</p> <p>総合薬学講座</p> <p>薬学生・薬剤師のための 添付文書徹底活用術 (薬事日報社, 2016)</p> <p>コンパス 調剤学 改訂第3版, 南江堂</p> <p>できる薬剤師とよばれるために-上手に使いたい薬学ナレッジ 101, じほう, 2021.</p>	<p>2014～</p> <p>2020～</p> <p>2017～</p> <p>2017～</p> <p>2019～</p> <p>2014～</p> <p>2016年10月1日</p> <p>2020年2月15日</p> <p>2021年12月24日</p>	<p>3年後期科目、注射薬調剤を全般的に作成した。</p> <p>甲南女子大学とのIPEWのテキストを作成した。</p> <p>主要8疾患の中の免疫疾患・関節リウマチを作成した。</p> <p>酸関連疾患・消化性潰瘍及びH.ピロリ菌感染症を作成した。</p> <p>6年前期科目、結核、小児感染症及び、院内感染対策委員会活動等を作成した。</p> <p>6年通年科目の実務の範囲で注射薬とがん化学療法を作成した。</p> <p>薬剤師の業務で起こり得る10の事例について、可能な限り添付文書やインタビューフォームで解決する方法を紹介し、薬学生・薬剤師が臨床現場で解決していけるようなヒントを与える構成となっている。</p> <p>改訂モデルコアカリキュラムに合わせて、最新の調剤業務、その他周辺情報など分かりやすい、基礎的な教科書として執筆した。</p> <p>大学で学んだ基礎的な知識からさらにステップアップした臨床現場での疑問101例について分担執筆した。主に、中堅薬剤師のスキルアップを目的としている。</p>

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
竹下治範, 北 早織, 若林知子, 藪田有沙, 猪野 彩, 原田祐希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 瀨口常男	論文	PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響, 医薬品情報学, 20(2) 98-103, 2018.
八野芳巳, 高取真吾, 柴田隆司, 北小路 学, 大嶋耐之, 難波弘行, 緒方 憲太郎, 柘淵泰宏, 八重徹司, 林雅彦, 垣東英史, 冨永宏治, 名徳倫明, 二宮昌樹, 竹下治範, 島田憲一, 榎屋友幸	著書	コンパス 調剤学 改訂第3版, 南江堂, 2020.
竹下治範, 藪田有沙, 北 早織, 若林知子, 猪野 彩, 原田祐希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 瀨口常男	論文	患者がPTP包装から錠剤を出しやすくする手技についての科学的検討, 薬局薬学, 12(1)1-8, 2020.
北河修治(編集代表) 清水忠, 中川素子, 中村 任, 土生康司, 矢野育子, 土生康司, 坂井祥一, 山本和宏, 加藤史恵, 本庄達哉, 内田享弘, 小島穂菜美, 丹田雅明, 清水 忠, 竹下治範, 湯谷玲子, 永井純也, 中村 任, 服部暁昌, 大村友博, 平大樹, 鈴木豊史, 國津侑貴, 森田真也, 磯野哲一郎, 高尾良洋, 三原 潔, 橋本真梨, 矢野育子, 木村丈司, 徳山尚吾, 奥野 護, 田中和宏, 中尾修平, 鎌尾まや, 岩川精吾, 上田昌宏, 瀧中里美, 北川裕之	著書	できる薬剤師とよばれるために-上手に使いたい薬学ナレッジ101, じほう, 2021.
竹下治範, 伊藤祐来, 重松理紗, 波多江 崇, 宮本敬子, 中川素子, 中川道昭, 鈴木豊明, 瀨口常男, 國正淳一	論文	高齢者の使用性に配慮したPTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼすフィルム素材及び厚みの影響, 医療薬学, 48(8), 331-339, 2022.
2. 学会発表		

演題名	発表年・月	学会名
PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼすフィルムの素材及び膜厚の影響	2018年3月	日本薬学会第138年会, 金沢
高湿度下における市販錠剤の重量と硬度に及ぼす包装素材の相違について	2019年3月	日本薬学会第139年会, 千葉
種々の恒温恒湿条件下でのPTP包装の防湿効果と錠剤の押し出し易さに及ぼすPTP素材の影響	2020年3月	日本薬学会第140年会, 京都
痙攣またはてんかんの既往歴のある患者に対する薬剤師の関わり	2020年10月	第30回日本医療薬学会年会, 名古屋
一包化錠剤仕分装置(TABSORT®)使用に伴うテルミサルタン錠の変色とその要因	2021年10月	第31回日本医療薬学会年会, 熊本
PF点眼薬の新規導入患者への服薬支援に向けた使用感調査報告	2023年3月	日本薬学会第143年会, 札幌
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2001年～現在	日本薬学会会員	
2003年～現在	日本病院薬剤師会会員	
2005年～現在	日本医療薬学会会員	
2007年～現在	日本リウマチ学会会員	
2017年～現在	日本医薬品情報学会会員	
2019年～現在	日本薬局学会会員	
2008年～2013年	日本薬剤師研修センター認定薬剤師 第08-30718号	

竹下

2008年～2013年	日本薬剤師研修センター認定 実務実習指導薬剤師 実習指導08102621号
2008年～2013年	日本病院薬剤師会 生涯研修履修認定薬剤師 第6504号
2009年～現在	日本医療薬学会認定薬剤師 第09-0035号
2019年～現在	日本医療薬学会認定指導薬剤師 第19-0021号

専任教員の教育・研究業績

所属	エクステンションセンター	職名	講師	氏名	鎌尾 まや
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		1997.4～2017.3	「衛生薬学系実習」 書き込み式実験プロトコルを導入し受講前の事前学習を促進することにより、実習の教育効果を向上させた。		
		2017.4～現在に至る	「健康食品」 薬剤師向け健康食品講座の受講に加え、健康食品に関する情報検索の演習を実施し、科学的根拠に対する考え方の教育に努めた。2020年度以降は新型コロナウイルス感染症対応として、e-learning形式を導入し、WEBによるレポート提出により受講成果を評価した。		
		2017.4～現在に至る	「実践薬学」 薬剤師を対象としたグループディスカッション形式の研修への参加を必修化し、学生と薬剤師が共に学ぶ場を提供すると共に、生涯研修の意義の啓蒙に努めた。2020年度以降は新型コロナウイルス感染症対応として、e-learning形式を導入し、WEBによるレポート提出により受講成果を評価した。		
		2019.10～現在に至る	「総合薬学講座」 衛生薬学系分野のうち栄養と健康について、重要ポイントと国家試験の最近の傾向を中心に講義した。また、近年の関連する法・制度の変更点について重点的に解説した。		
		2020.4～現在に至る	「臨床栄養学」 新型コロナウイルス感染症対応として、e-learning形式の講義を実施した。受講期間中に自主課題を提示し、理解度の向上に努めた。		
		2020.4～現在に至る	「実務実習事前教育」 計数調剤、内用液剤の計量調剤、無菌調剤、チーム医療等の項目を担当した。調剤では学生一人一人の手技を観察し、レベルに合わせた指導を実施した。また、チーム医療では自身の臨床研修での経験や生涯研修支援事業の運営をすることで得た知識を活用し、学生のチーム医療への理解、将来的にチームの一員となり得る意識の醸成に努めた。		
		2020.4～現在に至る	「総合文化演習」 喫煙の健康影響をテーマとした演習を実施した。少人数のグループによる自ら設定した小テーマに関する資料検索、発表要旨作成、発表スライド作成を通じて、資料を吟味する力や論理的思考力を養うよう努めた。また、小グループにおける発表、全体発表を実施し、プレゼンテーション能力を醸成した。		

2 作成した教科書、教材、参考書	1997. 4～2017. 3	神戸薬科大学衛生薬学系実習書
	2007. 4～2017. 3	書き込み式実験プロトコール（プリント）
	2021. 4～現在に至る	実務実習事前教育実習テキスト
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2018. 3. 28	神戸薬科大学薬剤師生涯研修支援事業であるシンポジウムにおける10年間の受講者調査（日本薬学会第138年会）
	2019. 2. 22	神戸薬科大学における生涯研修支援事業と健康食品領域研修認定薬剤師制度（生活習慣病予防のための機能性食品開発に関する研究会）
	2019. 3. 22	神戸薬科大学における「健康食品領域研修認定薬剤師制度」に基づく研修プログラム受講者の調査（日本薬学会第139年会）
	2019. 8. 24	神戸薬科大学における薬剤師を対象とした在宅医療研修プログラムの受講者調査及び学部学生を対象とした多職種連携1日見学実習の試み（第4回日本薬学教育学会大会）
	2019. 8. 25	薬剤師の生涯研修と神戸薬科大学における生涯研修支援事業（令和元年度 神戸薬科大学同窓会支部生涯研修企画委員夏季研修会）
	2019. 10. 17	薬学における健康食品分野への取り組み ―神戸薬科大学における健康食品領域研修認定薬剤師制度について―（レギュラトリーサイエンス財団 大阪事業所職員研修会）
	2020. 3. 28	神戸薬科大学における在宅医療に関する薬剤師生涯研修の有用性と問題点評価（日本薬学会第140年会）
	2020. 9. 12	神戸薬科大学における「健康食品領域研修認定薬剤師制度」に基づく研修プログラム受講者に対するアンケート調査 ―2018年度および2019年度の比較分析―（第5回薬学教育学会大会 シンポジウム）
	2020. 9. 13	薬学教育への「栄養薬学」の導入とその課題：大学教員、生涯研修担当者の立場から ―より良い薬物治療と健康サポートに貢献するために―（第5回薬学教育学会大会）
	2021. 8. 21	神戸薬科大学生涯研修におけるe-learning研修受講者に対するアンケート調査―対面研修との比較分析―（第6回薬学教育学会大会）
	2021. 10. 31	「生涯研修認定制度」及び「健康食品領域研修認定薬剤師制度」による薬剤師生涯研修の推進（第24回近畿薬剤師学術大会）
	2022. 8. 20	「神戸薬科大学生涯研修e-learning講座受講者を対象としたアンケート調査―2020年度および2021年度の比較分析―」（第7回日本薬学教育学会）

	2022. 10. 29	「中学生を対象とした薬剤師による体験型防煙授業の効果と課題—生徒のアンケート結果より—」(第16回日本禁煙学会学術総会)
	2022. 10. 29	「中学生を対象とした薬剤師による体験型防煙授業の効果と課題—教諭アンケート結果より—」(第16回日本禁煙学会学術総会)
	2023. 6. 9	「神戸薬科大学における薬学生・薬剤師の臨床能力向上に向けた取り組み—卒前教育から卒後・生涯教育へ—」(第3回兵庫県薬剤師会・兵庫県病院薬剤師会・薬系5大学連携学術大会)
4 その他教育活動上特記すべき事項	2017. 4～現在に至る	健康食品領域研修事業委員会 委員
	2017. 4～現在に至る	健康食品講座企画・運営委員会 委員
	2018. 4～現在に至る	エクステンションセンター事業統括委員会 委員
	2018. 4～現在に至る	生涯研修事業委員会 委員
	2018. 4～現在に至る	生涯研修企画・運営委員会 委員
	2018. 6	2018(平成30)年度 神戸薬科大学学長裁量経費教育改革プログラム採択「生涯研修支援プログラムと連携した地域・在宅医療と多職種連携教育の推進」
	2019. 4	2019年度 神戸薬科大学学長裁量経費教育改革プログラム採択「生涯研修支援プログラムと連携した地域・在宅医療と多職種連携教育の推進」(継続)
	2020. 4～現在に至る	実務実習事前教育委員会 委員
	2020. 5～現在に至る	図書選定委員会 委員(生物・医療薬学系)
	2022. 4～現在に至る	CBT実施委員会 委員
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Hirota Y, Nakagawa K, Isomoto K, Sakaki T, Kubodera N, <u>Kamao M</u> , Osakabe N, Suhara Y, Okano T.	論文	Eldecalcitol is more effective in promoting osteogenesis than alfacalcidol in Cyp27b1-knockout mice. PLoS One. 13, e0199856, 2018 ビタミンD誘導体のエルデカルシトールはアルファカルシドールよりも骨形成促進作用が強いことをビタミンD活性化酵素であるCYP27B1の遺伝子欠損マウスを用いて証明した。 本人担当部分：CYP27B1遺伝子欠損マウスの維持・管理、ビタミンD濃度測定
Tsugawa N, Nishino M, Kuwabara A, Ogasawara H, <u>Kamao M</u> , Kobayashi S, Yamamura J, Higurashi S.	論文	Comparison of vitamin D and 25-hydroxyvitamin D concentrations in human breast milk between 1989 and 2016-2017. Nutrients. 13, 573, 2021 1989年と2016年から2017年に収集された日本人の母乳中ビタミンD及び25-ヒドロキシビタミンD (25OHD) の濃度を比較し、これらの母乳中濃度が調査年に関係なく夏に高いことを明らかにした。また、2016～2017年の夏は1989年の夏と比較して有意に低いビタミンDおよび25OHD濃度が観察され、授乳中の母親のビタミンD栄養状態が関係していることが示唆された。 本人担当部分：母乳中ビタミンD及び25(OH)Dの測定法開発、分析
<u>鎌尾まや</u>	総説	学部教育及び卒業後教育への「栄養薬学」の導入 ―より良い薬物治療と健康サポートに貢献するために― 薬学教育, 5, doi: 10.24489/jjphe, 2021-010, 2021 健康サポート薬局制度の創設により薬学生、薬剤師に対する栄養や健康食品・サプリメントに関する教育の必要性が高まっている現状について概説すると共に、神戸薬科大学における「健康食品領域研修認定薬剤師制度」に基づく薬剤師研修について紹介し、臨床現場と大学が連携して「栄養薬学」領域の教育・研修を構築する必要性を示した。
<u>鎌尾まや</u> (北河修治編)	著書	できる薬剤師とよばれるために 株式会社じほう（北河修治編）2021年発行 本人執筆部分：栄養素が薬理作用をもち、薬の作用に影響を与えることはある？ pp298-300 乳酸菌と抗菌薬は一緒に服用できる？ pp308-310 ダイエット、ケトン体ダイエット、人口甘味料は薬効に影響する？ pp311-313 AGEs、各種ビタミン、ポリフェノールの体内での化学反応とは？ pp314-316

Tsugawa N, Kuwabara A, Ogasawara H, Nishino M, Nakagawa K, <u>Kamao M</u> , Hasegawa H, Tanaka K.	論文	Vitamin D Status in Japanese Young Women in 2016-2017 and 2020: Seasonal Variation and the Effect of Lifestyle Including Changes Caused by the COVID-19 Pandemic. J Nutr Sci Vitaminol (Tokyo). 2022;68(3):172-180. doi: 10.3177/jnsv.68.172. 2016～2017年の日本人若年女性のビタミンD欠乏は夏では60%程度であったのに対し、春・冬では90%以上に達していることを報告した。また夏季における血清ビタミンD代謝物濃度は2016～2017年に比べて2020年では極端に低く、COVID-19による外出日数の減少がビタミンD栄養状態の悪化に影響したことを明らかにした。 本人担当部分：血清中ビタミンD及び25(OH)Dの測定法開発、分析
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
若齢ラットの血中25-Hydroxyvitamin D ₃ 濃度に対するvitamin D ₃ および25-hydroxyvitamin D ₃ の補給効果ならびにカルシウム摂取量の影響	2018.6	日本ビタミン学会第70回大会、高槻
母乳中ビタミン Dおよび25-ヒドロキシビタミンD濃度の経年的比較ならびに地域・季節の影響	2019.1	第37回日本骨代謝学会学術集会、神戸
神戸薬科大学における「健康食品領域研修認定薬剤師制度」に基づく研修プログラム受講者に対するアンケート調査 - 2018年度および2019年度の比較分析 -	2020.9	第5回日本薬学教育学会大会、東京 (WEB)
高齢者における血中終末糖化産物 (AGEs) 濃度と健康関連指標との関連性	2021.3	日本薬学会第141年会、広島 (WEB)
高齢者における生活習慣と健康関連指標との関連性	2022.3	日本薬学会第142年会、名古屋 (WEB)
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
いきいきと元気に暮らすための骨の健康のお話	2018.12	神戸薬科大学第15回健康サポートセミナー
一緒に学ぼう！ 健康食品・サプリメントの正しい知識	2019.9	神戸薬科大学第20回健康サポートセミナー

免疫力に関わるビタミンの話	2021. 5	がん哲学学校 in 神戸 第36回メディカル・カフェ
「生涯研修認定制度」及び「健康食品領域研修認定薬剤師制度」による薬剤師生涯研修の推進	2021. 10	第24回近畿薬剤師学術大会
アドバイザースタッフに関するアンケート調査よりみえてくるもの	2022. 8	2022年度日本食品安全協会教育協議会研修会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1995. 2～現在に至る	日本薬学会会員	
1996. 2～現在に至る	日本ビタミン学会会員	
1997. 6～2017. 3	日本骨代謝学会会員	
1998. 4～2017. 3	日本栄養食糧学会会員	
2005. 7～現在に至る	栄養情報担当者 (NR) ・サプリメントアドバイザー	
2006. 11～現在に至る	認定薬剤師	
2010. 4～2013. 3	日本薬学会環境・衛生部会新人賞選考委員	
2017. 3～現在に至る	日本薬剤師会、兵庫県薬剤師会会員	
2017. 12～現在に至る	日本フードファクター学会会員	
2018. 1～現在に至る	日本薬学教育学会会員	
2019. 6～現在に至る	消費者庁セカンドオピニオン事業 健康食品の表示・広告に関する科学的根拠の妥当性評価における論文レビュアー	
2019. 7～現在に至る	応急手当普及員 (救急インストラクター)	
2020. 7～現在に至る	特定非営利活動法人エナガの会 理事	
2020. 7～現在に至る	I&H株式会社 倫理委員会委員	
2021. 1～現在に至る	認定薬剤師認証研修機関協議会 研修委員	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬理学研究室	職名	講師	氏名	泉 安彦
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
(1) 本学薬学部学生への教育(講義)		2017年～現在	薬理学Ⅱ(2年次後期)		
		2018年～現在	薬理学Ⅳ(3年次前期) (分担4コマ)		
		2018年～現在	医薬品毒性学(4年次前期) (分担4コマ)		
		2017年～現在	総合薬学講座(6年次後期)		
		2022年～現在	薬学入門(1年次前期)		
(2) 本学薬学部学生への教育(実習)		2017年～現在	薬理学実習 (3年次後期)		
		2017年～現在	卒業研究Ⅰ、Ⅱ(4年次、5年次)研究室に配属された学部学生に対して研究指導を実施。		
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育		2018, 2020, 2022年	病態薬理生化学特論(後期)		
(4) 他大学での講義		2017年11月2, 9, 30日, 12月7日	京都大学薬学部にて薬理学Ⅰの講義を実施。		
		2017年12月25日	京都大学薬学部にて薬理学Ⅲの講義を実施。		
		2017年12月1日	京都大学大学院薬学研究科にて基礎医療薬科学特論Ⅱの講義を実施。		
2 作成した教科書、教材、参考書			該当なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			該当なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項			該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					

氏名	種別	内容
Izumi Y, Kataoka H, Inose Y, Akaike A, Koyama Y, Kume T.	論文	Neuroprotective effect of an Nrf2-ARE activator identified from a chemical library on dopaminergic neurons. Eur J Pharmacol. 818:470-479, 2018.
Yamamoto K, Izumi Y, Arifuku M, Kume T, Sawada H.	論文	α -Synuclein oligomers mediate the aberrant form of spike-induced calcium release from IP3 receptor. Sci Rep. 9:15977, 2019.
Inose Y, Izumi Y, Takada-Takatori Y, Akaike A, Koyama Y, Kaneko S, Kume T.	論文	Protective effects of Nrf2-ARE activator on dopaminergic neuronal loss in Parkinson disease model mice: Possible involvement of heme oxygenase-1. Neurosci Lett. 736:135268, 2020.
Kato H, Sato H, Okuda M, Wu J, Koyama S, Izumi Y, Waku T, Iino M, Aoki M, Arawaka S, Ohta Y, Ishizawa K, Kawasaki K, Urano Y, Miyasaka T, Noguchi N, Kume T, Akaike A, Sugimoto H, Kato T.	論文	Therapeutic effect of a novel curcumin derivative GT863 on a mouse model of amyotrophic lateral sclerosis. Amyotroph Lateral Scler Frontotemporal Degener . 23:489-495, 2022.
Izumi Y, Tatsumoto A, Horiuchi N, Arifuku M, Uegomori M, Kume T, Koyama Y.	論文	TPNA10168, an Nrf-2 activator, attenuates inflammatory responses independently of Nrf2 in microglial BV-2 cells: Involvement of the extracellular-signal-regulated kinase pathway. J Pharmacol Sci . 149:1-10, 2022.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Nrf2活性化薬によるミクログリア活性化の抑制作用とその機序解析	2019年11月	第136回日本薬理学会近畿部会
神経炎症に対するNrf2活性化薬によるドパミン神経保護作用～人工知能による計数～	2020年10月	第70回日本薬学会関西支部大会
Nrf2活性化薬の抗炎症作用にNrf2遺伝子が関与しない可能性	2021年3月	第94回日本薬理学会年会

ミクログリアの炎症性活性化に関与する細胞内シグナル伝達経路に対するNrf2活性化薬TPNA10168の作用	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部大会
Nrf2-ARE経路活性化物質の探索と疾患の予防や治療に向けて	2022年12月	第96回日本薬理学会年会・第43回日本臨床薬理学会学術総会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2003年1月～現在	日本薬理学会	
2005年2月～現在	日本神経科学学会	
2008年4月～現在	日本薬学会	
2013年4月～現在	日本薬理学会 学術評議員	
2018年10月～2020年3月	日本薬理学会 代議員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬剤学研究室	職名 講師	氏名 細川 美香
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
薬学部学生への教育 実習	2009年～2014年	4年生に実務実習事前教育 前期(薬剤学関連実習)、実務実習事前教育 後期(処方せんと調剤・鑑査)の指導を行った。
薬学部学生への教育 実習	2009年～現在に至る	薬剤学研究室(卒業研究I, II)に配属された学生に(4, 5, 6年生)、卒業研究の活動を通じて、考える力を養えるように意識して指導を行った。
薬学部学生への教育 実習	2014年～現在に至る	3年生に薬剤学実習の指導を行った。理解度を深めるために、同時進行している授業の内容と関連付けながら説明を行った。
薬学部学生への教育 薬学英語入門	2013年～2020年	3年生に薬学英語入門の指導を行った。専門英語を苦手とする学生のために、学習方法や授業内容をまとめたサブテキストを作成した。また専門英語を深く理解できるように、このテキストを活用して授業を行った。
薬学部学生への教育 薬物動態学Ⅰ	2019年～2020年	3年生に薬物動態学Ⅰの指導を行った。関連した国家試験の練習問題を取り入れて、理解度を確認できるようにした。
薬学部学生への教育 臨床薬剤学Ⅱ	2021年～現在に至る	6年生に臨床薬剤学Ⅱの指導を行った。国家試験の計算問題を中心とした授業であることから、液晶タブレットを用いて実際にどう問題を攻略するかをリアルに見れるような動画を作成した。
薬学部学生への教育 がん薬物療法論	2021年～現在に至る	6年生にがん薬物療法論の指導を行った。がん研究の全体像について、基礎的かつ臨床的な情報を盛り込み、単調な動画にならないように工夫した。
薬学部学生への教育 薬物動態学Ⅱ	2021年～現在に至る	3年生に薬物動態学Ⅱの指導を行った。授業資料は、復習しやすいように図を用いてポイントを整理し、各授業に対して復習問題を挿入した。授業動画は、メリハリのある授業構成となるように、また繰り返し視聴しやすいように工夫した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特になし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

学会発表	2017年9月	第2回日本薬学教育学会大会にて、以下の発表を行った。 演題名「神戸薬科大学の薬学英语入門での学力向上に導くジグソー法の検討—コーディングによる質的分析から学生の意識を可視化する—」
学会発表	2018年9月	第3回日本薬学教育学会大会にて、以下の発表を行った。 演題名「薬学英语入門」におけるジグソー法を用いた協調学習の効果的な予習方法の検討—ジグソー活動での深い学びを目指して—」
4 その他教育活動上特記すべき事項		
神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラム	2017年	神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムへ参画し、プログラム：ジグソー法を活用した「薬学英语入門Ⅰ、Ⅱ」の授業改善を代表者として実施した。
ベストティーチャー賞	2021年	3年後期：薬物動態学Ⅱの授業に対して、ベストティーチャー賞を受賞した。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
細川美香, 児玉典子, 田中将史, 竹内敦子, 小山淳子	論文	薬学雑誌, 140, 107-111 (2020). コーディングによる質的解析を用いた予習方法に関する研究—専門英語科目「薬学英语入門」における意識調査—
Hosokawa M, Goto K, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Chem. Pharm. Bull. 68, 1-6 (2020). Optimization of analytical conditions for hydrophilic nucleic acids using mixed-mode and reversed-phase pentabromobenzyl columns.
Tanaka S, Hosokawa M, Miyamoto T, Nakagawa A, Haruna M, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Rep. 26, 10096 (2021). miR-33a-5p in small extracellular vesicles as non-invasive biomarker for oxaliplatin sensitivity in human colorectal cancer cells.
Hosokawa M, Seiki R, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 578, 157-162 (2021). Combination of azacytidine and curcumin is a potential alternative in decitabine-resistant colorectal cancer cells with attenuated deoxycytidine kinase.
Tanaka S, Hosokawa M, Tatsumi A, Asaumi S, Imai R, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 607, 9-14 (2022). Improvement of resistance to oxaliplatin by vorinostat in human colorectal cancer cells through inhibition of Nrf2 nuclear translocation.
2. 学会発表		

演題名	発表年・月	学会名
エピジェネティック修飾薬による細胞内メカニズムの変化は低酸素下における抗がん剤耐性を改善する	2022年5月	日本薬剤学会 第37回年会
スチレンマレイン酸共重合体(SMA)で被覆したエマルションの細胞内取り込み経路の検討	2022年5月	日本薬剤学会 第37回年会
脂溶性薬物の放出制御を目指したシクロデキストリン含有リポソームの設計：種々のシクロデキストリンを用いた検討	2022年10月	第72回 日本薬学会関西支部総会・大会
ヒストンメチル化酵素阻害薬により低酸素下の抗がん剤耐性を改善する機構の検討	2022年10月	第72回 日本薬学会関西支部総会・大会
脂溶性薬物の放出制御を目指したシクロデキストリン含有リポソームの設計 ：シクロデキストリンの濃度及び種類の影響	2023年5月	日本薬剤学会 第38回年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2004年～現在に至る	日本薬学会会員	
2005年～2022年	日本医療薬学会会員	
2007年～現在に至る	日本薬剤学会会員	
2008年～現在に至る	日本薬物動態学会会員	
2016年～2020年	日本薬学教育学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 微生物化学研究室	職名 講師	氏名 増田 有紀
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
微生物学実習	2010年10月～現在	学部2年次後期に、微生物実習を行っている。学生の理解度を向上させるため、少人数でのディスカッションを実施している。また、操作（特に無菌操作）の一つ一つの意味について理解を深めるために、実習開始時に説明に加えてデモンストレーションを行っている。
情報リテラシー	2014年4月～現在	学部1年次前期に、情報リテラシーの講義の一部として、パワーポイントを用いたプレゼンテーションの作成について指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
なし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Masuda Y, Nakayama Y, Shimizu R, Naito K, Miyamoto E, Tanaka A, Konishi M.	論文	Life Sci., 317:121453, 2023. doi: 10.1016/j.lfs.2023.121453. “Maitake α -glucan promotes differentiation of monocytic myeloid-derived suppressor cells into M1 macrophages”
Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M.	論文	Int. Immunopharmacol., 2019, 67:408-416. “Maturation of Dendritic Cells by Maitake α -glucan Enhances Anti-Cancer Effect of Dendritic Cell Vaccination.”

2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
分泌因子neudesinの樹状細胞機能の抑制を介した新規がん免疫回避機構の解明	2023年3月	日本薬学会 第142年会
食餌性肥満とニコチンによって誘発される筋萎縮におけるFgf21の生理的意義	2023年3月	日本薬学会 第142年会
Fgf21は胸腺髄質上皮細胞の分化成熟を促進し、樹状細胞への組織特異的自己抗原の移行を誘導することで、中枢性免疫寛容に貢献する	2022年3月	日本薬学会 第141年会
食餌性肥満とニコチンによって誘発される筋萎縮と代謝変化におけるFgf21の生理的意義	2022年3月	日本薬学会 第141年会
分泌因子neudesinのがん免疫抑制作用について	2021年3月	日本薬学会 第140年会
III 学会等および社会における主な活動		
2003年～現在に至る	日本薬学会会員	
2009年～現在に至る	日本免疫学会会員	
2010年～現在に至る	日本分子生物学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 医療薬学研究室	職名 講師	氏名 堀部 紗世
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
4年生に対する実務事前実習	2013年10月1日～	本学4次生を対象に、事前実務実習を指導している。疑義照会では、現場で働いている先生方とロールプレイおよびグループディスカッションを行い、実際に疑義照会する時の注意点や配慮および薬剤師としての倫理について指導している。
卒業研究	2013年10月1日～	本学5年生および6年生を対象に、卒業研究を指導している。卒業研究を通して、問題を提議しその問題を自己解決する力を養いように指導している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
特になし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
特になし		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Horibe S, Tanahashi T, Kawauchi S, Murakami Y, Rikitake Y.	論文	BMC Cancer (2018), 18, 47. "Mechanism of recipient cell-dependent differences in exosome uptake."

Horibe S, Kawauchi S, Tanahashi T, Sasaki N, Mizuno S, Rikitake Y.	論文	Biochemical and biophysical research communications. (2018) Vol. 507, p426-432 "CD44v-dependent upregulation of xCT is involved in the acquisition of cisplatin-resistance in human lung cancer A549 cells."
Kawauchi S., Horibe S., Sasaki N., Hirata KI., Rikitake Y.	論文	Experimental Cell Research (2019), Vol. 374(2), p333-341. "A novel in vitro co-culture model to examine contact formation between astrocytic processes and cerebral vessels."
Horibe S, Ishikawa K, Nakada K, Wake M, Takeda N, Tanaka T, Kawauchi S, Sasaki N, Rikitake Y.	論文	Oncology reports (2022), Vol. 47(2):32. doi: 10.3892/or.2021.8243. "Mitochondrial DNA mutations are involved in the acquisition of cisplatin resistance in human lung cancer A549 cells."
Kawauchi S, Mizoguchi T, Horibe S, Tanaka T, Sasaki N, Ikeda K, Emoto N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	Glia (2023), Vol. 71(2), p467-479. "Gliovascular interface abnormality in mice with endothelial cell senescence."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Involvement of mtDNA Mutations in Acquired Resistance to Cisplatin in A549 Cell-Derived Cisplatin-Resistant Cells.	2020年10月	第79回日本癌学会学術総会
脳血管内皮細胞老化によるアルツハイマー病モデルマウスにおける認知機能低下の抑制	2021年12月	第44回日本分子生物学会年会
Efficacy of in vitro 5-Aminolevulinic Acid-mediated Photodynamic Therapy in A549 Cell-Derived Cisplatin-Resistant Cells	2022年9月	第81回日本癌学会学術総会
血管内皮細胞老化によるアルツハイマー病モデルマウスにおける認知機能低下の抑制機序	2022年10月	第73回 日本薬学会関西支部総会・大会
5-アミノレブリン酸を用いた光線力学療法による細胞毒性に及ぼすシスプラチン耐性化の影響	2023年3月	日本薬学会第143年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

堀部

2000年4月～現在に至る	日本薬学会会員
2001年1月～現在に至る	医療薬学会会員
2008年1月～現在に至る	癌学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属 総合教育研究センター	職名 講師	氏名 森田 いずみ
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	1995. 4. 1～現在に至る	『分析化学系実習』を担当している。全体講義で器具の扱い方を見せながら説明を行うことはもちろんのこと、特に注意すべき点に関しては班ごとの少人数にわけて、操作を実際に見せてから実施させるなどの工夫を心がけている。『卒業研究』を担当している。長い時間を費やす卒業研究において得られる様々な経験を通し、社会に出てからも自ら実践できるような学習の機会となるよう常に心がけている。
	2020. 4. 1～現在に至る	『分析化学Ⅲ』を担当している。教科書の内容をもとに、各分析方法の特徴を理解できるような講義内容を心掛けている。単元ごとに確認テストや問題の解説を行い、理解度を各自で確認できるようにしている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2014	『免疫測定法』（講談社）の執筆を分担担当した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし
4 その他教育活動上特記すべき事項		特になし
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
I. Morita, H. Oyama, Y. Kanda, M. Yasuo, A. Ito, M. Toyota, Y. Hayashi, T. Yokoyama, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(1), 123-131. "Enantioselective Monoclonal Antibodies for Detecting Ketamine to Crack Down on Illicit Use"

I. Morita, H. Oyama, Y. Kiguchi, A. Oguri, N. Fujimoto, A. Takeuchi, R. Tanaka, J. Ogata, R. Kikura-Hanajiri, N. Kobayashi	論文	J. Pharm. Biomed. Anal. 2020, 190, 113485. "Immunochemical monitoring of psilocybin and psilocin to identify hallucinogenic mushrooms"
I. Morita, Y. Kiguchi, H. Oyama, A. Takeuchi, C. Tode, R. Tanaka, J. Ogata, R. Kikura-Hanajiri and N. Kobayashi	論文	Anal. Methods, 2021, 13, 3954-3962. "Derivatization-assisted enzyme-linked immunosorbent assay for identifying hallucinogenic mushrooms with enhanced sensitivity"
I. Morita, Y. Kiguchi, H. Oyama, K. Yamaki, N. Sakio, K. Kashiwabara, Y. Kuroda, A. Ito, A. Yokota, N. Ikeda, R. Kikura-Hanajiri, H. Ueda, S. Numazawa, T. Yoshida, N. Kobayashi	論文	Anal. Methods, 2022, 14, 2745-2753. "Derivatization-assisted immunoassays: application for group-specific detection of potent methamphetamine and amphetamine enantiomers"
I. Morita, Y. Kiguchi, S. Nakamura, A. Yoshida, H. Kubo, M. Ishida, H. Oyama, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull., 2022, 45, 851-855. "More than 370-fold increase in antibody affinity to estradiol-17 β by exploring substitutions in the VH-CDR3"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
幻覚性キノコ成分のオンサイト分析を目的とするシロシンシリル化体に対する新規モノクローナル抗体の作製	2019. 9	日本法中毒学会第37年会
Generation of monoclonal antibodies for on-site analysis of psilocin and psilocybin in hallucinogenic mushrooms	2019. 5	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
マジックマッシュルーム中シロシビン、シロシンのELISA	2020. 1	第70回日本薬学会関西支部大会
幻覚性キノコ成分シロシンの高感度検出を可能にする誘導体化ELISA	2022. 3	日本薬学会第142年会
誘導体化イムノアッセイによるメタンフェタミンおよびアンフェタミンの群特異的検出	2022. 10	第72回日本薬学会関西支部総会・大会

森田

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
1995年4月～現在	日本薬学会会員
2003年9月～現在	日本分析化学会会員
2013年4月～2022	生物化学測定研究会会員
2017年6月～2022	日本法中毒学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属	総合教育研究センター	職名	講師	氏名	富田 淑美
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）					
4,5年次「海外薬学研修」を分担		2020年4月～	実際の海外渡航ができない状況において、海外薬学関係者によるオンラインやビデオを用いた講義や、来日の機会を利用した対面の講義を学生に提供し、学生の英語に対する学習意欲および国際感覚の向上に寄与した		
4年次「実務実習事前教育」を分担		2020年4月～	実務実習に臨む前に身に付けるべき技能の修得に寄与した		
4年次「地域医療・プライマリケア論」を分担		2021年4月～	学生に対し、「医療費の適正化に薬局が果たす役割」や「地域の保健、医療、福祉において利用可能な社会資源」に対する理解を深め、地域医療やプライマリケアに薬剤師がどのように関わっていくかを考える機会を提供した		
4年次「社会保障制度と薬剤経済」を分担		2021年4月～	社会保障制度を理解する上で重要な、医療保険制度・薬価基準制度・診療報酬について、正しく理解することに寄与した		
4年次「処方解析Ⅰ」を分担		2021年4月～	統合失調症および気分障害について、模擬症例をまじえて解説し、学生の疾患に対する理解を促した		
6年次「がん薬物療法論」を分担		2021年4月～	がん緩和医療、疼痛・栄養管理に関する知識を身に付けるために必要な情報を学生に提供した		
6年次「感染制御学Ⅱ」を分担		2021年4月～	学生の腎機能評価に関する理解や疥癬治療や周術期感染症に対する理解を深めることに寄与した		
4年次「処方解析Ⅱ」を分担		2021年9月～	妊婦・授乳婦・小児の薬物療法について模擬症例や最新の話題をまじえて解説し、正しく理解するための情報を提供した		
6年次「総合薬学講座」を分担		2021年9月～	薬剤師の実務における、医薬品の管理について担当し、学生に対して知識の定着に寄与した		
2 作成した教科書、教材、参考書					

3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4	その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動			
1. 著書・論文等			
	氏名	種別	内容
	富田 淑美	論文	ファルマシア 2018, 54(10), 976-977.
	富田 淑美	コラム	兵庫県薬剤師会誌「兵薬界」2021, 791(12), 20-21. 「大学だより」
2. 学会発表			
	演題名	発表年・月	学会名
	A preliminary trial for developing the methodology intended to broaden pharmacy students' global horizons.	2021年・10月	第31回日本医療薬学会年会 (International Symposium)
	A Trial for Developing the Methods Intended to Broaden Pharmacy Students' International Perspectives as Future Healthcare Professionals	2022年・7月	10th AASP Conference 2022
3. その他			
	演題名	発表年・月	学会名
	薬局での有機化学を活かした働き方	2018年・10月	臨床・基礎薬学連携シンポジウム
	現場で生きる考える力	2018年・11月	第47回徳島大学薬学部卒後教育公開講座
	調剤業務で見直す！化学の有用性	2021年・8月	2021年度名古屋市立大学東海薬剤師生涯学習センター講座 (8月25日分)

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
2013年9月～2020年3月	静岡県災害薬事コーディネーター
2004年～	日本薬学会
2012年～	日本薬剤師会
2016年4月～	日本病院薬剤師会
2014年4月～	日本医療薬学会
2011年10月～	国際薬剤師・薬学連合（FIP）
2022年8月～	アジア薬科大学協会（AASP）

専任教員の教育・研究業績

所属 薬剤学研究室	職名 講師	氏名 河野 裕允
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） (1) 学部学生に対する教育	2021年～ 2021年～	基礎的な知識について説明した後、教科書の図を中心に臨床現場で実際に遭遇する可能性のある事例について解説を行っている。また、国家試験の過去問題を要所要所に取り入れることで、知識の定着と応用ができるように心がけている。 薬物動態学I（3年生前期） 総合薬学講座（6年生通年） 作業を伴う実験のみでなく、Excelを用いた解析、Wordを用いたレポート作成、Powerpointを用いた発表資料作成を行うことで、実習内容についての理解を深めるのみでなく、論理的思考力およびプレゼン能力の向上も図っている。
(2) 大学院生への教育	2021年～ 2021年～ 2021年～	薬剤学実習（3年生後期） アクティブラボ（1～3年生通年） 卒業研究（4～6年生通年）
	2021年～	薬剤学に関する最新の研究、特に異分野融合に関する事例を紹介し、医薬品開発において薬学研究者として貢献できることを考える機会を提供するようにしている。 臨床薬剤学特論（大学院博士課程）
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Y Kono, A Miyamoto, S Hiraoka, R Negoro, T Fujita.	論文	Biol Pharm Bull. 43, 1785-1791 (2020). "Mesenchymal stem cells alter the inflammatory response of C2C12 mouse skeletal muscle cells."
Y Kono, J Takegaki, T Ohba, K Matsuda, R Negoro, S Fujita, T Fujita.	論文	Int J Pharm. 596, 120298 (2021). "Magnetization of mesenchymal stem cells using magnetic liposomes enhances their retention and immunomodulatory efficacy in mouse inflamed skeletal muscle."
Y Kono, I Kawahara, K Shinozaki, I Nomura, H Marutani, A Yamamoto, T Fujita.	論文	Pharmaceutics. 13, 388 (2021). "Characterization of P-glycoprotein inhibitors for evaluating the effect of P-glycoprotein on the intestinal absorption of drugs."
Y Kono, A Fushimi, Y Yoshizawa, K Higaki, K Ogawara.	論文	Int J Pharm. 623, 121904 (2022). "Effects of particle size and release property of paclitaxel-loaded nanoparticles on their peritoneal retention and therapeutic efficacy against mouse malignant ascites."
Y Kono, R Kamino, S Hirabayashi, T Kishimoto, H Kanbara, S Danjo, M Hosokawa, K Ogawara.	論文	Biomedicines. 11, 558 (2023). "Efficient liposome loading onto surface of mesenchymal stem cells via electrostatic interactions for tumor-targeted drug delivery."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
磁性リポソームを用いた間葉系幹細胞の磁性化とその骨格筋内保持効率の評価	2020年5月	日本薬剤学会 第35年会
組織滞留性の向上を目指した磁性化間葉系幹細胞の作製	2020年12月	第27回次世代医工学研究会

外部磁場存在下における磁性化間葉系幹細胞の骨格筋内滞留性および抗炎症効果の評価	2021年5月	日本薬剤学会 第36年会
磁性リポソームを利用した標的組織内滞留型磁性化間葉系幹細胞の作製 -骨格筋内滞留性および抗炎症効果の評価-	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部大会
磁性リポソームを用いた効率的な間葉系幹細胞表面へのリポソーム修飾法の構築	2022年6月	第38回日本DDS学会学術集会
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
標的組織への薬物移行性・滞留性の向上を目的とした磁性リポソームの開発	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部大会 受賞講演
キャリアアップにおける異分野交流・連携の重要性	2022年10月	第16回次世代を担う若手のための医療薬科学シンポジウム 若手シンポジウム
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010年4月～現在	日本薬剤学会会員	
2010年4月～現在	日本DDS学会会員	
2012年4月～現在	日本薬学会会員	
2013年4月～現在	日本癌学会会員	
2019年7月～現在	次世代医工学研究会幹事	
2021年7月～現在	日本薬剤学会 DDS製剤臨床応用FG 執行部	
2022年7月～現在	日本薬学会 医療薬科学部会 若手世話人	

専任教員の教育・研究業績

所属	医薬細胞生物学研究室	職名	講師	氏名	山田 泰之
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		2017年9月1日～現在に至る	本学2年生を対象に「細胞生物学実習」にて、顕微鏡の使用方法や、動物・植物の組織の観察、マウスの解剖、重要生薬の観察や鑑定についての指導を行っている。		
		2018年4月1日～現在に至る	本学2～3年生を対象の選択科目「アクティブ・ラボ」にて、学生に持参してもらった植物を用いた組織培養実験や動物細胞の継代培養とルシフェラーゼによる発光検出実験などについて、指導を行っている。		
		2021年4月1日～現在に至る	本学6年生対象の「総合薬学講座」にて、国家試験対策の講義や問題演習を行っている。		
		2022年4月1日～現在に至る	本学1年生対象の「薬学入門」にて、生薬学/植物細胞生物学に関する観点から、薬用植物が生産する薬の原料となるさまざまな代謝産物の特徴や、生産に関する課題と最新の研究事例を簡単に紹介している。		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
II 研究活動					
1. 著書・論文等					

氏名	種別	内容
Yasuyuki Yamada, Akira Nakagawa, Fumihiko Sato, Hiromichi Minami, Nobukazu Shitan	論文	“Transport engineering using tobacco transporter NtJAT1 enhances alkaloid production in <i>Escherichia coli</i> ” Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, 86, 865-869, DOI: 10.1093/bbb/zbac056 (2022)
Yasuyuki Yamada, Miya Urui, Hidehiro Oki, Kai Inoue, Haruyuki Matsui, Yoshito Ikeda, Akira Nakagawa, Fumihiko Sato, Hiromichi Minami, Nobukazu Shitan	論文	“Transport engineering for improving the production and secretion of valuable alkaloids in <i>Escherichia coli</i> ” Metabolic Engineering Communications, 13, e00184, DOI: 10.1016/j.mec.2021.e00184 (2021)
Yasuyuki Yamada, Shohei Nishida, Nobukazu Shitan, Fumihiko Sato	論文	“Genome-Wide Profiling of WRKY Genes Involved in Benzylisoquinoline Alkaloid Biosynthesis in California Poppy (<i>Eschscholzia californica</i>)” Frontiers in Plant Science, 12, 600326, DOI: 10.3389/fpls.2021.699326 (2021)
Yasuyuki Yamada, Hideki Hirakawa, Kentaro Hori, Yohei Minakuchi, Atsushi Toyoda, Nobukazu Shitan, Fumihiko Sato	論文	“Comparative analysis using the draft genome sequence of California poppy (<i>Eschscholzia californica</i>) for exploring the candidate genes involved in benzylisoquinoline alkaloid biosynthesis” Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, 85, 851-859, DOI: 10.1093/bbb/zbac091 (2021)
Yasuyuki Yamada, Shohei Nishida, Nobukazu Shitan, Fumihiko Sato	論文	“Genome-wide identification of AP2/ERF transcription factor-encoding genes in California poppy (<i>Eschscholzia californica</i>) and their expression profiles in response to methyl jasmonate” Scientific Reports, 10, 18066, DOI: 10.1038/s41598-020-75069-7 (2020)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

ベンジルイソキノリンアルカロイド生合成系の遺伝子発現制御に関わるAP2/ERF転写因子の機能解析	2022年9月	第39回日本植物バイオテクノロジー学会（堺）大会
ウマノスズクサのアリストロキア酸生合成に関わるO-methyltransferaseの探索と機能解析	2022年9月	日本薬学会第68回年会 松山（オンライン）
アルカロイド生産性大腸菌とピキア酵母の共培養系の確立と増産への応用	2022年3月	日本薬学会第142回年会 名古屋（オンライン）
ナス科植物における ABC 輸送体 D サブファミリーABCD1 の遺伝子発現解析	2021年10月	第1回トランスポーター研究会関西部会 Web
ニンジン抽出物が有する細胞内への亜鉛取込み促進作用 -亜鉛欠乏症を改善しうる生薬・成分の探索	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部総会・大会 大阪（オンライン）
3. その他		
招待講演・演題名	発表年・月	学会名
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2008年5月～現在に至る	日本植物バイオテクノロジー学会会員	
2008年11月～現在に至る	日本農芸化学会会員	
2010年1月～現在に至る	日本植物生理学会会員	
2019年2月～現在に至る	日本薬学会会員	
2020年3月～現在に至る	トランスポーター研究会幹事/世話人	

専任教員の教育・研究業績

所属	薬品物理化学研究室	職名	講師	氏名	山崎 俊栄
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2017年～現在 2022年 2022年～現在	物理化学実習（2年次後期）（分担） 生体膜モデル粒子への薬物の分配係数の決定を担当 物理化学II（2年次後期）（分担） WebClassを用いた復習 基礎物理化学（1年次前期）（分担） 講義資料の作成、WebClassを用いた復習、課題プリント		
2	作成した教科書、教材、参考書		該当なし		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Yamasaki T., Azuma R., Sano K., Munekane M., Matsuoka Y., Yamada K., Mukai T.		論文	ACS. Med. Chem. Lett., 11(1): 45-8 (2020) Radioiodinated Nitroxide Derivative for the Detection of Lipid Radicals.		
Azuma R., Yamasaki T., Sano K., Munekane M., Matsuoka Y., Yamada K., Mukai T.		論文	Free Radic. Biol. Med., 163: 297-305 (2021) A Radioiodinated Nitroxide Probe with Improved Stability against Bioreduction for In Vivo Detection of Lipid Radicals.		
Yamasaki T., Matsuda Y., Munekane M., Sano K., Mukai T.		論文	Org. Biomol. Chem., 20: 7956-7962 (2022) Substituent effects of the phenyl ring at different positions from the α -carbon of TEMPO-type nitroxide.		

Yamasaki T., Sano K., Mukai T.	総説	<i>Antioxid. Redox Signal.</i> , 36(10-12): 797-810 (2022) Redox monitoring in nuclear medical imaging.
Azuma R., Yamasaki T., Emoto C. M., Sato-Akaba H., Sano K., Munekane M., Fujii G. H., Mukai T.	論文	<i>Free Radic. Biol. Med.</i> , 194: 114-122 (2023) Effect of relative configuration of TEMPO-type nitroxides on ascorbate reduction.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ホモリシスにより生じる炭素ラジカルの生体挙動解明に向けた放射性ヨウ素標識アルコキシアミンの開発	2022年5月	第75回日本酸化ストレス学会
酸化ストレスに寄与する炭素ラジカルを標的とした放射性プローブの開発及び病態モデルでの評価	2022年7月	第59回アイソトープ・放射線研究発表会
過酸化水素を生体内で検出する核医学イメージングプローブの合成	2022年9月	第5回日本核医学会分科会放射性薬品科学研究会／第21回放射性医薬品・画像診断薬研究会
アルコキシアミンの熱ホモリシスにより生じる炭素ラジカルの生体挙動解明に向けた放射性ヨウ素標識誘導体の開発	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部大会
生体内過酸化水素を追跡するメタボリックトラッピング型放射性プローブの合成	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部大会
3. その他（講演）		
演題名	発表年・月	学会名
ラジカル化合物の反応性制御と生体計測プローブ・治療化合物への展開	2022年9月	第19回次世代を担う若手のためのフィジカル・ファーマフォーラム (PPF2022)
脂質炭素ラジカルの生体検出を指向した放射性プローブの開発：脳虚血再灌流障害をモデルとした評価	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2006年～現在	日本薬学会会員	
2007年～現在	電子スピンサイエンス学会会員	
2014年～現在	International EPR Society会員	
2018年～現在	日本核医学会会員	
2019年～現在	日本癌学会会員	
2022年～現在	日本酸化ストレス学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 薬化学研究室	職名 講師	氏名 高木 晃
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2016年10月-現在に至る	薬化学研究室に配属された学生の卒業研究指導を行っている。実験で行うことを薬剤師国家試験と関連付けすることで実験にも興味を持てるように工夫している。
	2017年4月-現在に至る	有機化学実習(学部2年生)を分担しており、実習講義の一部を担当している。実習時間の終わりにディスカッションを行い、実習の目的と実際に行った手順の理解を促進できるように努めている。
	2022年9月-現在に至る	総合薬学講座(学部6年生)の化学を分担しており、講義の1コマを担当している。国家試験に必要な知識と問題を解くためのポイントを効率的に理解できるように努めている。
	2022年4月-現在に至る	薬学入門(1年生)の1コマを担当している。高校の知識で理解できることと、今後の講義で学んでいくことを織り交ぜることで今後の勉強や研究に意欲を持って臨んでもらえるように努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

T. Ikawa, J. Sun, A. Takagi, S. Akai	論文	<i>J. Org. Chem.</i> 2020 , <i>85</i> , 3383-3392. "One-Pot Generation of Functionalized Benzyne from Readily Available 2-Hydroxyphenylboronic Acids"
I. Takashima, Y. Inoue, N. Matsumoto, A. Takagi, K. Okuda	論文	<i>Chem. Commun.</i> 2020 , <i>56</i> , 13327-13330. "A fluorogenic probe using a catalytic reaction for the detection of trace intracellular zinc"
A. Takagi, K. Usuguchi, I. Takashima, K. Okuda	論文	<i>Org. Lett.</i> 2021 , <i>23</i> , 4083-4087. "Total Synthesis of Antiausterity Agent (±)-Uvaridacol L by Regioselective Axial Diacylation of a <i>myo</i> -Inositol Orthoester"
T. Ikawa, Y. Yamamoto, A. Heguri, Y. Fukumoto, T. Murakami, A. Takagi, Y. Masuda, K. Yahata, H. Aoyama, Y. Shigeta, H. Tokiwa, S. Akai	論文	<i>J. Am. Chem. Soc.</i> 2021 , <i>143</i> , 10853-10859. "Could London Dispersion Force Control Regioselective (2 + 2) Cyclodimerizations of Benzyne? YES: Application to the Synthesis of Helical Biphenylenes"
T. Yamada, A. Fujii, K. Park, C. Furugen, A. Takagi, T. Ikawa, H. Sajiki	論文	<i>Bull. Chem. Soc. Jpn.</i> 2022 , <i>95</i> , 735-742. "Catalytic Intramolecular Cyclization of Alkynyl Cyclic Acetals via Chemoselective Activation Leading to a Phenanthrene Core"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
位置選択的ジベンゾイル化による(±)-uvaridacol Lの効率的合成	2021年3月	日本薬学会第141年会
がんの栄養飢餓耐性解除に着目したグルコース誘導体の構造活性相関研究	2021年3月	日本薬学会第141年会
栄養飢餓耐性を解除する(±)-uvaridacol Lの全合成と合成類縁体の活性評価	2021年9月	第63回天然有機化合物討論会
β-ケトエステル型ヒドラジン検出蛍光プローブの創製	2022年3月	日本薬学会第142年会
栄養飢餓耐性解除能を有する(±)-uvaridacol Lの全合成	2022年4月	第27回癌治療増感研究会

3. その他		
演題名	発表年・月	学会名
がん微小環境を標的とした生物活性化合物の創製研究	2020年10月	第6回関西薬学シンポジウム：化学系の若い力（招待講演）
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2009年～現在に至る	日本薬学会会員	
2009年～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2017年～現在に至る	国際癌治療増感研究協会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	製剤学研究室	職名	講師	氏名	田中 晶子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）				
	アクティブラボ	2018年4月～	3年次生を対象に薬物動態関連の研究を行い、研究の面白さと研究室の雰囲気を感じてもらうように工夫している。		
	創薬物理薬剤学	2021年4月～	教科書のポイントをまとめ、重要単語を記入できるように工夫したパワーポイントを用いて授業を行っている。		
	社会薬学Ⅱ	2023年4月～	教科書のポイントをまとめ、重要単語を記入できるように工夫したパワーポイントを用いて授業を行っている。		
	製剤学・薬剤学実習	2018年4月～	3年次生後期の薬剤学・製剤学実習において、製剤試験法についての指導を行っている。		
	卒業研究	2018年4月～	製剤学研究室に配属された4、5、6年次生に対し、卒業研究の指導を行っている。卒業研究を通して、問題解決能力・プレゼンテーション能力等を養うことができるように指導している。		
2	作成した教科書、教材、参考書				
	特になし				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
	特になし				
4	その他教育活動上特記すべき事項				
	特になし				
II 研究活動					

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tanaka A., Furubayashi T., Arai M., Inoue D., Kimura S., Kiriyama A., Kusamori K., Katsumi H., Yutani R., Sakane T., Yamamoto A.	論文	Mol. Pharm., 2018, 15, 1105-1111. "Delivery of Oxytocin to the Brain for the Treatment of Autism Spectrum Disorder by Nasal Application"
Naito C., Katsumi H., Yoneto K., Omura M., Nishidono M., Kamei S., Mizoguchi A., Tamba A., Tanaka A., Morishita M., Yamamoto A.	論文	Pharmaceutics, 2019, 11, 643. "Development of a phosphoric acid-mediated hyaluronic acid gel sheet for efficient transdermal delivery of alendronate for anti-osteoporotic therapy"
Tanaka A., Takayama K., Furubayashi T., Mori K., Takemura Y., Amano M., Maeda C., Inoue D., Kimura S., Kiriyama A., Katsumi H., Miyazato M., Kangawa K., Sakane T., Hayashi Y., Yamamoto A.	論文	Mol. Pharm. 2020, 17, 32-39. "Transnasal Delivery of the Peptide Agonist Specific to Neuromedin-U Receptor 2 to the Brain for the Treatment of Obesity"
Hatakawa Y., Tanaka A., Furubayashi T., Nakamura R., Konishi M., Akizawa T., Sakane T.	論文	Pharmaceutics., 2021, 13, 1673. "Direct Delivery of ANA-TA9, a Peptide Capable of A β Hydrolysis, to the Brain by Intranasal Administration"
Tanaka A., Nakano H., Yoneto K., Yoneto C., Furubayashi T., Suzuki K., Okae A., Ueno T., Sakane T.	論文	Biol. Pharm. Bull., 2022, 45(4), 403-408. "Topical xerostomia treatment with hyaluronate sheets containing pilocarpine."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
中分子ペプチドを利用した新規肥満治療法の開発 :鼻腔内投与後の脳移行性に対するペプチドの安定性の影響	2022年5月	日本薬剤学会第37年会
鼻腔内投与後の薬物の脳内移行性: Microdialysis法による評価	2022年5月	日本薬剤学会第37年会
鼻腔内投与による視神経への薬物送達	2022年5月	日本薬剤学会第37年会

口腔粘膜炎に対するヒアルロン酸シートの治癒効果	2022年5月	日本薬剤学会第37年会
鼻腔内投与によるoxytocinの脳内送達－Glymphatic systemの影響－	2022年6月	第38回日本DDS学会学術集会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2010年10月～現在に至る	日本薬学会会員	
2011年3月～現在に至る	日本薬剤学会会員	
2015年3月～現在に至る	日本DDS学会会員	
2019年4月～現在に至る	日本医療薬学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 衛生化学研究室	職名 講師	氏名 中山 啓
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
衛生薬学実習	2021年4月～	実習に関しては、各実習項目ごとに教員と学生でディスカッションを行い、思考力の向上につながるように努めている。また、身近なものを例に挙げ学生自身が深く考えるきっかけを与えるように工夫を凝らしている。講義課目に関しては、要点をまとめた独自プリントを作成することにより学ぶべきポイントをとらえやすくできるように工夫した。また演習問題を作成することで講義の理解度をはかることができるようにし、効率的な復習に結びつくようにした。
衛生薬学III	2021年4月～	
薬学入門	2022年4月～	
2 作成した教科書、教材、参考書		
授業用プリント	2021年4月～	衛生薬学IIIで用いる授業プリントを作成した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Mari Kondo, Haruka Okazaki, Kei Nakayama, Hirofumi Hohjoh, Kimie Nakagawa, Eri Segi-Nishida, Hiroshi Hasegawa	論文	“Characterization of Astrocytes in the Minocycline-Administered Mouse Photothrombotic Ischemic Stroke Model.” Neurochemical Research 47: 2839-2855, 2022.

Kei Nakayama, Takeshi Yoshida, Yoshiaki Nakayama, Noriaki Iguchi, Yuta Namba, Morichika Konishi, Hiroshi Hasegawa	論文	“Activation of macrophages mediates dietary restriction-induced splenic involution.” Life Sciences 310: 121068, 2022.
Hiroshi Hasegawa, Mari Kondo, Kei Nakayama, Tomoko Okuno, Nobuyuki Itoh, Morichika Konishi.	論文	“Testicular Hypoplasia with Normal Fertility in Neudesin-Knockout Mice.” BPB 45: 1791-1797, 2022.
Hiroshi Hasegawa, Kei Nakayama.	論文	Starvation-Induced Involution of Lymph Node in Mice.” BPB Rep. 5: 133-136, 2022
Kei Nakayama, Mari Kondo, Tomoko Okuno, Nurhanani Razali, Hiroshi Hasegawa	論文	“Different Properties of Involted Thymus upon Nutritional Deficiency in Young and Aged Mice.” BPB, 46, 464-472 (2023)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
飢餓ストレス下での脾臓退縮におけるマクロファージの役割	2021年9月	フォーラム2021 衛生薬学・環境トキシコロジー (口頭)
低栄養による脾臓退縮にはマクロファージが関与する	2022年3月	日本薬学会第142年会 (口頭)
低栄養による脾臓退縮における遺伝子発現の網羅的解析	2022年8月	フォーラム2022衛生薬学・環境トキシコロジー (口頭)
ストレス負荷によって退縮する胸腺での組織血管化	2022年11月	第45回日本分子生物学会年会 (口頭)
拘束ストレス負荷による胸腺退縮において胸腺内血管は変化する	2023年3月	日本薬学会第143年会 (口頭)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

中山 啓

2005年～	日本分子生物学会会員
2015年～	日本神経科学学会会員
2018年～	北米神経科学学会会員
2021年～	日本薬学会会員

専任教員の教育・研究業績

所属	機能性分子化学研究室	職名	講師	氏名	福田正和
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2023年	物理系創薬学特論（大学院博士、兼担）：バイオ医薬品開発の概要に関する講義資料の作成及び講義		
		2023年	総合薬学講座I（6年次前期、兼担）：相平衡に関する講義資料の作成及び講義		
		2023年	基礎物理化学実習（2年次前期、兼担）：タンパク質の熱力学的安定性の評価手法に関する講義資料の作成及び実習における指導		
2	作成した教科書、教材、参考書		該当なし		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別		内容	
Kohei Soeda, Kengo Arai, Tetsuya Yamamoto, Katsuya Ofuji, <u>Masakazu Fukuda*</u> , Daisuke Hashimoto, Yuji Yamanaka		論文		Mechanism of Protein-PDMS Visible Particles Formation in Liquid Vial Monoclonal Antibody Formulation. Journal of Pharmaceutical Sciences, 112: 653-664. (2023)	
<u>Masakazu Fukuda*</u> , Tadao Yamazaki, Seiji Ueno, Akiko Koga, Yuji Yamanaka		論文		Viscosity increase/gelation of therapeutic IgG monoclonal antibodies induced by Zn ²⁺ : One possible root cause of clogging of staked-in-needle prefilled syringes. European Journal of Pharmaceutics and Biopharmaceutics, 178: 179-186. (2022)	

Kohei Soeda, <u>Masakazu Fukuda*</u> , Masaya Takahashi, Hirotaka Imai, Kengo Arai, Satoshi Saitoh, Ravuri S.K. Kishore, Nuria Sancho Oltra, Jeremy Duboeuf, Daisuke Hashimoto, Yuji Yamanaka	論文	Impact of Poloxamer 188 Material Attributes on Proteinaceous Visible Particle Formation in Liquid Monoclonal Antibody Formulations. Journal of Pharmaceutical Sciences, 111: 2191-2200. (2022)
Minoru Nakano*, Hiroyuki, Nakao, Shigeharu Yoshida, <u>Masakazu Fukuda</u> , Manjiro Imai, Keisuke Ikeda	論文	Energetic and Structural Insights into Phospholipid Transfer from Membranes with Different Curvatures by Time-Resolved Neutron Scattering. The Journal of Physical Chemistry Letters, 13: 6024-6030. (2022)
Petr V. Konarev*, Melissa A. Graewert, Cy M. Jeffries, <u>Masakazu Fukuda</u> , Taisiia A. Cheremnykh, Vladimir V. Volkov, Dmitri I. Svergun*	論文	EFAMIX, a tool to decompose inline chromatography SAXS data from partially overlapping components. Protein Science, 31: 269-282. (2022)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
抗体製剤開発における物性課題に対する取り組み	2022年7月	第38回物性物理化学研究会
モノクローナル抗体溶液製剤中におけるタンパク性visible particle発生に与えるポロキサマー188材料特性の影響	2023年7月	第23回日本蛋白質科学会年会
タンパク質の構造・物性に基づく可視粒子形成のリスク評価手法の構築	2023年7月	第23回日本蛋白質科学会年会
III 学会等および社会における主な活動		
2022年4月～2023年3月	日本薬剤学会 製剤・創剤セミナー実行委員会 委員	
2022年11月～	日本薬学会 正会員	
2023年6月～	日本抗体学会 会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 機能性分子化学研究室	職名 助教	氏名 寶田 徹
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2022年 2022年～現在	基礎実習（1年次後期） 生物物理化学（3年次前期：2コマ担当）
2 作成した教科書、教材、参考書	2022年12月	基礎物理化学実習書
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		なし
4 その他教育活動上特記すべき事項		なし
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Shogo Takeda, Hiroshi Shimoda, Toru Takarada, Genji Imokawa*	論文	Strawberry seed extract and its major component, tiliroside, promote ceramide synthesis in the stratum corneum of human epidermal equivalents <i>PLoS ONE</i> , 13: e0205061. (2018)
Kenji Sugawara, Kazuhiro Nomura, Yuko Okada, Aki Sugano, Masaaki Matsumoto, Toru Takarada, Atsuko Takeuchi, Hiroyuki Awano, Yushi Hirota, Hisahide Nishio, Yutaka Takaoka, Wataru Ogawa*	論文	In silico and in vitro analyses of the pathological relevance of the R258H mutation of hepatocyte nuclear factor 4 α identified in maturity-onset diabetes of the young type 1 <i>Journal of Diabetes Investigation</i> , 10: 680-684. (2019)
Hiroshi Shimoda*, Shogo Takeda, Toru Takarada, Yurina Kato, Norihito Shimizu, Kazuya Toda, Masafumi Nakamura, Hiroshi Hanada, Seikou Nakamura, Hisashi Matsuda	論文	Hydroxypterocarpan with estrogenic activity in Aguaje, the fruit of <i>Mauritia flexuosa</i> (Peruvian moriche palm) <i>Bioactive Compounds in Health and Disease</i> , 2: 64-77. (2019)
Emma Tabe Eko Niba, Hisahide Nishio, Yogik Onky Silvana Wijaya, Mawaddah Ar Rochmah, Toru Takarada, Atsuko Takeuchi, Tomokazu Kimizu, Kentaro Okamoto, Toshio Saito, Hiroyuki Awano, Yasuhiro Takeshima, Masakazu Shinohara	論文	Stability and Oligomerization of Mutated SMN Protein Determine Clinical Severity of Spinal Muscular Atrophy <i>Genes (Basel)</i> , 13(2):205. (2022)
Masafumi Tanaka, Toru Takarada, Satomi Nadanaka, Risa Kojima, Kimiko Hosoi, Yuki Machiba, Hiroshi Kitagawa	論文	Influences of amino-terminal modifications on amyloid fibril formation of human serum amyloid A <i>Archives of Biochemistry and Biophysics</i> . 742 (1) 109615 (2023)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
The Application of Rice Oil-derived Phytochemicals - Potential Effect of Rice-derived Compounds on Skin and Muscle for Functional Foods and Cosmetics-	2018年5月	The 5th International Conference On Rice Bran Oil, Hanoi, VIETNAM
時計遺伝子を制御するパッションフラワーエキスの自発運動およびヒトの健康関連 QOL に及ぼす作用	2018年9月	第23回日本フードファクター学会合同学術集会 (京都)
ペルー産オオミテングヤシ果実に含まれるエストロゲン活性成分に関する研究	2019年3月	日本薬学会第139年会 (千葉)

血清アミロイドA4の細胞外分泌と相互作用タンパク質に及ぼすN型糖鎖の影響	2023年3月	日本薬学会第143年会（札幌）
血清アミロイドA4の細胞外分泌とタンパク質分解に及ぼすN型糖鎖の影響	2023年5月	生化学会近畿支部
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2019年	日本薬学会 正会員	
2013年5月～	日本質量分析学会 正会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	生命有機化学研究室	職名	助教	氏名	平田 翼
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2022.4～現在	3年生の「機器分析学実習」を指導している。有機化合物の分析を目的とする物質の定性・定量に関する基本的事項を修得させる。実際の実験や分析の操作を通して、これまでの学習内容をより深く理解できるよう、学生との議論に重点を置いている。			
	2022.4～現在	生命有機化学研究室に配属された4～6年生を対象に、卒業研究を指導している。研究活動における実験の考察と議論を通して、論理的思考力や課題解決力の養成を図っている。			
	2022.4～現在	本学1～3年生を対象の選択科目「アクティブ・ラボ」にて、有機合成化学実験における基本的な実験操作や実験結果に対する考察の仕方を指導している。特に、研究活動の魅力が伝えられるように指導している。			
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
II 研究活動					
1. 著書・論文等					

氏名	種別	内容
Yasuhiro Yamashita, Hirotsugu Suzuki, Io Sato, Tsubasa Hirata, Shū Kobayashi	論文	Catalytic Direct-Type Addition Reactions of Alkylarenes with Imines and Alkenes Angew. Chem. Int. Ed. 2018, 57, 6896-6900.
Tsubasa Hirata, Io Sato, Yasuhiro Yamashita, Shū Kobayashi	論文	Asymmetric C(sp ³)-H Functionalization of Unactivated Alkylarenes such as Toluene Enabled by Chiral Brønsted Base Catalysts Commun. Chem. 2021, 4, 36.
Tsubasa Hirata, Yoshihiro Ogasawara, Yasuhiro Yamashita, Shū Kobayashi	論文	α -Alkylation of Ketones with Alkenes Enabled by Photoinduced Activation of Silyl Enol Ethers in the Presence of a Small Amount of Water Org. Lett. 2021, 23, 5693-5697.
Tsubasa Hirata, Yoshihiro Ogasawara, Shu Kobayashi, Yasuhiro Yamashita	論文	Photocatalytic Addition Reactions of Ketene Silyl Acetals with Alkenes through Formation of α -Carbonyl Radicals Chem. Asian J. 2022, 17(19), e202200647.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Development of C-C Bond Forming Reactions via Catalytic Activation of Less Reactive Pronucleophiles	2021年10月	第12回大津会議
Development of Addition Reactions of Ketones with Alkenes through Photo-Induced Activation of Their Enolates	2022年3月	日本化学会第102回春季年会
エノラートの酸化を鍵とするケトンのアルケンに対する付加反応の開発	2022年8月	第19回六甲有機合成研究会
Grignard反応剤を用いるニトリルへの触媒的アルキル付加反応	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部総会・大会

平田

塩化亜鉛触媒とグリニャール反応剤を用いるニトリルへのアルキル付加反応	2023年3月	日本化学会第103回春季年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2018年4月～現在に至る	日本化学会会員	
2019年6月～現在に至る	有機合成化学協会会員	
2021年10月～現在に至る	日本薬学会会員	
2023年4月～現在に至る	日本プロセス化学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	臨床薬学研究室	職名	助教	氏名	吉川 祥子
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2023年4月1日 2023年4月1日 2023年4月1日 2023年4月1日 2023年4月1日	「実務実習事前教育」6年制課程4年次 「薬物治療学Ⅴ」6年制課程4年次 「薬学入門」6年制課程1年次 「薬物治療学Ⅳ」6年制課程3年次 「処方解析Ⅱ」6年制課程4年次 講義では、視覚的な理解を促すために図表や写真を含めたパワーポイントファイルを提示しながら進めている。講義前にパワーポイントファイルの内容をプリントし、一部穴埋め形式にして配布している。講義内容については、臨床医としての経験に基づき、具体的な疾患や症例を提示しながら最新の臨床エビデンスなどを交えるなど、学生の学習意欲を高める工夫を行っている。また、知識を定着させる目的で、国家試験の問題を改変したものを講義終了前に提示し、その内容を解説している。		
2	作成した教科書、教材、参考書	2023年4月1日	最新の知見を含めた独自のプリント、スライドを作成。		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4	その他教育活動上特記すべき事項				
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Yoshikawa S, Nagao M, Toh R, Shinohara M, Iino T, Irino Y, Nishimori M, Tanaka H, Satomi-Kobayashi S, Ishida T, Hirata KI.		論文	Inhibition of glutaminase 1-mediated glutaminolysis improves pathological cardiac remodeling. Am J Physiol Heart Circ Physiol. 2022 May 1;322(5):H749-H761.		

Iino T, Toh R, Nagao M, Shinohara M, Harada A, Murakami K, Irino Y, Nishimori M, Yoshikawa S, Seto Y, Ishida T, Hirata KI.	論文	Effects of Elaidic Acid on HDL Cholesterol Uptake Capacity. Nutrients. 2021 Sep 4;13(9):3112.
Watanabe K, Nagao M, Toh R, Irino Y, Shinohara M, Iino T, Yoshikawa S, Tanaka H, Satomi-Kobayashi S, Ishida T, Hirata KI.	論文	Critical role of glutamine metabolism in cardiomyocytes under oxidative stress. Biochem Biophys Res Commun. 2021 Jan 1;534:687-693.
Yoshikawa S, Hara T, Suzuki M, Fujioka M, Taniguchi Y, Hirata KI.	論文	Imatinib Dramatically Improved Pulmonary Hypertension Caused by Pulmonary Tumor Thrombotic Microangiopathy (PTM) Associated with Metastatic Breast Cancer. Int Heart J. 2020 May 30;61(3):624-628.
吉川 祥子, 西森 誠, 開發 謙次, 本庄 友行, 瀬口 理, 福嶋 教偉, 藤田 知之, 曾根 尚彦, 今西 純一, 亀村 幸平, 岩橋 正典.	論文	体外設置型補助人工心臓により救命し得たB型インフルエンザウイルス心筋炎の1例. 心臓 51巻 2号 p.198-204, 2019年
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Inhibition of Glutaminase1-dependent Glutaminolysis Improves Pathological Cardiac Remodeling.	2022年3月	第86回日本循環器学会学術集会
Inhibition of glutaminase1-mediated glutaminolysis ameliorates angiotensin II-induced cardiac remodeling.	2021年9月	第5回日本循環器学会基礎研究フォーラム
Inhibition of glutamine anaplerosis improves Ang II-induced cardiac remodeling.	2020年12月	第37回国際心臓研究学会日本部会, Japanese Section Application for "Young Investigator Award"
III 学会等および社会における主な活動		
2015年4月～現在	日本内科学会	(2016年9月～現在：内科認定医)
2015年4月～現在	日本循環器学会	(2023年4月～現在：循環器専門医)

市野

専任教員の教育・研究業績

所属 医薬細胞生物学研究室	職名 助教	氏名 市野 琢爾
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容

Kanade Tatsumi, Takuji Ichino, Natsumi Isaka, Akifumi Sugiyama, Eiko Moriyoshi, Yozo Okazaki, Yasuhiro Higashi, Masataka Kajikawa, Yoshinori Tsuji, Hideya Fukuzawa, Kiminori Toyooka, Mayuko Sato, Ikuyo Ichi, Koichiro Shimomura, Hiroyuki Ohta, Kazuki Saito, Kazufumi Yazaki	論文	"Excretion of triacylglycerol as a matrix lipid facilitating apoplastic accumulation of a lipophilic metabolite shikonin" Journal of Experimental Botany, 74 (1), pp104-117 (2023), DOI: 10.1093/jxb/erac405
Shingo Kiyoto, Takuji Ichino, Tatsuya Awano, Kazufumi Yazaki	論文	"Improved chemical fixation of lipid-secreting plant cells for transmission electron microscopy" Microscopy (Oxf), 71 (4), pp206-213 (2022), DOI: 10.1093/jmicro/dfac018
Takuji Ichino, Kazufumi Yazaki	総説	"Modes of secretion of plant lipophilic metabolites via ABCG transporter-dependent transport and vesicle-mediated trafficking" Current Opinion in Plant Biology, 66, 102184 (2022), DOI: 10.1016/j.pbi.2022.102184
Takuji Ichino, Kazuki Maeda, Ikuko Hara-Nishimura, Tomoo Shimada	論文	"Arabidopsis ECHIDNA protein is involved in seed coloration, protein trafficking to vacuoles, and vacuolar biogenesis" Journal of Experimental Botany, 71 (14), pp3999-4009 (2020), DOI: 10.1093/jxb/eraa147
Kanade Tatsumi †, Takuji Ichino †, Noboru Onishi, Koichiro Shimomura, Kazufumi Yazaki (†These authors contributed equally to this work)	論文	"Highly efficient method of <i>Lithospermum erythrorhizon</i> transformation using domestic <i>Rhizobium rhizogenes</i> strain A13" Plant Biotechnology (Tokyo), 37 (1), pp39-46 (2020), DOI: 10.5511/plantbiotechnology.19.1212a
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ムラサキにおける細胞外ナフトキノンと分泌型ペルオキシダーゼの生理的役割	2023年3月	第64回日本植物生理学会年会

薬用植物ムラサキにおける2つのハーフサイズABCG輸送体の解析	2022年9月	第39回日本植物バイオテクノロジー学会（堺）大会
ムラサキにおけるシコニン分泌機構の解明と植物の輸送能力の改変にむけた利用	2021年9月	第33回植物脂質シンポジウム
ムラサキにおいてシコニン生産特異的に発現するLeDI-2の機能解析	2019年3月	第60回日本植物生理学会年会
Molecular basis for secretory trafficking of lipophilic metabolites shikonin derivatives in a medicinal plant <i>Lithospermum erythrorhizon</i>	2018年7月	The 23rd International Symposium on Plant Lipids
III 学会等および社会における主な活動		
2010年～現在	日本植物生理学会会員	
2017年～現在	日本植物バイオテクノロジー学会会員	
2022年～現在	日本農芸化学会会員	
2022年～現在	日本植物脂質科学研究会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属	医療薬学研究室	職名	特任助教	氏名	田中 亨
I 教育活動					
教育実践上の主な業績		年月日	概 要		
1	教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 卒業研究	2020年4月～	医療薬学研究室に配属された4, 5, 6年生を対象に卒業研究の指導を行なった。研究の背景や研究方針などを丁寧に説明し、理解を促すとともに自ら考えて研究を進められるように工夫した。		
	実務実習事前実習	2020年4月～	実務実習に向けて、疑義照会の流れや薬剤師としての対応をグループディスカッションやロールプレイを通して学んでもらうように指導した。		
2	作成した教科書、教材、参考書		該当なし		
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4	その他教育活動上特記すべき事項		該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名		種別	内容		
Tanaka T, Izawa K, Maniwa Y, Okamura M, Okada A, Yamaguchi T, Shirakura K, Maekawa N, Matsui H, Ishimoto K, Hino N, Nakagawa O, Aird WC, Mizuguchi H, Kawabata K, Doi T, Okada Y.		論文	ETV2-TET1/TET2 Complexes Induce Endothelial Cell-Specific Robo4 Expression via Promoter Demethylation. Sci Rep. 8(1):5653 (2018)		
Harada Y, Tanaka T, Arai Y, Isomoto Y, Nakano A, Nakao S, Urasaki A, Watanabe Y, Kawamura T, Nakagawa O.		論文	ETS-dependent enhancers for endothelial-specific expression of serum/glucocorticoid-regulated kinase 1 during mouse embryo development. Genes Cells (2021)		

Tanaka T, Sasaki N, Rikitake Y	論文	Recent Advances on the Role and Therapeutic Potential of Regulatory T Cells in Atherosclerosis, J Clin Med (2021)
Kawauchi S, Mizoguchi T, Horibe S, Tanaka T, Sasaki N, Ikeda K, Emoto N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	Gliovascular interface abnormality in mice with endothelial cell senescence. Glia. 71(2):467-479 (2023).
Shima Y, Sasagawa S, Ota N, Oyama R, Tanaka M, Kubota-Sakashita M, Kawakami H, Kobayashi M, Takubo N, Ozeki AN, Sun X, Kim YJ, Kamatani Y, Matsuda K, Maejima K, Fujita M, Noda K, Kamiyama H, Tanikawa R, Nagane M, Shibahara J, Tanaka T, Rikitake Y, Mataga N, Takahashi S, Kosaki K, Okano H, Furihata T, Nakaki R, Akimitsu N, Wada Y, Ohtsuka T, Kurihara H, Kamiguchi H, Okabe S, Nakafuku M, Kato T, Nakagawa H, Saito N, Nakatomi H.	論文	Increased PDGFRB and NF- κ B signaling caused by highly prevalent somatic mutations in intracranial aneurysms. Sci Transl Med. 15(700):eabq7721 (2023).
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
特定波長の紫外線B波による動脈硬化抑制効果とその機序の解明	2021年3月	日本薬学会第141年会
Identification of specific wavelengths of ultraviolet B for preventing atherosclerosis and their mechanisms of action	2021年9月	第5回日本循環器学会基礎研究フォーラム
動脈硬化抑制に有効な紫外線B波の波長の特定とその機序の解明	2021年10月	第53回日本動脈硬化学会
Development of a novel anti-inflammatory phototherapy against atherosclerosis	2021年10月	第19回国際動脈硬化学会
III 学会等および社会における主な活動		
2012年6月～現在に至る	日本薬学会会員	
2015年3月～現在に至る	エビジェネティクス研究会会員	
2021年3月～現在に至る	日本動脈硬化学会会員	

専任教員の教育・研究業績

所属 病態生化学研究室	職名 特任助教	氏名 安宅 弘司
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		なし
2 作成した教科書、教材、参考書		なし
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		なし
4 その他教育活動上特記すべき事項		なし
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
安宅弘司	著書	摂食障害、脳腸相関UPDATE、臨床栄養 142(6) 875-883 2023. 摂食障害と脳・腸・腸内細菌叢相関との関連について最新の知見を総説した。
Kusumoto J, Ataka K , Iwai H, Oga Y, Yamagata K, Marutani K, Ishikawa T, Asakawa A, Miyawaki S.	原著	Malocclusion impairs cognitive behavior via AgRP signaling in adolescent mice. Front Neurosci. 24;17:1156523. 2023 doi: 10.3389/fnins.2023.1156523. eCollection 2023. 思春期マウスでの咬合不調和はAgRPシグナルの活性化を介して認知認識機能を低下させる。

Ataka K, Asakawa A, Kato I.	原著	Rubiscolin-6 rapidly suppresses the postprandial motility of the gastric antrum and subsequently increases food intake via δ -opioid receptors in mice. Mol Med Rep. 26(5):340. 2022 doi: 10.3892/mmr.2022.12856. ルビスコリン6はデルタオピオイド受容体を介して食後期胃運動を抑制したのち摂食量を増加させる
Iwai H, <u>Ataka K</u> , Suzuki H, Dhar A, Kuramoto E, Yamanaka A, Goto T.	原著	Tissue-resident M2 macrophages directly contact primary sensory neurons in the sensory ganglia after nerve injury. J Neuroinflammation. 18(1):227. 2021 三叉神経結紮モデルマウスにおいてM2マクロファージは神経節に直接コンタクトし感覚神経障害を修復する。
Rokot NT, <u>Ataka K</u> , Iwai H, Suzuki H, Tachibe H, Kairupan TS, Cheng CK, Amitani H, Inui A, Asakawa A.	原著	Antagonism for NPY signaling reverses cognitive behavior defects induced by activity-based anorexia in mice. Psychoneuroendocrinology. 126, 105133. 2021 神経性食欲不振症(拒食症)モデルマウスにおいて神経ペプチドY (NPY) 情報伝達を抑制することで認知認識機能の低下を改善する。
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
なし		
III 学会等および社会における主な活動		
なし		

専任教員の教育・研究業績

所属 微生物化学研究室	職名 特任助教	氏名 清水涼平
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
アクティブラボ	2021年4月～	1～3年次生を対象に主に生化学的な研究方法について指導を行い、研究の面白さを感じてもらえるように工夫している。
卒業研究	2021年4月～	微生物化学研究室に配属された学生に対し卒業研究の指導を行なっている。学生たちの論理的な思考力の向上に努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Keiichi Ishihara, Eri Kawashita, Ryohei Shimizu, Kazuki Nagasaawa, Hiroyuki Yasui, Haruhiko Sago, Kazuhiro Yamakawa, Satoshi Akiba	論文	"Copper Accumulation in the brain causes the elevation of oxidative stress and less anxious behavior in TslCje mice, a model of Down syndrome." Free Radic. Biol. Med., 134, 248-259. (2019)

Keiichi Ishihara, Ryohei Shimizu, Kazuyuki Takata, Eri Kawashita, Kenji Amano, Atsushi Shimohata, Donovan Low Takeshi Nabe, Haruhiko Sago, Warren S. Alexander, Florent Ginhoux, Kazuhiro Yamakawa, Satoshi Akiba	論文	"Perturbation of the immune cells and prenatal neurogenesis by the triplication of the Erg gene in model of Down syndrome." Brain Pathology, 30, 75-91. (2020)
Ryohei Shimizu, Keiichi Ishihara, Eri Kawashita, Haruhiko Sago, Kazuhiro Yamakawa, Ken-ichi Mizutani, Satoshi Akiba	論文	"Decrease in the T-box1 gene expression in embryonic brain and adult hippocampus of Down syndrome mouse models." Biochem. Biophys. Res. Commun., 535, 87-92. (2021)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ダウン症モデルマウスにおける転写調節因子T-box1減少の病態意義に関する研究	2018年11月	日第8回4大学連携フォーラム
ダダウン症モデルマウス成体期表現型に転写因子 Ets-related gene の3コピー化が及ぼす影響	2019年3月	日本薬学会第139年会
Disturbed expression of inflammation-related genes caused by a triplication of Erg gene in the prenatal developing brain with Down syndrome.	2019年6月	The 3rd International Conference of the Trisomy 21 Research Society
分泌因子neudesinの脳梗塞における生理的役割の検討	2022年3月	日本薬学会第142年会
脳梗塞のミクログリアにおける分泌因子neudesinの病理的役割の検討	2023年3月	日本薬学会第143年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2015年～2021年	Trisomy 21 Research Society会員	
2018年～現在に至る	日本薬学会会員	